春毎に時をさがへず咲匂ふ花ざかりもまだきより足曳の嵐にさそはれつゝ大空の雪とちり行く水の泡と消ゆるはいとはかなき世の習ひぞかしそが中にまれ〳〵八重山ゐ少に盛をとゝめて人にめで興ぜらるゝもあるは皆其花の命の永き短きおるべし人も又然り我師錦織の屋は大人のいろせの君過し年かの嵐にさそはるゝ花よりもろく三十は齢あして身まろられぬるをそはかみ誰も皆惜しみ悲しみさりしとか此ぬしいとけなうりしより縣居の翁は教をうけて古への文をよみ古へぶりの歌をよくせらるしかゞ我師と共に今も世に榮えおはしおゞ盛久しき花の如いづれをいづれと世に仰ぎもてはやすべきをいとも口惜き業なりやせめて年頃をへて朽殘る言の葉の人もすさめぬ木隠れにちりぼひさるをそれをぞに又は嵐にまかせじとてこさびかれこれ書つめて香ぐわしき名を櫻木に留めてかく一卷とゝなしぬる事は嬉しさにもいさゝか卷はゑりへに筆をとりぬるおなむ

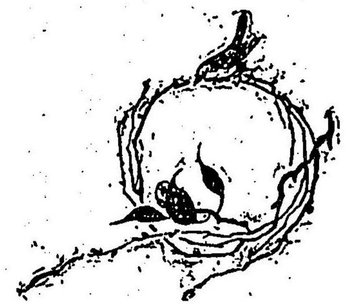
平景寛

父の世に在せし時さゝ浪の屋は主人君長尾景寛ぬしなどとひ來まして昔今は事ども語らゐるゝついでに父のはさまはせしやう吾せうと春郷の心をこめて物したりつる歌ども一卷殘りさるゞ徒らにゑみのやどりとおもし果ん事の心苦しさよと打歎き給ひしかゞさりやゑうひめ置かせ給ゐむもゐなかるべし板にゑらせて世おも傳へまじ物をと口々云ゐるゝお父打ゑみ給ひてさらゞ任せ奉らんともかくもはうらひ給へとおりしかゞ則ちもてかへりてとかく考へ正されしを父は病おつしくなりまさり給へるに誰もよろづ打かれにけりさるを父身まかり給ひて月日經しかゞ今しもやゐとてゐりさちてあつかひ給ふゞ吾もよそに見過しがさくて卷は末にかいつくる一おとかくなむ

文化の八とせ水無月

村田のさせ子

村田春郷家集 終



大船楫取魚彦雜集

明和元年甲申霜月十六日楫取の魚彦がりつどひてその所の歌とてよめる

香取宮　あがたぬし

かとりがた千重の潮瀬を塞上て浪穂ふたてる神の御門かも

中臣のかとりはふりがいはふなるはこ杉の上ゆ雪降ゆけり　千陰

海上潟　あがさぬし

ゆふされバうながみがたのれきつ風雲井ゆ吹て千鳥鳴なり

香取浦　魚彦

さよふけて兒島のかこのこゑすなり海上がさゆ月出らしも

夕されバ去たけ吹らし香取船ふはしまがくれこぎ歸る見ゆ　俊明

鹿島崎　千陰

あられふり風さゆる夜ゐ鹿島潟かこぞ呼なるをた中ゐして

鹿島がたなごろさかしもさ衣のをつくば風やいさく吹らむ　美樹

朝日子の光たゝさすかしま潟めでていませるなゝの上此宮　春郷

信太浦　奈毘古

玄さの浦けさ漕來れば香取の海みのわたの沖ゐ網曳する見ゆ

一とせ人々あがたゐに集ひて古き都を思ひてよめる　賀茂縣ぬし

み芳野を吾見ふくれば花ちりぎつたぎの都ゐ花ちりぎる　河津宇万伎

み吉野のあきつの櫻さきくあれど霞をりきされる大宮どころ　藤原政備

日をふとも散ずもあらなん三芳野の瀧の上の櫻見る人此爲　大神眞潮

さはのうちゝ花咲みてり然れどもふりにし里ゝ人目乏しも　藤原五百槻

櫻花さくやさゞ爲ふるさとの蜻蛉の野邊ゝ人もあらなくゐ　藤原禍雄

いゐしへの大宮人のかざしけんみそのゝ櫻見ればかなしも　時盈

たれ見よと今も咲けんさゝなみの大山守のもりしさくらゝ　源百枝

櫻花さきれさかりゐなりぬればふりし都のおもはゆるかも　源亮滿

うつるへに人ゝ見えねど故郷の櫻のみこそむかしなりけれ　楫取魚彦

櫻花さきをゝれどもさゝあをや志賀の都ゝひとゐとも世世

まれゐぞゐとふ人もなき古へのみやこは花ゝ色もかはらで　　山菅

さかりなる花の色香ゐわりなくも荒ゐし里をかもはゆる哉　　い　ち

つれ〴〵と見るゐ昔ぞ去のぼるゝ人なき里の花はさうりゝ

彌生の廿日あまり四日あがたねに人々つどひて

旅ゐ花を見る　　政備

花見つゝ旅路を行けゞ幾ら日を經るとも更ゐ思はえなくゐ　　百枝

風ゐちる花

あし曳の八重山さくら春風の吹ゐしふけゞちりゐちりつゝ　　高豊

道ゐちる花

散ぬれゞちりとゐりぬる花ながら花をゞいかで踏て過べき

さくら花ざはゐちる山越來れゞ我のる駒ゝつきげとなりぬ

水ゐちる花　　宇万伎

さゝゐをやひらの大わた風吹々ゞみなわゐうかぶ山櫻かも　　古道

夜ちる花

大かさもみらくすくなき櫻花夜ゐかくれてもちりゐける哉　　五百槻

谷ゐちる花

山風ゐちり來る花のかのれのを谷ゐゝ春とかもふべらなり　　眞潮

野ゐちる花

いなび野もゆき過なんを櫻花ちりかふ道ゐなづをたりけり　　な　ひ　こ

浦ゐちる花

大ふねのかとりの浦ゐ花ぞちる息栖のかさゐ風たつらしも　　春郷

寺ゐちる花

かつらぎやゐさづま風の朝たちて豊浦の寺ゐさくら花ちる　　さ　や　ま　ろ

霞ゐへだつる花

此ゆふべふりさけ見れゞひかつをゐさける櫻を霞こめたり　　時盈

野邊の花

さくら花さきぬる時い飛火野の野守がやどゐ一夜ねぬべし　黒成

山ミな花さけり

天雲のむかふすきはみ照るまでゐ峰ゐも尾ゐも花咲ゐけり　千蔭

うま人の花をめゞ

わが國の花さきてりいさ子ども廣瀬の森ゐ風まつりせよ　おなじ人

やいつて花をめゞ

黒木とりかやとるわざのいそしきも忘るばかりの山櫻ゐ

五月六日宴菅原姓之舍時作歌

賀茂眞淵

橘のもとゐ道ふみゆきかへりもとつ人ゐもあひにけるかも

ゐし曳の岩根菅原いくつなつ法げりゆくらんいはねすが原　狛諸成

不知火の筑紫の國も駒の爪津輕の人も天皇の大宮手振到ら

はぬ事しなければ鳥が啼東大城につどひ來てゐれが幸々歌

ゐよひゑらぎもすれどはしきやし上代のみやび慕ふなる此

友垣を嬉しみと戀ひ集へつゝあしさゐゐ玉がしはとり夕さ

れば橘かざしうたげするけふの手ぶりのとをしくもあるか　源佐益麿

騎射（うまゆみ）の歸りあるじぞゐもはゆるまずらをれ友けふし遊べば

五月來て射るやうま場のうま弓の起伏ゐこそ思ひて有けれ　菅原盛英

昨日といひけふの馬場の諸きはひきはひて君が宿ゐ來ゐけり　藤原秀信

不知火の筑紫を出てつくし人のけふの遊ゐゐふゐとをしき　源信萬麿

百たらず八重咲く花の紫陽花の淺らゐけふを思ひやいせむ　楫取魚彦

鳥が啼東大城の御門はも多ゐ有ども大御門守賜へる豐國の　藤原維寧

雄倉の君ゐ仕ふなる臣い多けど菅原の此主こそい眞黑太刀
腰に取帶石鞆を背びらに負て駒の爪筑紫を立て遠々ゐ參到
れべものゝふの八十伴緒を率て仕奉れる日此守夜の守の暇
しもいくばくもあらぬを天皇の大國ゞらと片へゐい雄建び
しつゝ片へゐい雅言せり風流たる古ゐし友と菖蒲草かつら
ゐ懸て歌ゐよひ酒ゐらぎする五月のけふい忘れじ丈夫の伴

反歌

皆人の玉ゐぬくとふ常世もの長しへゐゞもと思はゆるかも　源時益

やちまさゐたてる橘かぐはしみ行くも歸るも過がてぬかも　源兼樹

故郷もけふい近くぞおもはゆるゐなじ筑紫の人ゐゐへれべ　藤原朝垣

たちばなの下てる宿いとこしへゐ榮えぞゆかん今も見る如　橘春樹

古しへの馬場ゐ乃えて益良夫のけふの遊びぞ樂しかりける　多萬伎

菖蒲草かつらゐかけて時鳥めづらしきねをも今きくらしも　ふぢ子

かさ糸のゐはで過して聞つるをゐはをゐよれる時も有けり　いくめ

よき人のめでつるけふのゐやめ草かつらゐ懸て遊すらしも　葛子

めづらしと思へるならし時鳥唯こゝゐしもかさらへるゐり　うさ子

めづらしな雲井のよそゐ思ひこしもと時鳥けふぞかさらふ　ゑげい子

酷ともゐ遊ぶなりけり物の音ゐ聲うちそはる山ほとゝぎす　きよい子

松浦潟まつとないひそ相模なるゐしがら山ゐ關もあるもの

風のとの遠ささかひゐ年へてもおもひすれせぬ事の嬉しさ　菅子

ゆかしくも思はゆるかも年ふりし友ゐゐふちの花さゝる宿　知元尼

五月雨の雲まゐ見ゆる夕月のたてるばかりをなりゐし物を　とやま

年毎ゐかくもあらぬか立花のかげふむ道のゆきかへりつゝ　いは野

思ふ事なき人をめるゐさりゐゐ行過ぎがたき物の音ぞする　山すゞ

をちかへりかくや五月の時鳥ともゐきく日はめづらしき哉　らん

むさし野の夏野を分て一もとの草をゆかしみ尋ねきゐけり　くら

垂乳根の母ゞかふゐのこもりにし心はるくる今日ゐも有哉　すがね

皆人の玉ゐぬくなる常世ものとこしへゐもとおもはゆる哉　まち

いつゐとゐもかぬものから呉竹のちよの始ゐ夏ゐぞ有ける　かつら

かつらゐも老つゝ遊ぶゝ此宿の長きためしゐひける菖蒲も　つら

同じ頃みな人つどひて

藤ちる　薫梅子

藤波のうちゝる時いゐちたぎつ瀧つ糸こそおむらさきなれ　清瀬

でる日

水無月の風吹たえて照日ゐゐ水のおもゞゐかひなかりけり　外山

蚊やり

賤がやいなべて蚊やりをたきぬらし遠近わかず烟くゆなり

若　葉　　美　樹

わぎもこが植し桑の木ゑげれどもつむ人もなし植し桑の木

夏のはて　　縣　主

てれる日をひとふ〳〵と思ふまゐ年の半ばたちゐけるかも

鵜　川　　奈　毗　古

いざこども此日暮なばかゝりさし心なぐさゐ河瀬たゝまし

賀茂のうし身まかり給ひて後縣居ゐ落とまれる物ば中ゐ人々の歌もあるをいよゝちりうせなんと書集むる序ゐうしふきてえまゐらせしかばれゞ歌をも打かぼえゝるまゐ〳〵聊ゐ記しつ

春の始ゐ雪の降りける日よめる　　あ　ひ　て

さきぬやと我もふ梅を白雪のちると見るまで降ゑきゐけり

春やきぬ冬や殘れるゐまたゝび降ゑく雪ゐうぐひすなくも

柳をよめる　　蛙おくさよき河原の川ばべの ゑだり柳ゝ見れどゐかぬかも

春やまとを思ひてよめる

山つみのゑつぎとまつる三芳野のよし野の櫻いまも咲らん

二月雪のふりける日

ささらぎのなかばゐなれど花ゐそき梢を雪ゐかして見る哉

福島のさちをが都へ行て久しく歸り來ざりければいひやりける

足がらの八重山こえて都べゐなきてゆうなん君よぶこどり

打はらひ君がゆきけん雪とのゑ花のちるまで成ゐけるかも

葛飾の里の藤をめづる長歌ならびゐかへし歌

霞立つ春ゝ過れど時々の心ともしも野邊見れば卯木花さき

里わにゝ藤波ゐはひ足曳の山時鳥立くぎて初音鳴ぬと里人

の吾ゐ告ればはしけやし吾妻の子も人妻もあともひたてゝ

ひゞ鳥の引つゝ行けば武藏なる大河邊よりかのみゆる下つ

ふさなるこちゝのあがたも見つゝゐは鳥の葛飾小川かは

ばやり棚おし小舟芦間より漕そけつれば鳥が啼ゐづまの都

榮えます御代のゑるしと出してふ龜井戸の里ゐいはふなる

神の御前ゐ幣まつり拜みまつりてそこ見れば森も ゑみゝゐ

藤波のとをゝゐ咲て池水底さへゐはひ見る人のうをも照
るまで盛なる藤波の花ゝ見れどあかぬかも

反　歌

池水のそこゐも匂ふ藤波のなをゐ見えじやけふのさかりを
たれめつる人まつからゐ吾宿のはな立花のちらまくをしも

夏の歌　いゐし年の五月雨の頃妻のみまかりしを思ひて人をとぶらふ旋頭歌

時鳥きけばさぶしもながなくなべゐ五月雨のふりゐしてと
も思ひ出らめ

同じ心を　五月雨ふり出てぞなく時鳥獨あるきをがわびつゝうねん

七月七日の夜の歌

かゝなべていつかとも思し初秋のけふの今宵ゐ成ゐける哉
我せこを待つゝをれば天の川はつゐきかぜゐひれ吹かへす
秋風のすゞしくもあるか天の川みふねよそひて今や出らむ
天の河かは浪いかゐ高ければ年をへだてゝつまこひをらむ
越がてゐいたちなげゝばいとゞしく天の河原ゐ霧さち渡る

こよひのをはすべき袖を君待つと天の川らの霧ゐ去をりつ
天の川浪たち去きて君來ずばあら磯まきてひとりかもねむ
たえて來ざりける人の許へ七日の夜ゐいひ遣はしける
待つ程ゝ久しからめど彦星もたのめしまゝゐとふてふ物を
人をとひけるゐ女郎花植けるを見て
秋風ゝやゝ肌寒くなりゐけりをなへしゐぞ宿をからまし
旅ゐゐりて雁の鳴けるを聞て
夜を寒を雁ぞ鳴なるふる里のかとりのわたり鳴て來つらむ
故郷をこひつゝをれば くさまくら枕の上ゐかり鳴きわたる
旅ゐゐりて　旅ゐして物思ひをれば くさまくら人まつ虫の聲ぞわびしき
旅ゐして月をよめる
今宵のをてる月ゐしも有なくゐ更行く夜半をいねがてゐする
故郷のたゝこゝもとゐなりぬるか見馴し月の影のかはらぬ
わぎもこをおひつゝをれば大船の香取の方ゆ月さしのぼる
とふ人も宿もかはれど故郷ゐかはらぬものゝ月ゐざりける

長月十あまり三日の夜あがさゐふて

月夜よし夜よし此夜を思ふどち鳥いなくとも遊びてもかむ

八月望は夜空のいたく曇りければ

よき人もこゝあつどへり月見むと云なとの風よ雲吹はらへ

五百重さつ雲も絶間のなくやいと月待つ程ふ夜ぞ更ふける

望の夜人々訪來りませるをよそふ在ければむかしく歸るよし唐歌などうきてふき給へり

後ふ歸りて獨おもふ

來し人の心も去りぬいたづらふ歸せるあとの月を見るとて

八月

ぬば玉の月かたぶきぬ武藏野ふ立さゝふべき山もあらなむ

山の端ふかさぶく月を洗しむ間に水底の影もいづちふけむ

おほせどとふよりて長月の頃甲斐は御山ふ行く人を送りて

白菊のさける山路の人まさばとれもちとせをふる心地せむ

神無月の黃葉をよめる

山風のちりまがはせる紅葉かも歸らん方の道も去らなくふ

人の許ふて　谷川の浪のと高しふひはりの筑波のこねふ去ぐれふるらし

明和三年十二月伊賀の少將は君の五十の御賀ふ

常磐なる伊賀の山邊のいかし代を君が去くべき限去らずも

い　は　ひ　苔のむす岩はふおふる松がねの遠く久しき代をぞへぬべき

近江の國日野なる中根の何がし身まかりし頃彼國ふ行んなど契りし事を思ひ出てよめる

あふみぢと頼めし事い空しくてなき人こふる日は積りぬる

明和六年十月つごもりふあがたゐうし身まかり給ひて同じ去も月の三日ふ葬なむとする

前の夜の枕べふ夜すがらをりて

賀茂の吾うしはやさもらへどことひまさず言とへど答へ

まさず賀茂のあがうしはやかもの吾うしはや

みそかふ人をおふといふ心を

こもり江ふ隙なく生るねぬなはは苦しくも有ゝ去たふ戀れば

源のもゝえが妻を外ふまを置て折々ふ行通ふと聞ていひやりける

人やりの道ならなくに別れ居て思ひわびつゝ妻とひすらむ

さふることをよめる

女郎花咲や岡邊のかりぶしのひと夜のからふ袖のつゆけき

さふるこの名をよめる

笹の戸のさやぐ荒野ゐかりはして怪しくもあるか夜の秋風

近江此國なる人の許より文おこせたるゐ返り事すとて

言問ひの山川越てゆきかへべふをといふべも名づけ初ける

ゐふみちにありといふなる鏡山まさめゐ君を見る由もがも

知る人となりて幾程もなく故郷へ歸る人ゐ

久方の空ゆく雲のゆきかへりかたらふまなく別れぬるかな

明和五年霜月十七日ゐ古言梯ゐつめをはりて人々集ひうたげすとて

大船のかとりのゐまのゐはけなきかも石の上古き世のこと

今刈えしゐかきつもはのゐとやへつもはのゐとや

明和七年とらのむつきはさちまりむゆかえるし終りぬ

かとりの魚彦

楫取魚彦雜集終

泊酒舍集序

夫歌者心之華也故發於情性出於自然而後可以感神明動人心萬葉古今集等所載是也後世作者不乏其人然或志高而才短或才富而志鄙其所吟詠務發新奇屈曲情性而爭其巧譬諸剪綵之花麗則有之而不見其韵致何況感神明動人心乎清水濱臣師平春海以善歌聞于世有年矣一時作者推之爲宗師余始覩其所吟咏而未知其爲人後及見其人觀其志不毫違其所吟咏所謂發於情性出於自然者歟於是屢延而相見未幾化爲異物余深惜之門人掇其諸咏將以傳之不朽請序於余所以有此序也時己丑菊月望後三日容安軒主人識

あはれ大なるかも空蟬の世中にある人さかきも賤しきも老たるも若きも
なべて歌よむといふばかりなるきはゝ我大人のふるおと學の道に勝れて
いそしかりし事を云れり大人氏ゝ清水名ゝ濱臣よび名を玄長といひて江
戸上野此岡の麓不忍池の汀にをゝしき家作りしみづからさゝなみのやと
なむおはせたりけるまゞいと若かりし頃織錦齋の翁につきて古こと學に
深く心をいれられしより文机のほとりさらず晝ゝ云みゝに窓のもとに星
の光を迎へよるゝもがらに燈火の影云らみゆくまで勤め明して聊も怠な
くとひ學ばれしこと二十年あまり終ゐをゝしくみやびたる古へ人のやま
と魂をさながらうまくおのが心とゝせられゐけり翁なくなりて後ゝ世中
の古こと學するともがらかはく此大人につき從ひぬゐのれも始めて大人
の教をうけしより言葉此園にあさり文の林をたどるといへども固より才
拙きが上にものうき心くせのともすれば立添ひて怠り勝にのみ明し暮し
しを今よりゝ六年前此秋うし病にわゴらひて八月十七日といふに五十ゐ
も足らぬ齢ゐしてはかなくなられしかゞ我どちの上ゝ更ゐもいはず天の
下此言此葉人誰かゝなげき惜まざりし然るにおたび光房等ま心にあひ計

りて年頃大人のよみおかれし歌ども撰びとゝのへ梓に云るとて事のよし
卷のはしに云るしてよとあれどおのれなまさかしらに物云り顔して筆と
らむゝよそのみるめも苦しくかつゝなき大人のゐもてぶせならむとかへ
さひすまへどいかゐもゆるさゝれゞつゝおき言の葉にくだ〳〵しく書き
云るしぬ

文政十二年秋九月　　源　政　醇

泊酒舍集抄

清水濱臣

處々立春　花鳥のおのづからある暦あや野もり山もりはるを知るらむ
元日のあした　けさにあけて思へば怪し昨日まで何を急ぎし我身なりけむ
新あ家作りける又の年の春の始に
　さゝ浪此霞をよするけさ見れば わが池どのに春ぞきあけり
春生人意中　世の人の心よりまづ立つ春を花うぐひすになにもとめけむ
山家初春　うぐひすの霞あむせぶ聲さむしうしろの岡に雪ものこりて
早春　朝けたく烟あぎはふかまどより民の軒端やうすみそむらむ
早春興　う杖つきかゆづゑとりて玉だれのをその内外に遊ぶ春かな
子日　ふる艸に新草まじる野邊にいでて老も若きもひく小松かな
若菜　春おとゝあ若菜つみあとなれくれば野守も我を咎めざりけり
澤若菜　はる淺き野澤の氷うちとけて芹つむばかりありにけるかな

霞隔山家　山がつのかこひかこはぬまばら垣春ぞゆひつゝけゝる
霞隔水郷　舟よばふまきの島人こゑ〻して八十瀬霞めり宇治の川ゴら
雪巣鶯　世のなかは花にこゝろやちらざらむ雪のふるをにてもる鶯
春來鶯遲　よの中に梅さきてとやかもふらむ春を急がぬ谷のうぐひす
山殘雪　つくば山は山のみ雪あをむなり鳥羽のあふみや氷とくらむ
田家殘雪　うづもれし去年の稻ぐきみえそめて苗代いそぐ雪のゑた水
雪消松綠　朝日さす岡べの松のゆきゑゴれ一木〳〵にはるを見せつゝ
梅村聞笛　ふく笛もはるの鶯ねふたてゝこゝろありがほの梅の宿かな
梅有遲速　南ちゝ北さくはどを日ならべて見れどもあかぬ梅ばやし哉
梅花を折りて人のもとへやるとて
　君が爲さ枝るもくやし梅花とはれて見せむ立枝なりしを
青柳風靜　霞ながらなびく柳の糸にこそあるかなきかの風ゝみえけれ
故郷柳　いにしへの春おもはゆる柳原こゝやみ垣のあたりなるらむ
樵路早蕨　これもまたあすのまうけと柴人ゝかけ路の蕨折やそぶらむ
春月　さく花に春ゝ光をゆづりふきてかすむ月かげおぼゝ心あり

春曙　昔より世々にかはらぬ心とて春いとあけぼのと人のいふらむ

崎春曙　我思ふ人にみせばやたち花の小そまが崎のはるのあけぼの

名所春曙　伊勢の海や霞をそめて出る日の潮瀬ふにはふ春ぬあけぼの

春雨　堇さき鈴菜はなちる春の雨に心あるひとや野路をわくらむ

歸雁離々　夕まぐれおくれ先だちゆく雁も同じ常世にかへるなるらむ

花　ひと年をさながら春になしはて、百代遊ばむ花かゞもがな

此世おい心とめじと思へども花やはだしとならむとすらむ

日本のはるの光にさきそめてもろこし遠くにはふはなかな

對花思昔　花をふみて惜みし春を數ふれば我も老木となりにけるかな

花の宴する所にまらうど來あひたり

君も舞へ我も歌はむさく花の醉を勸む る今日ふやいあらぬ

家にふみよむべきよし人々に契りおきたる日花見おとあながちに誘はれてたち出づとて

文机のもとにかきおきける

契りおきてよそにうかるゝ息も花ふいゆるせみやびをの友

田蛙　小田山にすだく蛙の聲のうちに小雨ふりきぬ春のゆふぐれ

暮春　散殘る花のあたりを尋ねても春いとまらぬ物おやあるらむ

花鳥のいろねを惜むおゝろこそくれゆく春を送るなりけれ

暮春月　あはれかく霞める空も今いくかあり明の月に花のちりかふ

兼思三月盡　昨日ちりけふちる花を惜むまに春もいつしか暮むとすらむ

春田　あさぼらけ遠山もとを見渡せば霞をかへす小田のますらを

送春如昨日　いつしかと梢みどりになりにけり保ふのみはなをのこして

尋郭公　初音きくひともあるらむ郭公わが尋ねゆくあとをたづねて

深夜郭公　郭公まだそのびねのほどとてや人を恋づめて後になくらむ

雨中郭公　むらさめの此夕ぐれいかならずとおもひしことよはつ時鳥

山寺郭公　法の師のあかつきおきの袖のうへに月をのこしてゆく郭公

早苗　いさこどもいはひて植よ住の江の岸の上田ゐ神のみとしろ

河五月雨　五月雨いつみの川の瀬を廣みひかぬに下る檜のつまで哉

水雞　やり水に流るゝ月のかげとめて夜ぞ涼しくなく水雞かな

夏山を越ゆとて

夏ぞちぬかげもありけり大比枝や横川ふ通ふ杉の恋たみち

家々納涼　夕すゝみ心へだてもなかゞきに蚤のあつさを語りあひつゝ

水無月ばかり山里にまかりて

山陰やいさゝ小河をとめぐれば夏にさられぬ宿もありけり

庭に井はらすとて

夏　秋　うき事のうへちぬ水にみそぎして名におふ宿と人ゐはれむ

阿波のからの殿のなり所に深川の濱邊にみそぎして心さへてそ涼しかりけれ

御秋する夕日のくだち秋見えて八汐路とはく波のよせくる

初　秋　露にはふ花野の宮の夕づくよ小柴がもとにあきゝ來ふけり

初　秋　荻　うきものゝかつ珍しき夕べかな軒端のをぎの秋のはつかぜ

秋色浮水　みそぎせしあと川柳ひと葉ちり二葉ながれて秋かぜぞふく

秋のはじめ山里人のもとへといふことを

今よりの夕べやわきていかならむ都も同じあはれなれども

幽栖荻風　待とりて軒端の荻の答へずば風だにとはぬもとゝならまし

萩　さをしかの聲はのかなる朝霧にゐはふや小野の秋萩のはな

路　薄　旅人のあさゆく小野の秋風に尾花かたよるつゆのはそみち

寒覺虫　みにおはぬ錦きたりと見し夢のさむる枕ふはたおりめなく

鹿聲兩方　枕よりあとより鹿のこゑすなりあかつき寒しとこの山かぜ

曉秋風　むしのねゝ淺茅が露にきえはてゝ夜半の嵐ぞ松ふれこれる

河邊秋夕　釣の糸にふく夕風のすゑみえて入日さびしき秋のかはづら

寺秋夕　法の師ゝあなうらむすぶ床ゝ上に紅葉かつちる秋のゆふ暮

稻かけはしたり

入日さすくろの稻づか夕かけて落穗たづぬるかし鳥のこゑ

閑居月　よのなかの浮べる雲にあはぬ身を羨しとやつきも見るらむ

荒屋月　陰もちぬ方もなきまで荒にけり果ゝをゝうを月にゆづらむ

紅葉　山ふかく秋のおはれを尋ぬれば鹿ゝおくねに紅葉ちりつゝ

暮秋眺望　みわたせば根白高かやうちがれて秋風さむし利根の川づら

九月尽　今日のみと秋を見はつる夕暮にいやはかなにもちる紅葉哉

秋河　かぜうつす入日の色も紅に穗たではなさくあきのかはづら

嶺時雨　あすまたで今日や麓にさゝるらむ雪となるべき峯のうき雲

落葉　ふく風の鞭をかはせる夕ぐれゝ木の葉の駒ぞ足をはやむる
靜處落葉　かし鳥ゝ聲ふきさそふ木枯におけぢさびしくちる紅葉かな
名所落葉　あすか風ふけどふかねど葛城や外山の紅葉きのふけふちる
關落葉　あさかぜにおろす木葉の錦きて關屋をいづる旅すがたかな
嵐吹寒草　秋だにも野分ゝ花にあらかりきまして枯生の霜をふくこゑ
月照寒草　月さむき枯生の小野の女郎花霜をいたゞくかげやはづらむ
寒松　もみぢ葉のかりのゐやひゝちりはてゝ誠の色と殘る松かな
寒樹交松　ゑもと原ゝてる紅葉ゝ色もなし雪まつ風ゝふとばかりして
冬朝松　夜のはどの時雨や松に氷るらむけさゝ嵐のえだにさわぐぬ
霰似玉　天少女かざしの玉の緒やたえしあられちるなり雲の袖より
野外雪　うも雪のふるから小野のを菅原いろなき色もめづらしき哉
湖雪　風早み矢ばせのゆきゝ舟たえて雪をわたるや瀬田ゝ長はし

雪のあした上野ゝ岡を見やりて

嶋このむ人に見せばや雪はるゝ岡べのまつよ池のみぎはよ

雪中鳥　名ゐ高き雪のみ山もゐもはえてなくね寒けき鳥ゝからゐゐ

鷹狩　荒鷹のさか羽の亂れかきならし今一よりときそひてぞ狩る
連日鷹狩　昨日よりけふゝ狩子の足よわし思へゞ鷹ぞつかもざりける
夜神樂　人長がかくるまそゆふ長き夜を霜ゝおくまで遊びつるかゐ
佛名　ひとゝせの夢うちさむる曉に三世のほとけの御名をきく哉
歳暮　梓弓いるゞ如くにゆく年ゝやといふまさへあらぬなりけり
歳暮衣　かたゝに春のまうけの衣くばり色もよしある梅がさね哉
歳暮炭竈　春をいそぐ炭積車かぜそひてけぶり少なくなるやま路かな
依花待春　徒らにすぎゆく年もをしけもどくれぜゞ花の春ゐはめや
送年筆硯中　一年を何にくれぬとかぞふれゞ筆とるわざの外ゐかりけり
冬山家　さびしさに烟をだゐと思へどもま柴ともしき雪ゝやまざと
初戀　我ながらわやしく袖ゝ露けきや戀といふものゝ習なるらむ
待空戀　おひといひてこぬゐ馴さる夜半も猶枕ゝ易くとられざりけり
蒙示現戀　貴船川たまちるばゝりありしよゝ昔もかくや嬉しかりけむ
變約戀　わが爲ゐ昨日さのめし偽ゝよそのまことゝ今日やありけむ
逢後恨戀　うき人をうしとも何ゝかあつべき逢られぜ逢らぬ昔ありせゞ

音信日已疎　さりともと猶頼まれし折々の言は葉さへやかれむとすらむ
絶後悔戀　さゞなさをおらさむとてぞ背きにし思へば終のよすがなりしを
戀思　我ながら我ぞあやしき二つおき心を千々になどくだくらむ
戀瀧　胸わせく涙の瀧はおとなしをところの名とも思ひけるかな
寄水戀　筧よりかけひにうくる山水のよそにもらさぬ中としもがな
天　千早振神代のまゝの大ぞらにいまも月日のかげかはらぬ
山路雲　立田路をこえていこまは山つゐき足とき雲よ我をとゞめなへ
窓雨晴　ばせを葉に村雨もぎて山窓の夕日さびしきまきの戸さいは
曉　曉のねざめやすけきわが身のな星をいたゞく人もある世に
閑曉　ありあけの月い軒端に傾きて四方あてゐなき戸のゝめの空
夕幽思　ましらなく奥山里の夕ぐれい思ひしよりもさびしかりけり
道　ひらゝてもうばらかからさち拂はぬ又埋もれむ野中ふる道
山路　あしふめば小石ふちくるつゐちをり山路い杖ぞ命ありける
船中見島　住は江は浦おぎはおれゆく舟のまはにむかへる淡路ぞま山
晴後遠水　雨降山ふもとに晴れてゆくをゞは末とは若ろき相模川かな

林幽不逢人　嵐ふくかゝ山かげの若もと原をしかのあとをゆく木葉かな
夕　旅　やどるべき里い麓ふ見えながらたどる山路に日い暮にけり
酒　美酒に我ゐひあけりかしらゐひ手ゐひ足ゐひ我ゐひあけり
書　百千卷ちまきのふみも尋ぬれば我身一つのをしへありけり
机　書見ると向ふ机はうへにこそこゝろの塵もはらはれあゝ也
杖　いつまでか杖つく人をよそに見て我い老ずと思ふなるらむ
簾　とゞすれば人の心のあしすだれすきま伺ふ世のならひかな
述懷　さまゝにありふる人の世中を思へばやゝき我身なりけり
寄水述懷　世につるゝ人は心のにごり水一人すむとゞもかひやなからむ
懷舊非一　何か其うきふしはみを數ふべきうれしきことゞもありし昔を
牧　童　あげまきがせたりは牛に尻かけて山のそば道笛ふきのぼる
白河少將殿にめされて源氏物語講じける時ろくは白金たまはりければ
　花さかぬ末野は小草をりふあひて惠はつゆのかゝるけふ哉
七月望の夜靜一尼ゞ葛飾は閑屋をとひて　閑屋い庵の名ゝて志づやとよべり
　中々につくらぬ庭ぞかもしろき月影ふのみとゞろえさせて

海ぬはとりゐ船のむれゐるかた

いはへ渡ちへ渡よするなぎさゐい萬代ふべき船もすみけり

蟷螂のゑに　ふろかなる虫とい口にいひながら誰も心にをのをとるらむ

かくれ簑かくれ笠のゑに

去かりとてゐめの下をゞぬゞれぬを何にうきみの隱笠きむ

長恨歌のかたに

むかひても心なぐさむよしゞなき柳のまいよ花のおもわよ

小田原人熊澤以齋いおのが心去りの歌人なるゞかりそめに睦びかはしてはや十年あまりになりぬ境況へだてさゝゞ年ごとにとひ見ることそなけれ雁のゆきかひい春秋かれぬかたみゐ音づれけり去年ぬ秋箱根の出湯ゐみにゆくとて道ぬゐよりにとひもぬして二日三日ゞ程足をとゞめ語らひしに昔ゐかはらぬいとをくやかなりけれゞ老ぬくもりや家に傳へし哥どよゝて贈りしを老ぬ身ぬ顧みがたくて此秋いなき人ぬ數にいりぬと傳へきく

ゐことわりぬ齡といいへどいと悲しくて

いく藥いへに傳へしきみなれどさらぬ命やまかせざりけむ

年ごとぬ野分ゐたへし翁ぐさなどこの秋の去もにかれけむ

世中常ならずといふことを

春秋のうつろふ色を歎くまにわはれ我世や盡きむとをらむ

病やう〳〵重くなれるゆゑ人の許よりとぶらひおこせたる返りごとかゝせゝるうちに

死出の山高ねに瀧の音きゝてふもとにたどる我ぞかなしき

いと弱くなりて後ぬ葉月十五夜月いとさやかなりけるにふしながら見て

まち〳〵し今宵の月のさやけさを心くもりて見るが苦しさ

かくて一日ゐきてゞ身まかられける

釋　敎　幾すぢと別れし法ぬみなかみも雪のゑ山の去ゴくなりけり

貴　賤　祝　言　錦とて麻とて袖ゐへだてわらじつゝむにあまるきみが惠い

白　秋ふかき入江の月のかげすみて尾花につゝくま野ぬ浦なみ

故翁い齡まゞ五十路に一つたらで身まからもしかゞ年頃ぬ言ぬ葉どもゝはうごぬやうにてゐりしを病やう〳〵おもりぬるはじめ正しゐかむの心ゐはしてかたへにゐやせて筆とらせられしかゞ程もなく終に空しきわと

の涙にかきくれて云ばしとさしおうせふけりさて後おもえず月日移りて六年の春秋もをぎぬるを同じ心ゐ助けおを友どちはかりてこたびまづ短歌八卷をついでなしをへつゝゐ下總國關宿茂云ちず久世此かう此とは此播磨國林田を云らを建部のかう此殿二君さちい翁ありし世にめされてまうのぼりし御たちの中にとりわき御かへりををかうぶりてなきあとまでも御恵此露深きによりかしこけれど御前ゐさゝげて高き御さだめをもうかゝひ御ばし書をさへ申し給はりてかく板ゐいゐ云らせさるなり此外長歌文詞消息のたぐひ又近き國々見ありかをし旅路の口をさび京此ぼりの道すがらかしこゐての歌さらでもおのづからにもれたるなどいつぎ〳〵ゐぞわつめ物をべきいでや唐やまとゝたらひたる御はし言葉どもにとゝ皆つきゐたるをおのれ更ゐ何をうそへいはむ只眞清水のたえをさゃ波の世々を重ねて流れ傳はらむ事を思ふよしの一言を云りへに書つくるになむ

文政十二年長月　清水光房

泊洎舍集抄終

松屋棟梁集抄

小山田與清

立春　たつ春ゝ唐土までもなづみなくひまの駒ゐや乘てゆくらむ

元日　めでたしと空言いひて祝ふかな老のくはゝる年のはじめに

弘化二年といふ年の十一月の十一日より重き病にふして既に危ふかりしをやう〳〵おこさりざまになりける睦月の朔日の日に

よみがへり又よみそへて六十餘り四年の今日の春にあふ哉

早春山　高ねゐい春もおまばでゐさ霞てしの白やまさなびきめぐる

野子日　子日する野の此方ゐい小松ひきゐなたに小萱かるもみえけり

島霞　物もなく沖はれわたる朝なぎにおゆ霞みけり伊豆の七しま

鶯　まらうどの園の鶯ゐとなへゐるじ顔して籠にいらふかな

朝鶯　ゐもひ寐此夢よりやゞて聞きつぎぬまくら此恋此々さの鶯

舊巣鶯　出て後ひがなきせしと鶯いたゐのふるすにてゐならすらむ

窓　鶯　まじらはで書よむ窓のさまさかに人くと鳥の驚かしなく

山家春雪　雪のはな梢にもろくなりにけりこゝ山里此はるの来るしか

梅　けふといへば千里ふきくる春風に百木の園の梅ぞさきける

梅花風部　宿にさかせよそに薫らせ梅の花さてもちらさぬうぜ心あり

梅移水　こゝろみに結ぶ手ぶさゝ薫らねどさながら映る水の梅がえ

釣たれしひじり顔して梅此花をられぬ水のかげをめで見む

野若艸　生たゝば嫁菜母子も来るからむまゞ品わかぬ野邊の若くさ

名所雉　遠近にきゝす鳴なりおのも〳〵思ふかた野の妻やこふらむ

雲雀　何事を雲井に野邊に告ぐとてか朝夕ひばりあがりふつらむ

春雨　ふるとしも思はぬはどの春雨に花わけごろもぬれかもる哉

花　とふもよしとはるゝもよし訪もせぞとはれぞ獨花みるもよし

待花　中々にさかば七日となげかれむ花まちすでも程がをかしさ

花のもとを遠のりの馬ゆく

武士があさりをはらふ出立に花もちるべくみちのとはれり

寺花　鐘のおとに驚きてさきおどろきて此はるもちる山寺のはな

遊糸　春の野に遊べる糸やあめつちの袋をぬひしあまりなるらむ

蛙　さもあらぬ面もちしたる蛙かな葉風の露のかしらうてども

暮春風　世の人の花ゆゑまよふ心さへはらひてすぐる木々の春かぜ

春野　錦しく野と見ゆるかな芝梅のはなのさかりの春のひところ

芝梅ゝはお紅色にして芝生の中にさけり坂東の人訛りて芝どめと

いひみちれく人芝どみといへり都人ゝかけといひ肥前人ゝちく梅

といへり漢名ゝ樝子なり又芝ろばけとて白き花さけるもありそゝ

野に生る事なし

春田　すきかへもそおにゝ慈姑こゝにゑぐ思もよらぬ田子が得物や

春舟　朝びらき大海の原をゆく舟のほの〳〵霞ひはるゝ來ふけり

卯月子規　時鳥ひとより先にきゝつるゝうのはな垣のあるじなりけり

早苗　ふしだちてとり遲れたるあまり苗物うき賤ゞ垣田なるらむ

山田早苗　水たらぬ山田の田溝せきとめて雨の日よしとさ苗とるなり

海邊夏月　月にきはひ鰹つり舟かへる哉蚊遣火くもるおのがとま屋に

梔子花　世中のうしおましきに口おしの花のみひとり笑ひがはなる

百合　なつかしく又かそろしく見てすぎぬ姫百合の花鬼百合の花
かたつぶり　風たゆむ葉末に角をさしのべて所えがほのかたつぶりかな
蓮風　にごりゐいろまぬ心もゑぼし世の風に従ふはすのなびき葉
池蓮　にごり世の風にゐやしくなびくかな池の心の清きはちすも
折ふれて　蛙かのれゑたり顔して池の面の蓮の葉舟にのりめぐるかな
夕顔　たちよりて主人をとへど夕顔いろらぬ顔わもさけな花かあ
扇風　さしてめし夜はも扇に事たりてよそは風をばまたぬ閨かな
蟬　さてき猶つれなしづくる青葉山いくたび蟬の聲ゑぐるらむ
荻風　何となく心のさわぐ夕べかなそよめきわたる荻の葉かぜに
山寺月明　世の塵のあとゐたえたる山寺に心すみゆくつきを見るかな
月前雲　さりとても隔てゐはてじ夜半の月いざ村雲の晴間まちみむ
旅月　それをのみなれこし友と旅のうさいらへぬ月に物語るかな
擣衣　御つき布うつ音ちかくきゝなれてすむや縣の四とせ五とせ
紅葉　白糸をむら染せりと見ゆる哉瀧にさしかはふ枝のもみぢ葉
庭紅葉　ゑ山べもさぞゐわふらむ我庭の植木のかへで紅葉してけり

暮秋　虫のねゐ木葉の底ゐかもかゐて庭あらはなる秋のくれかな
色　野邊見ればさき匂へども心からさびしき秋のいろ〳〵の花
初冬　時雨せし山の小春の空はれてれこる紅葉にかけも鳴くなり
谷落葉　もみぢ葉をゑがらみとめし谷川のゐせぎに氷る秋の色かな
山川氷　滞にせる細谷川もかとたえてこはりをむすぶ吉備の中やま
樋氷　年ふりし竹の丸樋のわれめより氷のえだぞさしいでにける
雪中雨　初み雪をかしき庭もさまかへて物そこなひの夕ぐれのあめ
冬里　よしもなきさまたげわさや里の子がまろばし捨し細道の雪
歳暮　今年また歌よみふみをよむ人のまねめかしくて暮にける哉
思不被知懸　我すがた走りくらべに負にけりくるれど年ゐ老いろもなし
　　もろともに聲うちあげて語る夜ゐ年も惜まず春もおもはず
　　たえずとふ誠をいかでゑらせなむ心のあとの庭に見えねば
冬夜待戀　さゝでまつ妻戸の隙の風ふけて涙もこはるふゆの夜のとこ
久戀　一夜だにたゆまぬ軒の松の風かくて千年ももものおもへとか
雨　むつかしき世にふる雨のあしとわびよしと喜ぶ人ごころ哉

雨の日八丁堤のやどりにて

ひとしきり雨ふく風に栗の實のはろ〳〵と落て土にこゑあり

杣　ともすれば人にひかるゝ我身かな朽木の杣に世をぞふれども

道　さまたげの新草村をおしなみてふきとはらなむ道の古かぜ

玉川兩岸百首の中に

關戸川　年つきゝ流るゝみづの關戸川せきとむべくもなき世こけり

登戸　さしよする舟よりかりて此ぼり戸の堤に出ばし月を見る哉

郷　北どのよ南どのよと語らふもやがてまぎるゝからうきの音

庭木　同じくゝおのが生出しまゝにあれなむまゐ口をしの庭此造り木

ふくろふ　殿ふりで人げまれなる庭の面の梢にすごきふくろふのこゑ

夕暮に雞の竹に雀のなくをきゝて

猿書　きゝとかゞ何かたるらむむら雀たけのまがきの夕ぐれの聲

とぶつきし椎の朽枝もろくして思はずかつる木のは猿かな

いにしへの昔の事もさだ〳〵と今たゞ今ぞふみよみて出る

もちながら見ながらやがてねし夢に猶たどらるゝ文の道哉

筏　厭ふともよきぢなき世によしやさはまじりて文を讀とはらまし

車　みなれ棹さしもなやまで山川の岩瀨いは淵すぎのいかだし

出ぬ車の中わけてせばがりいでし人やたれ、ひと

華頂宮の御旅の御所ゐ水戸の中納言の君まうのぼり給ひて御前にて御あそびわりける時

よみてゝさてまつれる

たぐひなき遊の聲のたゞしきにひとの心もうつらざらめや

さりとてもうき旅ながらおもしろき所々のわをられぬかな

旅

鈴木安寛が母の九十の賀に

此宿に南の風しや降るらむあるじのよはひかぎりなければ

春　無常　花の枝を墓に折さし是よりもはかなかりける人ぞとて泣く

寄雪懷舊　雪と消えし人の昔のあとゝへば年のみおほく積りけるかな

橘千蔭ゞ十三回忌に三島五百子ゞ對月思往事といふ歌よませけるに

何くれと思ひいでつゝ歎くかな靜まる夜はの月ふながめて

榮子ゞ追福の會の當座になき人を悲しみてといふことを

糸竹ゐ歌のむしろにこゝにねし入ゝと人ゐいひて歎くかな

男　子　をの子世に志をぞたてつべきはめそしらるゝあとゝい厭はで
法　師　歸依せられ世を過んとて身をやつしず〳〵手にくるもうるさからぎや
福　祿　壽　くだりこし南のはての翁星ひとのさちをぞいちにうらなふ
商　客　妻　今年はたむあしき闇やまもらまし遠ありきする人を頼みて
今　日　けふまでゝ玄なで在へし嬉しさや文み酒のみ世に住ひつゝ
人の心を　うしと恨みよしと頼むないつはりも誠もかはるひとの心を
移居亦世間　所こそ友こそ玄ばし改まれうき世のなかのうきゝはなれぎ
老　盛なる人のをゞさをいつのまに老のぬを人うばひ去りけむ
影　これも又いつの世までうそひぬべき我身と共にきえむ我影
世　おもてゝおゝわろび心も顯はさでことよがりをる世ぬ習かな
述　懷　心ふも身ゝまかせずてはだし多み世にふればふゞ悲しかりける
水莖のかきわけつゝもかづきせむふみ卷川ゝ底ふかくとも
折ふふれて　みがきつる我たましひの光をゞ包めや塵も目にたつる世ぞ
みづから著はせる書の奥に書つけける
世のもどきふひなむ筆のをさび哉おはれよしあの書や此書

去年の長月の始より心地常ならざりしゝ霜月此十一日に倒れふして病の床に年をおくり迎へ弘化三年の夏の始ゝおつしくなりまさりいゞ頼み少なく覺ゆるにひめもたる二萬卷あまりの書卷どもなき跡ゝてちりぼひうせもてそずれといと〳〵本意なきを常に御かへり見かゝふれる水戸の大城の殿さまに愁ひ申しゝに許し聞えさせ給ひけれゞよろこびにたへでおもを奉りてよめる

今よりゝのこる書卷なつの日も心すゞしきみちにいらまし

弘化四年の彌生の末つ方病おつしくなれる頃よめる歌の中に

崩るべき時ゝ至りぬ築成せしまなびの山もふみのたかねも

盛章髪をつがねしより早く大人の御さとしをうくること三十ちあまり五年になむなれりけるゝにし弘化の二年といふ年の神無月の頃ゆくりなく我家をしもとひ來ましてなからむ後のことなど何くれと語らひおき給ふついでにのたまふやう余もとより考證の學を事として歌文などゝ深く心も用ひざりしがさりとて年頃ものせる反故どもの煩はしきまで積りにたるをゑりとらむいとまだにあらねゞゑみのをみかとかねて思ひ捨たれし

さをが又あたらしき心もそひぬるをいかで春秋の序をだに拾ひとゞ打置きてよなどありそめのやうに語らひ給ひしが程もなく病の床にふし給ひやう〳〵わつしくなりもてゆきわくる年も同じさまにて今年弘化の四年といふ年の彌生の末つ方つひに歸らぬ道に門出し給ふい我友がらのなげき嘗へむに物なくなむかくて何くれのわざはて丶其まな子の與叔のぬしうまごの清常のぬしかの反故どもをとり集めて贈られつるハ同じ年の九月の末にぞありけるやつがれをぢおき學に何一つなしうる事もあらねど大人のまめやかにのたまひ置給ふ御心を背くべきよしもなくはた三十年餘の年月かゝふれるみさまのふゆを報いまつらむ千々の一つゐもといなみもあへずうけをさめてかさの如く拾ひ集めたれどそれはたゑどけなき限なるを人に見せむ爲ならねバ老の眼をゑぼたゝき凍れる筆をかみつゝ書き終りつるハ同じき廿はその二十日あまり五日の日おりけり

かきつめし落葉の上にまつ風のたてるひゝきをきくが悲しさ

猿渡盛章誌

松屋棟梁集抄　終

五家園家集抄

澤田名垂

若菜　賤の女がわけし雪まの寒けさも身をつみてゑる初若菜かな

谷鶯　さく花にうつるてふ名を惜めばやたにの戸さらず鶯のなく

竹間鶯　花さかぬ竹をねぐらの鶯も世ゐにげなきゐゑのいろかな

夜梅　あやなしと云る〳〵風の梅が香にさそはれ出る夜のおぼしま

遠村柳　ま柴たく軒端かをみて青柳のみどりぞけぶる遠かたのさと

春れうさ　軒ちかき柳のいとの眉ごもりいぶせきまでに霞むはるかな

餘寒　いつとてか風ハさゆらむ梅かをり月影かすむ春の夜ごろを

獄中燕といふ題をさぐりえて

つばくらめなるゝもはかな鳥のねをきゝゑる人もあらぬひとやに

夕花　まばゆさに折りてやん人のかざすらむ夕日ハ花の時雨ならねど

花のころ風の心地してこもりぬて

花ゐのみいとひしことよ者ゑらぬ宿ゐもかぜゝつらき習を
春此歌の中ゐ　うゑざりし身をゞ思はで今さらに花なき宿とかこつ春かな
落　花　ちりそめし今日ぞはじめて思ひゑる昨日を花の盛なりとゝ
彌生ばかり道ゆく人馬をとゞむといふことを題ゐて

雲　雀　駒とめてをちかた人の袖はらふ木陰や花のふゞきなるらむ
苗　代　春の野に遊ぶ雲雀よさのみなど思ひあがりて音をゞ鳴らむ
牡　丹　苗代を雨にまかせて日をふるやゑゴが心のはれまなるらむ
春　風　色も香もわかぬものから野に山にさかぬ恨の深みぐさかな
新　竹　さ蕨もまだもえいでぬ杣木山こゞのとぶさに春かぜぞふく
待　子　わらけなく風なゑをりそ露ゐだによなれぬはぎ此窓の若竹
橘　規　まちわぶる心のやみにともすれゞなかぬこゑきくやま時鳥
　　香をとめて昔をゑのぶ友もゞな花たちばなの木がくれの庵
江　螢　風かをる花たちばなの夕やみに見ぬ世を恐ぶこがくれの宿
池　蓮　夕ゴく日入江をぐらきむら蘆にのこる光やはたるなるらむ
　　風ふかぬ池此はちすの露の玉ゆらぐや魚のあさるなるらむ

蓮の卷葉をかきたる繪に　緑ゑく池のはちすの葉より葉につゆをまろばす風の涼しさ
夏　眺　望　いけ水のはすの卷葉にかく露ゝ人ゑれぞのみ玉やなすらむ
　　雨はるゝ夕日の空にかつ見えてつばめむらがる夏の川ゴら
　　小舟こぐあゑぢ涼しく雨はれて夕虹たかしれきのゑまやま
水無月つもごりの夜露の記きたるを見て
初　秋　露　初秋のくゝき夜ゑるし笹がにの糸にみだるゝ軒のゆふつゆ
艸　露　かきそはる露こそ秋をゑらせけれ篠の葉艸のひとよ〳〵に
　　月かげにみがくむぐらの夕露ゝあれたるやどの光なりけり
轡　虫　みちのくの荒野の牧のくつわ虫繋がぬ駒にねをやそふらむ
野　分　尾花のみ袖うちふるか夕露ゝたちまふべくもあらぬ野分に
月　前　雁　月きよみ雲井のかりの玉章も手にとるばかりはるゝ夜は哉
洲崎ゐて雁のわたるを見て
　　いでてこし常世といづれ此浦此此夕なぎのみるめかりゞね
待　月　さし向ふ外山の峯の雲ゑろし月いでくらしすだれうゝげよ

古寺月　人とはぬ野寺の門をふくる夜の月にたゝくや山ふろしの風

霧　ながめずゝ物も思はじうき秋をへだてもはてよ軒の夕ぎり

擣衣　月影のくもるも去らで賤の女ゝ誰ゲはれ衣を夜たゞ打ちむ

秋此歌の中ゐこと繁き世ゐゝまもほの薄原何をうゴらのねのみなくらむ

紅葉　見し春の花ゐもてりずちりやすきもみぢの秋にそむ心ゐ

雨中紅葉　やよ時雨そめなつくしそ村紅葉色こき方やちらむとすらむ

小鹿狩　みかり野や尾花そでふる秋風ゐ小鹿のすゞの聲ぞみにしむ

御狩野やをばなが浪のそこまでも鳥立もとめていさむ鹿人

暮秋　山風のふかぬたえまもはろ〳〵と木葉ちるまで秋更ゐけり

初冬　露霜にあれのみまさる小田の庵ゝ今幾夜とか月のもるらむ

落葉不待風　山風に木葉みだるゝたそがれの雲路や秋のゆくへなるらむ

月前落葉　さびしさゝ風も音せぬ夕べ〳〵一つふたつとちる木葉かな

車中落葉　月かげゝ嵐にさえてふくる夜の窓うつ雨や木のはなるらむ

路霜　やま川の氷魚ゐゝあらで小車の網代によどむ風のもみ葉

うま車よるさへ月にところせき都ゐはぢゝ霜もふきあへず

寒艸霜　夕風のすがたながらに音たえて霜がれさむき軒のえたをぎ

嶋千鳥　ねになくや沖の小嶋のさよ千鳥なぎさを遠くゆきも歸らず

松雪　時しあれゞ操こだかき松だゐもうづもるゝ世を雪に見る哉

鳥翼拂雪　風すさぶ森の木末のむらがらす雪にはたゝく聲のさむけさ

鷹狩のほともにさぶらひて

はし鷹の尾ぶさの鈴をかごとゐて世のなりはひや聞しめすらむ

炭竈　かくしても世にすみがまの夕烟心ぼそくもたちまじるかな

冬夕　何事をゐもふとなしに木葉ちる冬の夕べゝなみだぐましも

戀

ふたしへに思へばこそゝ苦しけれ戀路の外に道なくもがな

不言戀　いはずとも思ふ心ゝ見ゆらむをうたてや人のえらず顔なる

經月戀　あはぬ夜を月によむまでなりゐけり幾有明の空だのめして

思戀　あはれてふ人もこそあれ戀ならでかばかり物を思ふ身ならば

迷戀　うかるべき身の行末も思はえずこれをや戀の山路てふらむ

寄夢戀　あふと見ゞ現のうさや增るらむ夢ゐだゐとゝ思ふものから

懸情　それをだに命とたのむうき中ゝなげの情もなさけならずや

戀北歌の中ゟ　つらからぬ人の情やすゑつひに此身の仇とならむとすらむ
戀ゆゑともし云られなゞ年月の誠もあだになりやゝなまし

窓前竹　くものいのいぶせき窓を明暮にはらふもうれし風の竹むら

野眺望　武藏野やなすゝ筑波ゝ末とはき尾花此なみに浮ぶゝまやま

山家　とひきていうらやましてふ都人も軒端ならべぬみ山べの里
かへりていまじはりふかき山路かな岩根づたひに通ふ柴人

旅　驛路の一むら杉い見えながらめぐる田づらの道のはるけさ

野旅　草枕たれをあるじとなき野べもかきわかれゆく袖の露けさ

旅宿雨　たび人のあす渡るべき川ゟとに耳そばだつる雨のゟとかな

旅の歌とてよめる中に
山高くきつゝ思へゞはれ曇る雲いうき世の物ゟぞありける

竹本勝秀が江戸へかへり上る時栗をおくるとて
見せばやな鄙の山路の小柴栗ゑむばかりなる苞ならねども

海路　雲の波たどる舟路のいづこをゝてる日の本の空とゟふがむ
舟やうく山や沈むと見るばかりうねりぞ高き波の八ゑはぢ

夜海路　かげうつる星を舟路のまさごゟて浪靜なる夜はのうみづら
あすゟさてばかり江戸をたゝむとせし時何がしの樓より富士を見て
またや見む玉の甍を裾野にて夕日にみがくゆきの富士のね

葬　花だにも八重いなかゝこちたきをうたて葬の茂きやど哉

江菅　たが爲の小笠ゟとてか賤の女が雨のふる江にま菅かるらむ

驚　ゟらしふく安房の洲崎をたつ驚い伊豆の下田の友や問らむ
いかなる夕暮にかゟりけむ

等閑にきかめやけふも一年のひと日のかずにいりゟひの鐘

屏風の總に麥を
野べいまだ露ちるばかりゟらねどもはにいで初る麥の秋風

耳づくのゑに　草も木もことやめしよに耳づくの耳引たてゝ何をきくらむ

合せ鏡といふことしたる女の繪に
鏡より鏡にうつすうしろゝ少誰にそむけて見せむとすらむ

仙人の蝦蟆ゟへるかた
相馴れし契やふかきゟはるゝもふふも心のひきゝにして

西郷近思ぬしのもとへ龍膽をねこじて參らすとて短冊にかきて結びつけし

とりあへずふでにまかせて亂りうたむもびそへても奉る哉

吏　いつしかと我命毛もとしふりぬ筆とるのみを身の業にして

老　將　千萬のいくさの君も老のくる道をばえこそさゝへざりけれ

貧　女　ゆきて見む身のはれ衣も中々にうれしき春の花ぐもりかな

野に山に心とびたつ春の日も身ゐれこ蝶のはねをだゝえも

髮　脫　老にけり身ゐ墨染のわまならでつげの小櫛もうとくなる迄

易水送別　今はとて別に手折る青柳のかみもさかだつ今朝のかはかぜ

從軍行　仇ゐとく亂れやすらむさきがけのまはおりきはふ野邊の遠方

ふのゞ姿を繪にものしてそれ上にかきつけし

こし方を思ひ渡せばうかりしもうれしかりしも夢の浮はし

述　懷　うみの子のよにだゐ殘れよきをつむ身のいたづきゐ人をらずとも

折ゐふをて　木がくれて世にをられずば言のはの花もや夜の錦ならまし

拾　子　拾はれてよその乳房に笑ふ子の母ゐなきやむ折やなからむ

大塔宮　年さむきまくをが原のきりゝ〳〵す恨ゐつきじ霜ゐかむとも

涅　槃　二月や黃金はなちる木のもとに現ともなくふすゐたゞ子ぞ

一時百首の中ゐ

櫻　花　嵐にゐちらしはてじと山櫻たをるやはな殘をしむなるらむ

惜　花　限ありてちるだにをしき櫻花うたてあらしの何さそふらむ

厭　戀　いのる其神のみ前のゆふかづらなびくばかりの契ともがな

無名歌集の中に

百首歌奉りける折雁淺

なきつるゝかりゞね高しみ吉野のよし野のさゝの秋霧の空

おなじ頃初秋露を

芦の葉もやゝ露をゞし難波潟こや秋さてるをるしなるらむ

虫聲漸幽　心とやなきわたるらむきり〳〵すおのが涙の露ゐをれて

暮　秋　うらがるゝ秋の末野の淺ぢ原いまいく日とか露もゐくらむ

いづれの戰にかありけむ敵ひたくづれゐ崩れて先手殘り少なゐうちとりぬなどさゝめき

あへる程いさお清げなる川づらゐ駒うちよせて水かふゐ敵一騎かさへの松蔭より近々と

進みよるをあなはしたお誰そあるとくうてと物するに權守らつとはせ合せてやがて討と

りぬ首いたくわけにそみしろぺ水そゝがせてみるゐ年い二十余りゐやと覺えて顏つき
眉のゆはひなどいと心ゐくきはどけ若うどのもとゝりゐたわざくやうの物結びつゝさり
とりて見れゞ歌をなむかきたりける

黑髮のこゝる折ゐやかきならぬひとの心のたゝも見ゆらむ

手など拙なからでをかしう走りかいたる殊さら哀ふもいみじうも覺えしかゞいかなる人
ゐかなど尋ぬるゐ更ゐ見知ぬる人なし日をへて相ぬれるものいで來てなく〳〵其父母の
あるやうをさへかたるゐ

歎くらむ其たらちねよ黑髮のかゝれとてしも撫きや有けむ

年頃ひなにのみ有し後ゐまたの國々を經て吉野の行宮に歸りまゐりて仇うつやうども何
くれとはかり申しゝにかへりて此方にとゞめられ參らせて月を送りぬる頃思ひ續ゆゝる

中々にかゝらましかゞ露の身のとくおそ野べに消ゆべかりしゆ

同じ頃若き人々紅葉の宴せさせ給ふと聞て或人の許にひそかにいひやりし

世のうさを心にかけぬもゝしきの大宮人ゝいとまあるらむ

同じ頃よみし歌ぬうち夕幽思

詠めわびぬ行末くらき身の上に思ひよそふる夕ぐれのくも

再び吉垣を出立し頃前大納言入道の隱れ住み給へる所とぶらはんとて忍びてまかりつゝ
何くれと世の愛さ事ども語りゐひけるついでに

うらやましよ渡る道のゐやふさをかけ離れたる谷の玄ば橋

といへりけれゞ入道

柴橋の玄ばしばゝりの世の中を渡りかねつゝと人もこそみれ

いといふ甲斐おくやとていみじう泣い給ふ日暮るゝ程に立ち出づ夕霜はしたなく置きわ
たして道さへたど〳〵しきにいとかへりさがちにて

眺むれゞそゞろに寒し人めさへかれぬる霜のをゝのべの松

明日いゆゝしき合戰ゐるべしとく心せよなどいひもてさわぐに嵐いとはげしう吹て肌寒
き夕まぐれの程こゝかしてにかゝりたかせて明日を待つ事になりぬとかくせる程に夜い
いたく更けぬるにやゐらむせさのとよみもさまがに靜まりて遠近の駒の嘶きかはせるゐ
どゐはれに物をぞくさへ聞ゆるに入方の月をさまじうもを渡りていもねられねゞ滿清と
かたへの岡にの祈りて夜もをがら眺めつゝ思ひつゝけし

いきてよもあをいめでじと思ふ身に殊さら惜き月のひり方

よしのにてよみし歌の中に殘花

春だにもとはれぬ宿の櫻花いつをたのめてちりのこるらむ

閑居　靜けしな眞玄ぼのいはの片折戸さして浮世にまつ事もなし

五家園家集抄終

柳園詠草序

此卷ハ故石川柳園翁の家集なりふのれ若くして國々をめぐりありきし頃はひ天保十一年の夏翁の家に至りて玄ばしありけるほど其をしへ子中村豊足大石弘高其外の人々の玄ば〳〵とひ來て翁と共に酒のみつゝ歌よみ物語せしことなどを今思ひ出てかぞふれバ四十年の昔になりふけり其後弘化三年の秋江戸に來りける折たちよりて又の年の春その歸るさにとぶらひつれど急ぎたれバさばかり物がたらふ程もなくて立いでけるぞつひの別とれなりふけるひでや此翁の六の年より歌よみてたゝき賤しき見めぢきゝめでせしことハ大かた人の玄れるが如く世にめづらしき限ふて今更にいふべくもあらぜ十七の年より學の道に心をくだき歌に文に力を盡されし年月のいそしみハ誰しの人ゝ玄たはざらむいづれの世ふか玄のばざらむこたび遠江の山崎八峯平尾八束中山光雄などいふ人さち相はかりことゝりて此卷を板に玄らむとて我許に見せにおこせて師翁の友とせられし人いまハみなうせおたるをさる昔のゆかりもあめれバ序かきてよと

おはるゝにそのかみの事どもいとなつかしく忍ばしくたちかへり目に見るこゝちしていなぶべくも覺えぬまゝに此一言をそへてかへし送りぬさて翁のうつし世のありしやうゐかの人々の物せられたる下卷の末の略傳を見てさとるべし

あはれ今遊ざかる世にかどろけば更にみにしむ言のはの露

明治十四年四月東京ふて　　飯田年平

柳園詠草 抄

石川依平

梅　鶯のなきていでにし山かげの木ぞゑにはひて梅さきあけり

春雪　み吉野の山風さえて國栖人はわか菜つむ野にあわ雪ぞふる

野殘雪　下草のみどりをいそぐ春の野に心なぐくものこるゆきかな

夕春雨　うぐひすの堺にかへる夕暮の軒端さびしくはるさめぞ降る

春月　梅さく巨勢の春野にゆきくれてかすむ川瀬の月を見るかな

野春草　少女子がつみしうはぎの時過て小草はなさく春日野のはら

雉雲雀　つゝじさく片山岨のゆふばえに妻こひすらしきゝすなく也

枝高み折らで我こし山のはの花よりうへにひばりなくなり

野べ見れば雲雀の床も匂ふまで芝生のもみれ花さきにけり

はるの日の長きを時とさきそめし神代うれしき山ざくら哉

花ゆゑのかゝらぬ山もなかりけり春のこゝろや餞なるらむ

ながらへて六十ちの春の花も見つ老い嬉しき物にぞ有ける

朝　花　さく花の雫にぬるゝ妹が門わすらるまじきあさけなりけり

山家　花　なげきのみおると思ひし山賤が軒端のさくら花さきぬけり

月の前に花のちるを惜むといふことを

有明の月のゆくへの薄雲にまがひはてゝもちるさくらかな

禁中落花　こゝのへのみはしれ梢かぜふけばうべゆるされてちる櫻哉

山　吹　あがた見に春くる人のかざしゐとうゑし山吹花さきぬけり

山吹の花のもゑこもさいら波かくて春をもさそふなりけり

暮　春　月　花ちりて木末いろなき山のはにひとり有明の月ぞかもめる

中村豐足が家にて歌よみける時首夏川といふことを

太田川きしのふぢなみ花ちりて鮎はしる瀬に夏いきぬけり

時鳥の歌あまたよみける中

時鳥なくひとこゑにやすらへば花にくらしゝ木陰なりけり

おもはえず初こゑきゝつ時鳥うれしきものゝ寢覺なりけり

郭公なみぢをぐらき一こゑのゆくへにきらむ沖つ舟やま

早　苗　我宿の垣のくちなし花さきぬいそげやさ苗ときすぎぬまに

橘　うゑしよも今い昔といふばかり庭のたち花かげふりゐけり

水　雞　かきつ田に小雨そゝふる夕暮も水雞の聲い老めらざりけり

夏　月　みづ枝さす庭のかつらは追風に影さへかをる夏の夜のつき

撫　子　蓬生やにゐおきはなの撫子いいかなる露のおはしたてけむ

船中納涼　みさをとる袖ふきかへす川風い小舟にあまる夕もいみかな

夏　川　太田川すゝみのてらに小網させば波にぬれたる夕風ぞふく

夏といふ題にて

玉ゑける砌なにせむ夏いたゝそともの木陰にはのいさら井

初　秋　天つ空にしふきそめてゆく雲の早くも秋になりにけるかな

七夕後朝　あまの川あくる川つの朝風い又うきせゐやふきかへすらむ

司　召　かくて世に朽葉は袖と思ひしをはえある色にそむる秋かな

秋　野　八千艸のあきの盛に來て見れば野守い花のあるじなりけり

紫　苑　ふせ庵の垣より上に花見えてこゝろ高くも去をにさくなり

葛花のさけるを見て

賤が手にひき殘されて七艸のかぎにとらるゝ野邊のくさ花

前栽の朝顔は昼もぐるまで咲たるを見て

蕣生ゝ露はひるまもなかりけりあしたながらの朝顔はなし

旅亭虫　なく虫の露のやどりゝ變らじを明日の假寐や何處なるらむ

見付の驛ゝて内山眞龍夏目みかまろなどと共に歌よみける時秋風を

うらの名は今ゝ昔の面かげを穗なみに見せて秋かぜぞふく

野秋風　なき渡るさゞゝも雲井や寒からしうね野は淺茅あき風ぞふく

閑居秋風　秋風ゝいたくなふきそ草の上におかぬばかりの露の宿りを

關路霧　八重山の木々の下つゆゑたゝりて夕ぎりくらし足がらの關

野鶉　露ゝはふ秋の末野に床ゑめて何をうゞらの音ゝなくらむ

旅泊月　うきめはゝみつの泊と思ひしゝあらざりけりな波の上の月

禁中月　桐壺のひと葉ちりにし夕べより月に幾夜かをゝかゝぐらむ

舊都月　かげゝみし清水やいゞら月のみゝ今も高ゑる藤はらがうへ

山家月　山住のこゝろに殘るくまゝでも拂ひはつべき月のかげゝなし

月前松風　かげすめる月の都の琴のねときゝなすばかり松かぜぞふく

月の歌百首よみけるうち

かげゝめる月にかゝへばとくちりし軒端の桐ゝ心ありけり

秋ふかき加茂の川瀨の月見てもすまゝはしきゝ都なりけり

うゝ霧のはるゝ外山のまきの葉に月澄のぼるゑがらきの里

引佐江のきしの蘆根による木積あさましきゝですめる月哉

てむ秋もかなじ光は月ゝ見む我よのふけぞかへるそらなき

擣衣　あはれ誰つゝれさせてふ虫のねゝ驚かされてころも打らむ

美人擣衣　たをやめの玉手ゝゝまにから衣うつや力のかぎりなるらむ

九月十三夜鈴木重友が新室はぐひにものしける時鹿のなきければ

小國山杉のこのまにいる月のゆくへをおくるさを鹿のこゑ

瀧紅葉　多度山のいはがき紅葉秋ふけてむらゝに落るたきの白いと

秋雨　桐のはの朽葉が上にむら雨のそゝぐを見れば秋ふけゝり

山路秋行　秋風ゝゆくての霧ゝかつはれてたえ〳〵見ゆる岩のかけ道

山家秋　ま萩ちり木葉いろゞく山ざとゝ袖の時雨もふらぬ日ぞなき

暮秋雲　眺めわびし夕べの雲のたゝゝまひそれさへ惜き秋の暮かな

初冬　もみぢ葉も菊も昨日の色ながら朝風さむしふゆやきぬらむ

時雨　駒なべて網代見にこし歸るさに時雨ふるなり宇治の川づら

閑居時雨　よにふるもさられぬ窓の夢をさへさそひ殘さぬさ夜時雨哉

田家時雨　賤のをゞをしね苅はすはての上の夕日にそゝぐ村時雨うゐ

關落葉　引佐山ゆふかぜこえて木葉ちる氣賀の關路ゝゆく人もなし

寒草　霜こほる冬田のくろのつくも艸かれぬ綠もさびしかりけり

寒樹　やま風の落葉にさわぐ栗栖原さゝ栗ひろふうなゐ子もなし

野冬月　うねの野の枯生の霜に月さえてゑづがねさむき冬のよは哉

網代　冬されば田上ぢはのかは浪ゐ身をさへよせて網代もるらむ

月前千鳥　あら磯にくだくる波の月かげを翅にかけてなく千どりかな

歳暮　こむ年ゝかくていあらむとばかりに今年も暮ぬあなや世中

歳暮會友　もろ共に花見む春のあらましごとし此別のなゞさなりける

逢戀　命やゝ何ごとわだに思ひしゝ今宵を去らぬこゝろなりけり

戀賤女　何だゝと思ひふとしゝ木陰ゐもにくからぎさく花ゝ有々りき

老戀　笹わけしをゝろありきの其かみの我身をさへに戀る頃かな

夏戀　蚊遣火ゝむせびながらに靡けどもやる方なきゝ思なりけり

秋戀　秋をへてとはれぬ庭をながむれば〻そゝゝや千くさも物思の花

なき名　淺瀨をも渡り見なくに狹鰭川さゝたゞかけし波のぬれぎぬ

去のびて物ひふ夜時鳥なく

きゝつとゝかたみにいはじ時鳥いかなる折と人もこそとへ

山　天の下たひらの宮と去きませる宮のまもりの加茂の神やま

瀧れはとりに人來て見る

山姫のはたばり廣くふるはたの手玉亂れてちるかとぞ思ふ

故郷　をゝの内に去らべあひしゝ昔ふていたち笛ふくふる里の庭

山家雨　きゝ去らぬ鳥がねむせぶ雲霧に小雨ひまなき山のふくかな

山家雲　おのづから軒端よりたつ白雲を心ふかげにひとや見るらむ

山家送年　山住のあさきの柱あさらかに思ひいりしゝむかしなりけり

古戰場　ものゝふの命を露とあらそひし荒野のすゑに秋かぜぞふく

舊都　赤駒のはらばふ野べとなりゆけり昔去らしゝ長をかのみや

草　あしの花ちりのまがひに秋くれて夕風さむしこやの池みづ

海邊鶴　蘆さゞの其子はぐくむかゞ見れば松さへふりぬ玉出しま山

鳩　下なきて軒端にかへる家鳩のつばさの色にくれそめゐけり

牛　夕づく夜かゞもむ野ぢの歸るさいいそがぬ牛も心ありけり

桔梗の花物名　岩根こも水のたぎちゃうの花のさけるゐやゐ木隱れゐして

清少納言　かきつめし雪の日數のあらそひも消えせで殘る筆のあと哉

木曾義仲　大木曾のあら山櫻するゑつひにゆきとちりゆく粟津野のはら

玉昭君　あなこひし北ふく風の行くかさゝ別れし花のみやこ也けり

竹ゐ雀の繪に　さゝ竹を千代の塒とすむ鳥の雲に羽うたぬこゝろ哉りきや

槍の大木一もとたてりちひさき木二もとあり水の流にいろ〳〵の紅葉ちりたるかた

風ふけばまきたつ山の下水もよその紅葉ゐあきやゑるらむ

業平朝臣此富士山見たるかた

かくゆかばふじもそゞひゐ成ぬべしすむ國いづら東路の空

常磐此三人の子どもをつれて雪の降るにたちわづらふかた

是や此夜はになくさづふる雪此みのしろ衣おはひ羽にして

いつばかりゐりゐりけむ

我園のいさゝむら竹いさゝかゝ嬉しきふしもあるよ也けり

三保の松原ゐて萩を折りて

さを鹿もとはぬ荒磯の松がねにうらぶれたてり萩が花づま

依隆ゝ萩園のあるじ甕磨の子ゐて我やしなひにゑたる子なり甕磨みまかりて後文政七年

の九月ばかりかれをゐて白須賀にゆきて見れば早う家のやけたりければいたうあれて萩

たかやかに穂にいでて萩ゝちりもぎたるゞかしけたれて蓬むぐらのみ所えがはなり庵此

清らゞにうるはしかりし時を思ひ出ればいとゐはれゐてかうまでゐれゐける哉とをいろ

に涙ぐまるさる中にふみぐらのゑ壁などもそゐゐはれでさてる中々にさびしげなり

所見て風こそさやげかのづから萩ゝあせゆく園のをぎはら

文政十一年三月ばかり加納諸平が紀伊國より白須賀のもとつ里ゐ來ゐたる旅とぶらひて

三河國雲谷といふ所の花見にゆく船形山普門寺といふ山寺ゐり櫻ゝあまさたてれども大

方ゝちりもぎさるゐ大悲閣の櫻ゝ盛なりのぼりて見れば歌ゐまたゐりたる額かゝれり郡

山の殿故甲斐守保光朝臣のをはじめゐて名ゐる人々の歌もゐり甕磨此ゝ永きよの春の友

とや契らましつひのすみかの山櫻花とゐるを見て

七年のむかしを夢とゐどろけばてふに似てもちる櫻かな

九月ばかり妻のみまかりける頃

嵐ふく此かた山のいは床にひとりあれどいかもはざりしを

四海清　島のさき海布かり汐やく袖までもうら安げなる浦風ぞふく

盆踊詠歌　金風爾乎花哉靡夕露爾眞芽子夜多和牟初乎花靡久爾毛不有

秋芽子能多和牟爾毛不在庭毛勢爾未通女壯士乃往集比踊多

波禮豆立走阿蘇夫乎見者筑波山尾上之嬬歌津國能歌垣山乃

曾乃可美能布留伎手振乃思保由良久爾

遠近江湖邊時述心緒歌

磐走淡海之海乃邊津方爾波夕浪左和伎奥邊庭加萬目都麻喚

鳥尚毛然曾妻呼此間爾爲豆家八方何處艸枕客之氣長美稚草

能嬬香待覽愛八師子可毛泣良無其思者情毛思努爾家之所偲

反歌

客人能袖吹返須大日枝能嵐者寒之速歸理奈牟

詠弘安神風歌　須米呂伎能神能命乃神隨高知坐留天下平安宮能伊爾之敝能

遠津大御代爾蒙古知布國能己爾伎之左比豆留也戎能八十國

末都漏敞豆勝能進爾負氣奈久御國世米牟登多波和邪乎千々

爾波可良比曾古良久能軍乎於己之和田能原浪爾伎保比豆都

久之能海博多能澳爾直渡伊武可比來奴禮島能前守利加多武

留物部乃益良建男波白浪能來依留濱備爾百千能楯衝並倍百

八十能旗押奈妣計梓弓靫取負而劍太刀多知武可比乍葦花乃

知良布我如久負征箭乎千尋射渡之去鳥能安良蘇布波之爾天

原雲踏安多之雷能動美爾登與美級戸邊乃神能伊夫伎乃神風

爾伊不伎末斗波之百千能船乃己登其登荒磯能岩根爾久太計

千萬能賊能盡荒海能浪爾多太與比和多都美能千尋能底爾青

波乃五百重我下爾潮沫乃消豆曾宇勢之八百萬知與呂豆神乃

皇神能守太布斗之天皇能御稜威加之己之天地乃彌遠長久語

繼言繼由可牟日本能也末登能國乃以可之御稜威者

反歌

風雲毛與利豆都可布留天皇能志伎末須國曾山跡乃國者

柳園詠草抄 終

五十槻搔葉集序

歌のさまを論うじたる書ゝしも古今いとさはにあれど歌ゝもと心に思ひあまりたることを歌ひ出して思ひやりとせむまでのものなれば其さまのよしあしあながちにろうずべき事ゐもあらじかしさるを後の世のひたすらになよ〳〵しきたをやめぶりを丈夫のよみいでんもふさはしからぬいたく耳遠き古言をのみとりならべ古めかしうこしらへあまりに巧をもとめ一わたりきゝてゝ其心もわきがたきやうなどならむゝよみ人の心の程も考られていと拙かるべし只其心一すぢに調たかく言葉の外にゐもむきのこもりたる歌こそゐはれゐゝ開ゆべけれ今かく文の道開けたる御代ゐゝかゝる歌よみいでむ人もなどかゝなからむと思ひねたりしにいにし年日善上人の久胤のうたそれこれ見せられしを誦し見れば果して考かありけるにされば こそと思ひて我家にまねきて親しう物がたらひしに歌のみならず其人がらさへいかゐも高く物いひ言もくなゐゝあれど打むかひて何となくのどやかなるふりゝ春風にゐもてふかるゝ心地して心の高き事

秋の月の雲をはなれてすめるが如くになむわりけるげにかゝる心よりぞかく高き調の歌もいひいづるならむとゝよ〳〵慕はしう思ひていつかの勤のひまふゝぬしにあふことを樂しみといせしゝど公の御規ふてかゝる人のあさりおどふゆかむ事の必のまゝにもなしがさければ只我かさふのみまねきて三たびばかり語らひしに幾ほどもなくて身まかられしゝいとゝいと悲しけれどいかゝゝせむかのれ此人をこそ道ゑるべに歌の中山にわけいらまく思ひをりしにいまだ麓ふゆもいたらずして去るべを失ひ今ふさちまどひつゝ花のあした月の夕べぬしの事を思ひ出ぬ時もあらぢ然るに常によみかゝれたる歌をこさび日善上人のかきあつめられて板にさへゑらせむとてかのれふも卷のはしに一言かき加へてよといひおこせられたりかのれ拙き言葉に何事をかいひいでむされど主の歌の世に長く傳はらむことをはゝらるゝ上人ゝうるはしき心の嬉しさにいなみもやらでたゝ我ゑさはしう思ふよしをのみかき去るまになむ

安政四年といふ年の霜月

藤原忠寛

五十槻搔葉集

平久胤

春部

元日　とこしへに明れば出づる日の影のけさ麗しき春ゝ來ふけり

隱者迎春　はるといへば世にある人の門並ふ松をば我もたてゝける哉

故郷立春　雪をふく山風ながらかすむなり春きにけりしみよしのゝ里

閑居立春　鶯もおとせぬたにの柴の戸をさしもらさぬ春日かげかな

初春　あしがらの嵐のよそに冬をへて早くぞ曾我の松ゝかすめる海かけて霞める空のうら〳〵と浮島がはらに春ゝ來ふけり

初春風　霜をへし庭のたま笹ゆらぐなりかぜもやはらぐはるの光に

初春霞　ふゝきせし足柄おろし音たえて箱根もけさゝかすむ春かな

初春鶯　春きぬとつぐるを見れば山里に去年よりすめる小鳥也けり

早春雨　うち去めりなくや鶯もゝ千どり聲なき雨もはるをつげつゝ

氷解　蘆のうゑや渚の氷とけそめてあらやま中にはるゝ來ゐけり

春色浮水　光さす玉のよこ山かげ見えてはるゆく川のみづぞかすめる

白馬節會　くもにのる心地こそせめ白馬のけふたちならぬ九重のには

子日　春毎ゐ八十氏人のひくなるをつきぬゝ野べの小松なりけり

柴人のとがまにもれし姫小まつけふ宮人にひかれぬるかな

山家子日　わが庵にむかふ外山の小松原けふゝねのひか人のとよめる

故郷子日　ふるさとの子日の松ゝ老にしを今もたなびく春がすみかな

曙霞　やま鳥がゑみのそこに聲すなりはなの塒ゝさもやかきうき

朝霞　もゝとりの聲うちゑめる曙にあめをもこめてかゑむ空かな

遠山霞　武藏野の霞むあしたも心あてに見れべぞ見ゆるを筑波の山

野霞　たちわたる野べの霞におはばれて岡の松ばら聲ぞなきゆく

海邊霞　汐氣たつあらしま風の吹絶えて鵜のゑむ磯もかゑみぬる哉

磯邊霞　うと濱や荒磯につゝく小まつ原あらしの末もかゑむ春かな

旅中霞　ゆく末もゑぎこしかるゝ霞ゐて覺束なさゐいづれともなし

鶯　春をゑるもゝ千がなかに鶯の聲に似てだになくとりもなし

鶯出巢　とき來ぬとふる巢をいづる鶯ゑ聲もさゝ木に打はぶきつゝ

朝鶯　ゑのゝめの梢はのかにあけたてゞがすみにうつる鶯のこゑ

山鶯　鶯のこゑきゝつゝやさゝ波の志賀のやま人たきゞてるらむ

林鶯　うぐひゑの囀る時ゝ鍬はらもはるのはやしとなりにける哉

海邊鶯　鶯のなくや汐屋のあさがゑみ浪花わたりもはるめきにけり

若菜　野にかふる若菜にあえて人も皆春ゝつむとも老せざらなむ

鶯　ゑ聲する野べに日もたけぬゑう菜つみにと我ゝ來にしを

故郷若菜　ふりはへし昔の袖のかもかげに春日のわかな雪ぞつみける

春雪　ふる年にながめふりにし雪なれど春ゝ春とてめづらしき哉

殘雪　山ふかみつれなき松の雪をふくあらしも春にかゑみぬる哉

餘寒　ゑば艸ゝ青みなゞらに霜さえて春まだあさき岡のべのみち

餘寒月　かげくらき杉生の宿をたち出て春の霜夜のつきを見るかな

梅　何故に春の朝けのうれしきと思へべうめのさけべなりけり

梅薫袖　人ごとに袖にゑむれど梅ゞ香ゝ盡せぬ春ゑにはひなりけり

梅花薫風　かつしかやさとうちかをる春風に梅さく園のいちじるき哉

梅薫夜風　梅が香をたぐへしこぬ閨の戸の際もる風ゝ疎まれなまし

月前梅　おぼろの月の光もうめが香もともにみちたる春のよは哉

故郷梅　古里ゝ梅が香さへぞたどるらむ昔なれにしそでやいづらと

山家梅　うめの花雪とふりぬる頃もなほかさ山里ゝさかりなりける

我宿のうめ見ゐとてか山かげの霜のかけみち人のとめくる

やま里ゝへだての垣をふみわけて梅より梅に道もありけり

柳風　おぼろの霞ふきとく春かぜに柳のいとゝむすぼれつゝ

河邊柳　水の音もけさゝ霞みて川ぎしの根じろの柳はるゝ來ゐなり

故郷柳　ふる里のかもむ梢をきて見れば昔わがねしやなぎなりけり

水邊柳　うなゐ子が影見るゐどのさし柳みどりの髪も肩もぎゐけり

池邊柳　今つくる池の堤もかもみつゝやげて春ゑるさしやなぎかな

行路柳　道のべの柳のえつ枝誰よぢてよられながらに春をゑるらむ

春艸短　霜われし野中ふる道いつしかと葎つのぐむときゝ來ゐけり

雨後若艸　露ぬるき春の小雨のわさわけに淺茅がかれ生ゑた青むなり

蕨　紫のちりもはらはでは春の野にもゆるわらびを枕ゐやせむ

朧月　はるの夜の朧月夜にたつゑぎの羽ぶきの風ゝ猶さえゐけり

浦春月　三保の浦や洲崎の松ゝ朧ゐてなみにかげさす春の夜のつき

故郷春月　いにしへを思ひかへせば朧ゐて月さへもまぬはるのふる里

春曙　櫻さく遠やまもとにきゝすなきおぼろ月夜ゝ明はてゐけり

海邊春曙　わたつみの浪路遙にわけたてばかもみに浮ぶかきつ島やま

河春曙　角田がは水瀬にわさる水とりのかもみをかづく春の明ぼの

田家春雨　春雨のもるや田伏にかく種のほと〳〵しくもほとびぬる哉

歸雁　やま里や庭よりつゞく麥はさの小はた青みて春さめぞふる

歸る山そなたにあれば年毎にきても留らぬ雁ゐやあるらむ

わたの原八重の汐路をゆく雁ゝ春のみなみや追手ゐるらむ

春駒　あしたかや尾上をかける荒駒のひづめにおこる春の山かぜ

雉子　霞みゐて暮るともわかぬ黄昏をおとわり顔になくきゝす哉

霜われし片山きゝす春きぬとあしたの空にれし羽うつなり

雨後雲雀　かの見ゆる岡べのうさゝゝ朝雨のかもみになりて雲雀なくこゑ

むさし野やはれゆく雲を際にてくまなき空に雲雀なくなり

雲はれて日たかき空になく雲雀あめに玄をれし翅はもらし

霞たつ遠山眉のまゆごもりこもれる花ゐいぶせくもあるか

麓田のさなゑのみさび掻やれば尾上のはなの影ぞうつれる

おなじくゐ花をもかおへ氷室守みな月までも雪ゐありてふ

山風のふきのもさびにあへもして許さぬ花を折りてける哉

うなゐ子にをりやつされつ山里の小柴がもとの花の若木ゐ

ちりちらぬ影さへ見ゆる飛鳥川花も淵瀬のある世なりけり

山櫻たづねしほどに世のなかゐはなの盛となりにけるかな

あしびきの遠やま櫻たづぬとて宿の花をばよがれぬるかな

山里ゐみやこの花のたよりおもうとき梢のたちまたれつゝ

ちぎりても忘れやもると山人はさよりもまたで花をとふ哉

尋花　家櫻くもとまるまでへだてきぬまがひし雪ゐ花になりつゝ

遠尋花　かくてなほ霞のかくをとめて見む一木二木の花ゐはなかゐ

霞中尋花　九重にいまさく花のはつ花のさくらにあえよ四方の玄ち雲

都初花　我のみや花おゐふける木の本おゐ月もこのごろおりおけの空

曙花

夕花　春の夜を惜しむとならし有明のつれなき影の花にのこれる

詠むれば花の夕かゆ身おぞ添ふかすみの空ゐ月おなるらし

月前花　たちまじる杉のあやめもわかぬまで夕暮ふかく花を見し哉

ねられめや朧月夜のにはざくら今いくほどりおりおけの影

衣手のぬるゝもうれし春の夜のかゆろ月よの花の玄ごくに

月前折花　春の夜ゐ更にけらしもおぼしまに移ろふ花の影ぞめぐれる

露ふくむ花の匂にとりそへて月をさへおも手折りつるかな

雨中花　やま櫻あめにちりゆく人を見て花ごころとや世を怨むらむ

春雨にかさやどりして白雲のおもひもかけぬ花を見るかな

雨後花　たづがなく雨の名殘の朝ぼらけ櫻のはると世ゐなりにけり

春雨の名殘のつゆの櫻ばな思ふばかりゐ散らもぞおりける

花盛　けふのみゐ花とながむる山櫻きのふの雲や明日の玄らゆき

花薫風　春風ゐいづれば花にやどりてか寐ての朝けの袖にくゆれる

風前花　はる風ゐうはの空おもふくものをあやなの花ば仇くらべ哉

賤者見花　こり柴をおふけなくとも花を見む身ゐ山がつのやまぬ心に

靜見花　白雲のかゝるみ山にいはゝをめて人にゝられぬ花を見るかな

思花　春といへゞ心のゆきてみ吉野のまだ見ぬ花になれもする哉

花留客　ものいはぬ花こそ人をとゞむなれげに言の葉い限ありけり

山花　足がらや關の杉村すぎやらでいさよふ雲いはあゝぞ有ける

見渡せゞ花にあけたつ大比枝や横川の杉に夜をゞのこして

望山花　かの見ゆる遠山櫻あかねさす日たかき空にゝほひみちつゝ

花遠近　あしびきの遠やま櫻には櫻こゝろのゆくにまかせてぞ見る

霧中花　を木曾路やみ坂の花の目うつしにこえむ高ねの雪を見る哉

家までと花の持夫いやとはまし七日ばかりの旅寐なりせゞ

旅宿花　庭みれゞ今宵も花ぞあるじなる此たびばかり嬉しきいなし

行路花　たまぼこの大路の櫻をりよしと花にとゝろく人やいくつれ

名所花　紀の海いうしほの花も薫るめり吉野のみ山はるぞふけゆく

よしの山櫻がなかにみやま木の稀にたてるもめづらしき哉

海邊花　櫻さくときつ汐風はどかゝてかげをる浪もよせぬいそかな

いそ山やいはゞね櫻ゝらなみの八重をるが上に咲匂ひつゝ

幽栖花　夕されゞ沖つゝは風かをるなり武庫の高ねや花ざかりなる

隣家花　我いはい盛もひとのとはぬ哉をしまれてちる花もある世に

香ばかりい隔てぬさまに通ひきてうとき隣の花ゝもある哉

田家花　小山田の假につくりし伏屋まで花にゝもてをゝこしつる哉

花處々　木の本にけふいと思へゞかの見ゆるみ山櫻もさき出ゝけり

花多春友　花もまたゝはれといい見よ黒髪の色ふりかはり雪となれるを

櫻　さき匂ふ櫻しなくゞなべて世の春をはるとも思はざらまし

世中にさき出るよりちるまでにうきこと見えぬ櫻なりけり

まちわびて咲ばし心のたゆむまに四方の櫻い咲ちゝわけり

久方の日がねの櫻さきゝわけりふりはへみらむ伊豆の島びと

いかにしてかゝる種をゞまけりしと神代をゝふぐ山櫻かな

つぎてさく藤山吹も花ながら花といへるいさくらなりけり

惜花　世中のひとに思をつくさせてこゝろづよくもちるさくら哉

なに事もはてゝものうき世中ゝちるも時めく山ざくらかな

落花　ちる花を根ゝかへさで山風の行へも知らぬあくがらぬ哉

櫻ちるうもみの末のひとへ山はなこそ春のかぎりなりけれ

隣家落花　垣こえてちりくる見れば庭櫻はなにうれしき風もありけり

松間落花　木隠れてさきもやもらむ山松のひゞくまに〳〵櫻ちりくる

深山落花　おく山の横川の春もふけわけりさくらちりしく杉の下みち

湖邊落花　志賀の浦や高ねの花をふくからにかげさへ見えてゆく嵐哉

故郷落花　ながら山嵐のあとをとめくれば花こそよどめ志賀の大わた

古寺落花　嵐ゐゝ去やまの鐘もつかぬかな花にこゑゐるを初瀬のやま

夜思落花　ながめわび櫻にむもぶゆめ路ゐも吹ゐうつゝの山風のかぜ

月前落花　風ゆるきかぼろ月夜にちる花ゐ袂にさえぬみゆきなりけり

雨中落花　春雨のくものかへしの朝嵐はるゝゐ花の散るゐぞありける

劉花言志　惜といふもあやあの業や花故ゐ言のはをだにさのみちらさじ

野遊　きて見ればなべて霞まぬ方もなし野べゐ春去る處なりけり

夕野遊　あかなくに野べゐ霞そて暮ぬめり夕月夜をやかあちよせまし

春野眺望　家つ鳥かけのたり尾のたれすみて野路ゐ霞の奥になくらむ

春興　鶯のねぐらを去むる夕ぐれゐなはゐくゐるゝ人もありけり

海邊春望　夕されば沖つ汐風かよふらしいそ菜つむ子の袖かへる見ゆ

蘆屋がた干潟にたてる海士の子がめざしの髪に春風ぞふく

河邊春望　角田川かもむあさけの薄氷はるのみぎはもなほさえゐけり

もみぢ川霞れみをにもむ鳥のはぶきに曇るをつくばれやま

水郷春望　もりもてしよをうぢ川れ網代木にはるゐ霞れかゝる也けり

桃　山がつゞ畑うつ野らの境なる桃のわかゞちはなさきゐけり

椿　春くればときはの山も色かへてくれなゐにほふたま椿かな

菫　なつかしき野べの芝生の菫草たがひと夜ねし露のゆかりぞ

野菫　菫草ふとところがみにかしてだに野べの匂をひとに見せばや

故郷菫　すみれさく頃にしなれば古里のそれ色となくむつましき哉

苗代　浅茅原つばなぬく子が袖ぬれぬ苗代みゴやみぞにゐふれし

馬艸かる野澤の去みゴ春くれば住む人ゐれや種かせる見ゆ

山吹　ふし柴のまばら垣ねも春くれば八重山吹のかこひなりけり

みたやもりいはりならべて山吹の花の八重垣ゆひ渡しけり

山吹のはなかげくらき杣川のいかだの床にゆふ日さすなり

水邊山吹　いさら川うち橋わたせ山吹の花にふりたつひともこそあれ

池藤　ゆ種かすやま田の池に面馴てこのおろ藤ゝさかゝなりけり

暮春　池にさす松のはひ枝に紫のいろなるはなゝ咲きそめゐけり

山暮春　花にだに別るゝことのうきものを春さへ暮て行むとすらむ

山家暮春　さくらちる山路の末の一重山かしこや夏のさかひなるらむ

海邊暮春　ふほかゝのちりなむ後と敷へてし宿の櫻もときすぎゐけり

暮春雨　ひたちのや鹿島の沖の舟びとに春の行へをとひ見てしげゐ

荒いそや浪こそかへれゆく春ゝまさごに跡も止めざりけり

暮春惜　たちまじる木間の花もいつしかと杉生の窓にあがめふるゝ

春夕　ありて世にふるゝつれなきながめ哉花を別れし此ごろの空

暮春鶯　春のうちに聲かゝいぬてふ鶯ゝ人をふりせぬものとこそ見め

戸外春風　櫻人その玄まつ田にゆく春をとゞめむ爲の玄めゝはへてよ

原春風　閨の戸を朝いをおして明ぬれば日たかき空にはる風ぞふく

若菜つむ末野の原の夕風にふかれてかへるさとのうなゐ子

春山　春ごとに霞のまもをひきはへて山ゝちとせも面がはりせぬ

山家春　山里のはるゝ春ともなかりけり東風のかへしに霙ふりつゝ

閑居春　わがやどを人ぞとひける山櫻野べのわらびの折もすぐさで

春行路　東路にゆくとゝなしにあくがれて春の日の岡こえもする哉

春田　ものさもせぬ春の山田ゝ荒駒の艸はむまでになりにけるかな

春池　こはりゐし池の玉藻のゆらゆらに日影も靡く春ゝ來ゐけり

春鳥　かのが玄し囀る聲ゝかはとども春にもれたる鳥のねぞなき

靜酌春酒　霞玄く野べにいでてぞよの中をさけの心もくみ玄られぬる

夏部

首夏藤　夏のきて今さきいづる藤花時にゐくれしにはひともなし

更衣　かふれども同じさぬのゝ荒栲ゝ重ねぬのみに夏ぞ來ゐける

古寺新樹　年へたる杉のむら立色はえて横川のゐくもなつゝ來ゐけり

若楓　みづ枝さす梢にまじる紅ゝはなにかへでのわか葉ありけり

卯花　月雪の面かげ見せてさくものを誰うの花と名にゐはせけむ

うの花の葉末の露を去ら雪のかつ下きゆる去づくとぞ見る

墻卯花　卯月きて花になりけり山ざとのかきゐ小柴と思ひしものを

雨中卯花　ぬれて折る袖ゐさえねど雨の中も雪を色ふてさけるうの花

葵　かざしても老かくれぬを葵草いくその夏ゐふた葉ゐるらむ

葵懸簾　あふひ艸をもにとりかゝ氏人の神代覺ゆる今日ゐもある哉

筍　あらかはにうがてる土此際きえて一よ二よと丈たちにけり

郭公　これもかれもきゝつといへば時鳥いづれ誠此初音なるらむ

時鳥なけりまてゝもいぬる哉やへ山びこにゐ去をゆづりて

いりはてゝ何に去此ぼむ時鳥つきだゐ殘せゐのが名ごりに

山のはをいまこそいづれ時鳥かげもはつかの月にきはひて

子規いざこと〻はむ暮ていゐし春ゐいづこの里にゐひしと

みどりさすは山にきなく時鳥をぎにし花此なごりをやとふ

月夜待子規　まち出しも誰ゆゑならぬ月なるをなはつれなきゐやま時鳥

人傳時鳥　時鳥きのふゐ北野けふゐ嵯峨なきつきゝつと人ゑそゐいへ

初時鳥　まつはどのひさしにおふる去此ぶ艸去のびねもらを山時鳥

始聞時鳥五月五日葛野家會

時鳥うとときさとゐゐ五月雨のよにふる聲ぞはつねなりける

闇夜時鳥　ゐはかさゐ物のゐやめもわかぬ夜をゐのが闇とやなく子規

遠子規　やまびゐの聲だになくば時鳥雲井のよそにいかできかまし

郭公一聲　時鳥ひとゑゐゐてもたりなゝむきかぬ程をそさゐ思ひしゃ

雨後時鳥　潦はれゆくそらのかげ見えて初音うながずはとゝぎすかな

山路時鳥　はこ根ぢや袖よりすぐる子規とやまの雲にゐちゐてぞなく

杉林郭公　月になくやま時鳥こゑふけてをのへの杉のかゞなゝめなり

杜時鳥　やましろのときはのもりの子規秋ゐゐなどて聲のかるらむ

社頭郭公　時鳥こゝゐてきかむ賤はたやゐを葉が岡を去めのうちゐて

聽中子規　時鳥ときとなくなり古里のにはのたちばないまやさくらむ

故郷子規　いその上ふるき世とへば時鳥にひくは原にいまぞなくなる

市時鳥　時鳥ひちのなかゆく一こゑゐきゝける人のまれゐもある哉

山家子規　子規わがゐる山をゐさしとやくものゐなさの峯になくらむ

田家郭公　さ苗とる門田の水に影見えてたもとをすぐるほとゝぎす哉

郭公　頻智恩院宮君增上寺にて人々に歌のしける時

雲井まできこえわぐらし時鳥こゑのかぎりを盡してぞなく

早苗

とりわまるさ苗を賤のうゑてけり門の小川の水のよどみゐ

遲るゝ先ゐたちても見ゆる哉さ苗植るゝ世に似ざりけり

夕早苗

あし引の山田のさ苗うゑさしてかへる少女ゝ里とはみかも

澤菖蒲

あしびきの山澤に生る菖蒲ぐさ雲こそとはに棚びきゐけれ

林中棟

紫のゐはへるゐふちそれをだにをらば綠のはやしならまし

新竹

つゆ深きゐひたかむらの朝かゞに乾きてちるゝ古葉也けり

雨そゝぎ日をふるまゝに軒端なる竹のは山ゝ若やぎゐけり

五月雨

いつのまに籬の竹のねをはへてあらぬ方ゐも茂りゆくらむ

枝たれて窓もをぐらくなる梅の雨にうみたるさみだれの頃

連日五月雨

折々にはるゝ雨間をさみだれの空ざのめゐて日數をぞふる

海邊五月雨

めもからぬ藻汐もやゞで蜑の子がさみざれ髪をけづる頃哉

五月雨晴

梅雨ゐゐふるゝ千々の河をいれて水かさもまさぬ大海の原

は隱れゐ黃ばみて見ゆる梅の實のてるか五月の雨の晴間に

けふゝしも名殘なげゐも晴るゝ哉かくて幾度さみだれし空

閑居水雞

柴垣のうちにいりても叩くかなゐなづらはしき水雞こけり

螢

くれゆけば影ゐらはるゝ夕づつのゐゆくと見しゝ螢也けり

よの中の人のゐもひの下もえにくらべばやもき螢ならまし

五月雨に野澤のみづの際こえてゐさぢがはらに螢とぶなり

螢入籠

よそゐてもすきて見ゆるを玉籠のうちつけゐしもいる螢哉

窓前螢

天つ日の光をうくる人としてなに夏むしのかげたのむらむ

曉螢

くさむらに猶夜をのこす螢かな雲井の星ゝかげ去らみつゝ

池夏月

菖蒲ひきま孤かりそけ月かゞにところ得さする池ゐゐも哉

河夏月

こやの池にまだ若蘆の短夜を月もかりねのまくらをやゆふ

海邊夏月

鵜かひ人ふねゑばしかせ久方ゐかつらの川や月になるらむ

山家夏月

よろぎ路や照日にやけし高砂の月に去めりて夜ゝ更ゐけり

樹陰夏月

さらでだに短き夜はの月かゞを見るまゐどなき山間のそら

竹陰夏月

風そよぐ森の下かゞ露ふけてつきをかさしくたもと涼しも

くれ竹のよゐも習はで夏の夜ゝなどふしのまにつきの傾く、

見る程もなつの夜なれぞくれ竹のふしもやられぬ月の頃哉

夏夜月更　手にならぬ扇の風のゑめるまで涼をぐてらに月を見しのな

百合　夏の野をてる日の盛わけゆけぞさ百合花さく陰ゐありけり

鵜川　月のいる空ゐをぐらの麓川はるかにうゐぶかゐり火のかゞ

照射　なつ山のをじかの角の短夜のあけぬまをとや火申さすらむ

蟬　かりてはす山田の麥の秋ばてゝ松に去ぐるゝ蟬のこゑかな

馬上聞蟬　駒とめて涼をぐてらに水かへぞ木かゞゆづらぬ蟬の聲かな

蓮　こもり江にさくや蓮の花びらの風にゆらるゝ夕べすゞしも

蓮露　露清きはもの立葉に風見えてかたぶく月のかゞぞこがるゝ

夕顔　もろかづら葵ゐすぎぬ世中ゐ時こそありけれ夕ゞはのはな

東屋のまやのあまりの戸ゐさゝじ今日夕顔の咲てかゝれる

たそがれを時めく花の夕顔おにはひくはるゝ月のかゞのな

みな月の照日の色にあえもせでたそがれ白きはなの夕ゞはな

扇　けふゐ早秋ゐたちぬと荻の葉をあふぎの風にぶどろかす哉

夕立　夕立の雨の名殘のにはたづみ月やどるまですみにけるかな

市中夕立　夕立にあらそひかねて大路ゆくちから車もあまづつみせり

避暑　程せばきいやりの内をそおてゝと所うつして日をさくる哉

樹蔭納涼　おつかげゐ涼しかりけり立ながら葉ひろゞしはを枝扇にて

河納涼　わが宿のそともれ棟かげをよみ此ごろ人にうらやまれぬる

海山のかぜさへ通ふもみゞ川すゞしき瀬おぞ舟ゐおぞれる

水そこの川藻に風ゐふかねども靡くを見れぞ涼しかりけり

山家納涼　山がつが軒端つゝきにはふ瓜のまろびあひても涼む頃かな

麓納涼　ひぐらしのなくや麓の下もゝを山の去づくを袖にかけつゝ

林風似秋　下草ゐとゝきと茂るを大あらきのもりの梢にあきかぜぞふく

夏秋　あが物を置さらはせるふき座もゆらぐばかりの夕風ぞ吹く

夏夜　竹むらのゝきまにみゆる近隣はかげもゝしき夏の夜はかな

夏山　花ちりし嵐のれちれ大ゐがはうつるか夏にやまのいろまで

水鳥のかもの青葉のなつ山を下ゆくみづにうつしてぞ見る

夏田　日ふそへて青み渡れる山ざとの門田の稻ゐふしざちゐけり

夏虫　萩もゝきまだはにいでぬ夏野おゐ秋を下まつ虫もこもれり

夏獸　なつ山の青葉がくれのま清水に誰ひやしけむ駒いばゆなり
夏神樂　少女子がとるやさかきの枝扇てる日かしてきかゞと頼まむ

秋部

社頭立秋　神垣やその色となき杉むらに秋のきるしのはつかぜぞふく
初秋風　うつの山夜はゐやてえし秋風は安部の市路にけさぞ吹なる
　　星月夜くも井の風の音ふけて松にさだまるあきのこゑかな
　　ふきまよふ雲井の風の心まで西ゐさだまる頃ゐもあるかな
初秋月　文づきい月ゐもしろし秋の夜を悲しとまでい思ひたどらで
　　山里の垣つのゐさふ苅りはして露をつゞぬる夕づく夜のな
初秋興　むつゞ川ちるや柳のかゞ見えて風ゐもしろき夕づく夜かな
早秋　萩のはにそゝや秋風たつと見しい枝移りせる小鳥なりけり
閑居早秋　草の戸に秋まちとりつさびしさを心にきめむ友さへもゞな
殘暑　秋風もてる日盛いつれなくてかへるゝ夏にをかのくずはら
　　いづれゐか秋たつ風い宿るらむをぎも薄も日によられけり

七夕　秋きぬと思ふ心のゆるびよりあつさにたへぬ昨日けふかな
旅中七夕　けふもまた暑さきられて薄霧の木末にかわく朝ぼらけかな
海邊七夕　晩むれゞ星い數なく見ゆる哉いづれといづれ今宵あふらむ
　　浦の蜑の何をがなとい思ふともあしわけ舟い星もうけめや
　　これをだに星ゐいかさむ時のまに渚ゆきかふたなゝし小舟
七夕更　ふけゆけゞ西に流るゝ天の川よのまにかはる淵瀬なりけり
閏月七夕　天の川ゐふせ近くや思ふらむ年をわたりしこゝろならひゐ
萩　軒ちかき一むらをぎの聲ばかり寐覺ことゝふ物いありけり
江邊曉萩　風をいたみ蔦のやそ江に舟はてゝ曉をぎのさやぎをぞきく
夕萩　月をさへ宿しけるかな夕づりのつゆだにかゝもき萩の下枝ゐ
月前萩　露をだにたもちわびたる萩が枝ゐ宿るか月の思ひぐまなく
名所萩　はぎ花つゆさなゞら玉と亂るれゞ下ゆく水や名に流れけむ
故郷萩　ふる里に思ふて萩のなかりせゞ稀にも露をわけてこましや
野亭萩　て萩原句へるかさにわけいれゞやがて野守が垣ねなりけり

庭薄　移しうゑし一むら薄あきの野を思ひやり艸となりにける哉

荊萱　秋されば野分もまたで荊萱のこゝろごゝろに亂れぬるかな

蕣　夕庭にきのふ數へて見しよりもさきこそまされ朝顏のはな

朝　きぬ〴〵の人のうきをもゑらでたゞゑみさかゆるか蕣の花

野外虫　秋の夜は長夜にあまるかもひかも朝影艸にこほろぎのなく

松虫　秋のたゞ野をみながらにゑめ置て虫といふ虫の聲を聞ばや

秋風　山のはをくるれば出る月あらでまさ何をかゝまつ虫のこゑ

故郷秋風　松虫はなくゝねゝ露か艸の原わくれば袖のたゞにぬれぬる

關路秋風　月のいる西の空よりたちそめて四方にふけゆく秋は風かな

海邊秋風　あきの風松をつくして岡のべの薄なびかしてゑよわるなり

　　年をへし宿の軒端のふるをだれいく秋風にはころびおけむ

　　みちのくのあこその關のあなたゝ西ふく秋の風やおゆらむ

　　風さゆる鈴鹿の山をこえしより せきの東もわきになりゆく

　　たけ芝や雲井にみゆる磯の崎あはとさやかに秋かぜぞふく

　　おは伴のみつの濱芦ゑさ折もて松のこずゑにあき風ぞふく

河秋風　かぜ清き夕べのそらは影うきて利根の河原ゝ秋さびゝけり

　　淺間山たつやけぶりの末おびき千曲の川にあきかぜぞふく

山家秋風　西のそらはるかにすみて山里の松にふきくる秋かぜのこゑ

　　木立もる夕日の名殘かげろひて秋かぜたかし山かげのやど

田家秋風　ゑのびゝゝ通ひしものを小田の庵今ゝ穗に出て秋風ぞふく

鹿　遠妻もきゝゝゑれとてあさを鹿の聲をあらしの風ゝそふらむ

夜鹿　はつ鳥狩ゑらぬ野原をわけくれてそゞろに鹿は聲をきく哉

霧中鹿　妻こふるかのがなげきの秋霧にたち隱れてやさを鹿のなく

山鹿　をぐら山あらしは筏は夕月にさとまで鹿のみゞをもてぞなく

野徑鹿　さを鹿の妻とふ道ゝゑゝらねども萩こそねゝされ小野の露はら

驛路鹿　かの岡ゝ鹿ゝなかむとゝいひたりし驛の長のことぞまさしき

　　たび衣きその驛のいへむらにまちかくもなく鹿のこゑかな

暮秋鹿　淺茅原野分をかへゝ山風に夜ゞれしゑかのこゑをきくかな

關屋秋夕　もる人もあるかなきかに秋ふけて霧のゝとゞる關の夕ぐれ

山家秋夕　思ひわびまつの戸あけてたゞゝゝめば雲こそかへれ秋の夕暮

駒迎　まれなりと例にひかむいたゝきの星もくまなき望月のこま

月　ふのつから心もをみて久方の月のあきとゝなりにけるかな

對水待月　夕日てる川とを見つゝ芦ぬ家あかねても月のまとゐせる哉

海上待月　汝こそゝ岩もるある心秋の夜の月まちいでよ庭のましみつ

舟びとの心にうみゝまかせてむ月をもいだせ夕あみの上に

暮天月　浪花がた沖の小じまに舟はてゝ生駒がゞけの月をまつかな

ひさし野や遠つかひゞね入日さし海べを見れば月出あけら

待宵　此夕べかげにさはれる枝をうちて明日の月まつ桑ゝせむ

十五夜　ながめつゝ我よの秋ゝ更ぬるを今宵の月のあたらしきかな

望夜庵見月　あくゞるゝ心さへこそ老ゝけれむかしゝ宿にみてし月かゝ

河邊月十五夜白堅屋にて

大井がは秋のもなかの瀬を早み流るゝ月のをしき夜はかな

不知夜月　今宵より在明ぬべき月なれば出るもゑばしつれなかりけり

十三夜　うゑたてし庭の小松も影さびて長つきゑるき月のいろかな

まとゐせる夜を殘しても入る月を何なが月ぬ影といふらむ

月前松風　詠むれば八千夜も同じ月にまさ聲もつきせね庭のまつかぜ

月前思　ながめつゝ思ふ心もことの葉も及ばぬそらにすめる月ゝ

月前野望　秋の野ぬちふの露原見わたせば月よりはかの色なかりけり

あきの野の露ゝみながらあはれとや空ゆく月ぬ影宿をらむ

雨後曉月　夜の雨の軒のゑたゝり音ふけて寢覺のとこに月ぞもりくる

舊都月　清見原つゆをむかしのよすがゝて雲井の月ゝ今もをみ々り

野月　あさぢ原月いでて見れば夕やみにゐけこし方も花野ゝけり

野殘月　あさしぬ原秋風寒みぬばたまの夜を殘を月の影ぞゑらめる

原上月　山のはゝ尾花が末にはの見えて三日月たかしむさし野の原

旅宿月　旅の空なれぬる月を主人ゝて ゑらぬやどりに幾夜ねぬらむ

旅泊月　月かげゝ沖にたけつゝ難波寺よふかき鐘ぬおゑもをむかな

海邊月　秋風のきよき荒磯にかげみちて月のはかゆく白なみもなし

あまの子が舟かつきあぐる聲ゝして磯の白濱月ぞてりたる

沖にいづるはねだの川とむせぶめり潮をれして月さし上る

きよみ潟三保の洲崎ぬあらゝ松かゞさへ見えてすめる月哉

月い今いでむとすなりわさの原空と浪とのきはのわかれて

浦月　海おしの伊豆の島山かつ見えて月になりゆく田子の浦なみ

島月　汐竈のうらよりをちに誰もみてまがきの島の月を見るらむ

月似舊　かげみればいづれの秋か疎かりし昔がさりも月にこそせめ

月如鏡　古のふのこりどめゲかいみかと神代をかけて月を見るかな

社頭月　ゆふかけていむこの森にひく玄めの内外もわかぬ澄る月哉

月多秋友　いときなき程よりなれし秋の月いまゆく末も面がはりすな

雁　まてばとて迎へ使もやらなくに葉月といへば雁の來ぬらむ

入日さす沖つ玄はぢにとぶ鴈のつばさもさやに秋風ぞふく

初雁　山里のわさ田穂に出るあろとてや雲井の雁も時をすぐさぬ

旅宿雁　雲井ゆく友ならぬとも旅ねうし我もうりなるたびの枕を

海邊雁　居待月あかしのとなみ音なぎて枕によれば かりぞなくなる

野分　朝まだき露のみだれて悲しきい野分の風のなでりなりけり

あきの風この頃耳になれぬるを今しもたつい野分なりけり

見わたせば里もあらはに深艸やふし見をかけてふく野分哉

驛路霧　はお根ぢい夜霧や深き旅びとのみしま菅がさ露の玄たいる

よぼろよぶ聲ぞきこゆる朝霧ぬふかきあさりや驛なるらむ

擣衣　ぬぼ玉の夢いやぶれてから衣うつ丶に聲の近くもあるかな

せこがきる衣をのみと思ひしに人の夢をも玄づいうちけり

つきふくる夜寒の里の秋かぜに時めくものいきぬた也けり

閑居擣衣　風のおくるよその砧をいうふせむ軒のひさでい取捨しかど

せめぐまで砧いよもに聞ゆなりいはり並ぶる人いなければ

故郷擣衣　月見ればむかしながらの故里にひとさへもみて衣うつなり

田家擣衣　よもすがら打もさゆまぬ砧かな秋田もる身いさもぞ苦しき

鴫　たそがれの荒野ぬ澤の寂しさに堪でや鴫のたちていぬらむ

鶉　かりにだにくる人もおき我宿のあれたるにはに鶉なくなり

菊　つれなくて露おいぬはぬ白菊の花ぬいろをも霜いおかせり

ゆ　ふく露おつれなく見ゆる白菊の花のうへとふありおけの月

夕菊　うぬさて丶菊に心をつくしわた更おや着せむうゆの夕ぐれ

雛菊　八重かこふ雛の菊いゆく秋の霜にかぜおもぬらせずもがな

栽菊待友　かくれがの友ゐと菊い植たれどなほ人をさへ待れぬるかな
閑居菊　静けさをよもがにゑむる宿なれば我さまゐひの菊もさきけり
紅葉　もみぢ葉の盛をみれば世の人の老てはえゐる心地こそすれ
夕紅葉　霧まよふ端山の紅葉おく見えて木ぶかく殘る夕日かなかな
紅葉留客　ゑばしてふ言の葉よりももみぢ葉の思の色を人やめづらむ
雨中紅葉　繼すてふ人の袂のおもはえてもみぢにそゝぐむら時雨かな
山紅葉　もみぢもる秋にしなれば みわの山杉此ゑるしも顯れゐけり
海邊紅葉　わたつみの秋のゐざしとかの見ゆる磯山もみぢ盛ゐりけり
河邊紅葉　神奈備の河そひ紅葉かゞだゐもさそふ水ゐゝ移らゑもゲな
暮秋紅葉　もみぢ葉をゐゝら錦と見てしより立ゆく秋のうらめしき哉
柿　露霜のおく山さとの柿の實や人ゐゑられゑゐきを ゑるらむ
秋山踏　みやまぢゝゑらぬ木葉も染てけり秋の奥ゐもなりゐける哉
露寒きさがの奥山わけて見むみやての秋の名ごりありやと
もみぢ葉のぬれたる見れば麓ゐて過し時雨ゝゐゝも過けり
山中秋興　秋のきて幾日もゐらぬ淺ぢふにすむやを鹿のゐとを見る哉

野亭秋興　さをしかのゑがらむ萩を籬ゐて秋たのもしき宿ゐもある哉
海邊秋望　西ふくや浪此八重ぎり末はれて夕日のそらに舟かよふ見ゆ
暮秋　すゝみせし清水ゝかれて秋ふかみ野となる澤に蓼の花さく
暮秋月　長月のつき夜を長みゐきいでて有明のかゞをまたも見る哉
暮秋雨　ふる雨も夜頃になりぬ長月も今いくほどかありゐけのそら
九月盡　ゐすよりゝ何に暫へむ身のうさをよそへし秋もけふぞ暮ゆく
秋野　秋の色の深く成ゆく野べ見れば淺ぢが原ゝ名ゐこそ有けれ
秋曙　夜を此ゐす虫の聲々つれなくて籬のはなぞいろゐかれゆく
秋雨　むら雨の軒のつまとふ音づれゝ鹿のねよりも寂しかりけり
秋霧雨　よを秋の空に變らで一昨日も昨日もけふも霧ゐめこそすれ
秋水　影きよき雲井の月をやどすとて水のこゝろも秋ゝすむらし
秋霜　松の風よもぎがのきをはらふ夜にゐらそひゐける秋の霜哉
秋神祇　五十鈴川すゝしきかげを仰ぐかな秋を時なる月よみのもり

冬部

初冬曉　をぎの葉も音せぬなれる曉のねざめの窓にぞもさやぐなり
初冬山　あしたかや尾上のまきにたつ駒は嵐になづむ冬ゐきふけり
草庵時雨　木葉ぞと思ひ定めて日をふれば心に時雨ふる夜半も有けり
時雨過松　浮雲のよそにぞぐると見るが中にやがてまちとる松の上哉
夜時雨　よおろふく愛宕の嵐ひえおろしはてゐぞぐれぬ山風もなし
風前時雨　山風の時雨をはらふ小ざさ原ぬれつゝさゆる月のかげかな
田家時雨　神無月ぞぐれにぬれて立よれば田ぶせゐ秋のも中なりけり
窓前殘葉　ふくてかる岡べの柵田末はれて伏屋にかゝるむら時雨かな
落葉　木枯もふくらむものを窓の外ふたてる柞のあはれいつまで
落葉滿庭　木のもとにぞゝる錦ゐ花ならで根にかへるでの紅葉也けり
松間落葉　庭にれく霜のあやとぞ今ゐ見る秋ゐ木末のにしきなりしを
社頭落葉　深みどり冬をよそなる山松のひゝきゐもちる紅葉なりけり
關路落葉　ちはやぶるい垣をこえてちる紅葉風のすさびゐ神も咎めじ
霜　確氷山あらしのこえし跡見えて關路うづめるむら紅葉かな
　あさ毎にきくも寒けし大路ゆくちから車のぞもにきしるを

曉霜　さゆる夜の曉ぞろくおく霜ゐむもばぬ夢のなごりなりけり
原上霜　あさぢふやちふの霜原朝さえてなかぬを鹿の跡もみえけり
海邊霜　海の面いまだ靜けきをいそ山の霜のよゞらも聲さやぐなり
殘雁　小山田のわさ田のひつぢ穂に出る今も時とや匪ゐ來ぬらむ
湖氷　あしの海や水の白波ふきよせて氷をたゝむゆふあらしかな
木枯　をはつせや嶺の木枯すぞ見れば檜原にこぞのよわりぬる哉
海邊木枯　木枯のいそたち離れ海ふけば木葉とうける浮ねもちりつゝ
寒艸帶霜　み艸ねし野澤の清水あせはてゝ霜の枯生となりにけるかな
森寒艸　大あらきの森の下くさ霜をへてうもてもも風のすさめぬる哉
寒蘆　かぜさゆる蘆のぞの原冬をへて水さへ霜にかるゝころかな
山寒樹　足柄やはこねふたてるみ山杉ふゆゐあらしの宿りなりけり
冬月　山まつのひゝきもたえて照る月の影にこたふる霜の聲かな
　かゞ宿る露のよもがもなかりけり淺茅がはらの冬は夜の月
山家冬月　山風にみぞるゝ空の雲まよりもれてもいづる月のかげかな
寒月照關　あしがらや關の荒垣ぞもとちてもる影さむし冬の夜のつき

霰　ものゝふの矢倉が嶽に雲ゐねてあられふりきぬ竹のえだ道

屋上霰　世中いすぎの板屋にふるあられ只ひとさかりかしましき哉

千鳥　片しきの袖しの浦になく千鳥波のよる〳〵かけてこそきけ

海邊千鳥　こよろぎの磯の松風おとたえてあけたつ波に千鳥なくなり

水鳥　いはへ波ちへによりくる跡いあれど白濱千鳥行方えらぎも

曉水鳥　ひさかたの天城の嵐うみふけば木葉にたぐふむら千鳥かな

待雪　中々ゐこひいえらじなをし鳥の妻ゐ離るゝよるしなければ

雪夕聞鐘　えら波をつばさにかけてたつ鳥に有明月夜むらえぐれせり

深夜聞雪　冬を淺みまゞふりそめぬ白雪の心のまつゐかゝるころかな

雪中眺望　ゆきをこそかけて見ましを我宿ゐまつに日數の積りぬる哉

野雪　ゆき深き外山の庵いかねの音にけふも暮ぬと思ふばかりぞ

　　埋火もえたくづれせり夜を深み松よりおつる雪のひゝきに

　　すみゞ川舟い通へどかつしかの雪えづかなる朝ぼらけかな

　　見えわたる浦より浦の小松原雪ゐもかよふ目路いありけり

　　えの原や荒野のけぶり末とぢてくもると見れば雪ぞ降來る

里雪　雪ふれば里にぬりくる山鳥のはねきる音ぞまなくきこゆる

閑居雪　松がえに雪こそつもれ我宿いあらしの道もたえやえぬらむ

田家雪　うち渡すながめ宜しき田ぶせ哉雪見むとてい作らざりしを

故郷雪　あもか風雲井に遠くふきこえて荒たるさとに雪ぞつもれる

海上雪　沖つ船かけてこぐなる伊豆の山日金も見えず雪いふりつゝ

海邊雪　浪の色い常磐なりけりふる雪の日かずつもりの浦の松ばら

　　ゆき積る沖ゐ小島ゐそなれ松下枝いなみにあらはれゐけり

旅宿雪　おくれてし旅籠の馬の荷鞍より雪をもおろすたそがれゐ宿

旅泊雪　ふる雪に舟ぢもたえて伊豆の海鵜のすむ磯に幾夜かもねし

寒梅　鍬はらや竹葉ちりしく道のべに梅ゐ花さけり春ちかみかも

歳暮　くれてゆく年をとゞめむ久方ゐ月日の道にせきもりもがな

山家歳暮　年寒きそとものの里ゐ山おろし今いく日とゝふきつよるらむ

歳暮雪　ふる雪に跡だにつけよゆく年の名殘ばかりも見つゝ忍ばむ

歳暮祝　ゆく年の其事となくうれしきい心にばるのきざすなりけり

除夜　ねられめや今宵いいかで月花にさしも耽りし名殘と思へば

冬風　木葉みなさそひつくして大空の風のこゑさへかるゝ頃かな

冬魚　冬河のこほる淀瀬にすむこひやなれも思の去さむせびする

冬獸　むさゝびの隠ろふ隈もあらねばや霜迷ふ空の月になくなる

いかりゐの夜ゝ里わも出ぬらしおとろがもとの霜ぞ荒たる

冬野　さをしかの聲はにいでし薄原去ものつまともなれる冬かも

冬山家　山里のかけひのつらゝつら〳〵に思へばたへて有經ける哉

冬行路　並松のこかげゝさえて朝日さす岡のかた道去みとけわけり

戀部

戀初戀　あし引の山川淀にふもとといふうへゝつれなきあひもする哉

今よりゝこひの奴のにひまねりいかわ心のつかはれぬべき

いかなれば戀てふ山の山口に入るよりやがてさかしかるらむ

恐親眼戀　去るやいかに親の心のいはき山あらぬ獸のある世なりとゝ

聞聲恐戀　津國のこやときくより蘆の屋の去のびに物をおもふ頃かな

初見戀　黄昏にかつ見えそむる三日月の眉根や人のかゝむとすらむ

待戀　我ひとり人をばまつと思ひしわたもとに露もおき明しけり

逢戀　かゝてしも思ひやゝせし神山におふてふ草を身わ摘まむとゝ

あけゆかばおきうかるらむ宵のまをつゆの命の限ともがな

今宵かくなれまつはるゝさ夜衣あもより幾夜返していねむ

深夜逢戀　雲まより影もれいづる有明のつきなしといふも宵の程こそ

曉逢戀　東雲をまだ夜深しといひなさむ有明のつきれ空おともがな

別戀　後もまたあはむと去らばふ蔦の別るゝ事も惜まざらまし

速不逢戀　わぎも子に逢坂山をおえしかどころもの關ゝ猶へだてけり

久不逢戀　あはぬ夜を日もで數ふとせし程に月よむまでに成にける哉

顯戀　よそ人の見やゝとがめぬ淺間山たえぬおもひにくゆる烟を

浪花潟かたゝにたえぬ蘆垣のみじかきふしを人の去りげむ

絶後顯戀　なとり川そこの埋木くちしといあらはれてこそ思ひ定むれ

口のはにかけても誰かいは橋のよるの契ゝたえにしものを

絶久戀　あせおける人の心れあさ澤にふりぬる影ゝ見えじとぞ思ふ

不相思戀　片戀を賤がつま戸のおとしたておとしめてしもあはぬ君哉

片戀　ひら雨の名殘の空のいとはれてかわかぬ袖を月のみぞとふ
占戀　沖つ舟よるをまつはれうらにだにのらぬいつらき心也けり
悔戀　山の井の心もあらぢくみそめて濁れる名をもたてにける哉
遠戀　思ひやるはぢい雲井のよそふても詠めやもらむかなじ心に
久戀　まつら川末をふかめてうき人の七瀬の淀もぢし來ふけり
契經年戀　契りおくさせもが露の消もせでつらきながらにかこたるやなぞ
移香增戀　わりなくも人の心のそらだきを袂に去めてこふるころかな
被忘戀　ちかひてもかはるい人の習なり物わもれせぬみこそ恨みめ
恨戀　いつしかと人い雲ゐになりはてゝ月れみなるゝ袖れ上かな
戀妨學文　燈火れのぞみもたえて此頃いこひのやみゐぞ我いたどれる
思出舊女　はし柱たてし其名のくちもせで昔ながらのちぎりともがな
閑居戀　露にぬれて人をまつまに葎生の八重さす門となりにける哉
馬上戀　鞭かゞを見ずとも道をかけれ駒草かりかはむ人もこそまて
夏戀　みな月のてる日の影にとけやらぬ胸の氷をいかに去てまし

月前戀　あひ見てし夜頃い遠く隔てゝも月ゐいかげも離れざりけり
人いやゝすまぢなりにし淺茅生の宿によがれぬ月をみる哉
冬戀　霜をへてひとり葉ゞへぬ松の戸や人の心のあらしふく世に
あだなる人をまつといふことを
まち渡る心ようたてたまさかによその夜ゞれを身の契ゐて
たのめて來ぬ曉ゐといふことを
さりともと思ひし宵の松風もあらしにかはるあかつきの聲
たすてひといひてこざりし宵い數多あれどこじとて來つる夜いなかりけり
來れどもあはぬ戀の心を
よをうみの蟹の釣繩打はへてくるといすれどうゝも引れず
あはぢして歸るといふことを
み雪ふるあはづの原にたつ駒のたちあづみても歸る夜は哉
つれなき人のもとゐといふ心を
恨みつゝかつこひつゝも我心ふた心ありきみゐやあえけむ
年へて早く見し人に逢ひてといふ事を

海士のかるもとの心い忘れねど人のおもてに波ぞよりくる

いやなつかしき

ふく風の便につくる梅が香にいやなつかしき妹がかきねの

夏此始女此許より螢をつどへて物するよしいひおこせたりければ返しに

集ひてふそよ其虫にみをかへて君がまなびの窓になれなむ

物思ひける頃時鳥をきゝてといふ事を

妹とわが中をへだつる一重山夜毎にこゆるほとゝぎすはも

女の許より御秡しにいざといひおこせたりければ

御秡せば思ふ心やあせぬべき君みさらしのかはらずもがな

男女すの外にて雁此渡るを見る

秋いきて春べいかへる雁がねのかりにすむめる人い頼まじ

雪此夜女の許ゐてといふことを

更る夜の松よりおつる雪の音を埋れふしてもよそにきく哉

旅より女此許へいひやる

まろねもる旅にしあれば下紐の心もとけもあけぞ玄にける

女の許ゐきぬを忘れてとりにやるとてといふことを題ゐて行善大德此置きておし一重衣の一重をも着ならしたりと人の見るらむとよめるに

返もてそ嬉しかりけれから衣ゆめゐや人の見えむと思へば

寄月戀　思ふ事みそかゐも玄かいひてましよそめつきなく人い見ゆれど

月影に身をゐひかへばいよ簾まばらながらにさしもいらましを

寄雨戀　君こふる涙の雨のふるときも玄さのれもひい消せざりけり

寄川戀　ふりたちてやせこそ渡れまつら川七瀬の淀によどむ君ゆゑ

寄杜戀　たゝるとて人も手ふれぬ神ゐびの森と我身いなりにける哉

寄山吹戀　よしや身いゐきになもとも山吹のやまぬ心を人に見せばや

寄竹戀　うかりけるふしい忘れて呉竹の逢夜となれば恨みだにせも

寄垣戀　たもとはる妹が垣根のいくみ竹くまなく見ゆる心ともがな

寄市戀　君にかへむ物こそなけれ玉敷の都の四方ゐいちいあれども

寄商人戀　二つなき命なれどもこひ渡る人をうるゐいかへむとぞ思ふ

雜部

山　山河をたかきさやゝをみ吉野ゝ花ゐよらでも名ぐはしき哉

淺間山　淺間山たてる烟ゝ富士のねゐおよばぬ程をくゆるなるべし

海　大空まや四方にめぐれるをたつみの浪ぞ外ゝ重の守ゝける

湊　よもの海の湊ゝひろし吾國ゝ常世の舟もよるべとおもへば

湊夕陽　さしてくる堀江を近みおろす帆ゐ入日をたゝむ松浦舟かな

河水久澄　千曲川そこのさゝれの年をへて岩となる世も水ゝたえぜじ

田舍夕　夏うまの重荷おろして丁等ゞかへる家ゝに野かぜたつなり

疎屋蔦　うるさしとまつはる蔦をひきもせぞよろゞひぬべし竹の柱ゝ

古寺嵐　み山木のかれたる枝をふきをりて風もつかふる法の庭かな

塵　風の前にありか定めぬ塵ひゝのいかに積れば山となるらむ

筆草といふものを

こよろぎの磯間の蟹の手もさびにかき集めたる筆草ぞこれ

松露といふ草ひらを

ときは山松の朽葉にまみれたる露の玄ら玉かぐはしきかな

豆腐を　沫雪に色さへ名さへ通へども六の花とゝ見えずぞありける

春秋野遊　春といひ秋といひつゝ遊ぶかな年もはてなき武藏野のはら

旅中思故郷　遠つあふみいなさも玄らぬ海に出てゐくがれゆくを妹玄るらめや

旅のやどりに雨ふりければ

ゆきもせぞとまりもやらで雨雲のたち休らへる旅の空かな

箱根金剛王院に宿りける夜

あしは海や嵐にきはふ浪の音を四方にこたふる山びこの聲

寶藏が嶽ゐて　足ゞらの箱根の山のうちにこそ天つたからの嶺ゝありゝを

雨降は麓の宿りゐて

とく〳〵と岩もる水のいさめぞゝ千世もおゝゐだをまむとすらむ

矢田山にのぼりて

矢田山の松は木間にをせの崎こぎたむ舟の見えゞくれする

久能の御山ゐて

伊豆の島あらしま風のふきぬらし久能の高濱波さわぐなり

田子の浦にゆきて

あさりをる少女にとへば田子の浦ゐ汐滿ちくれば玉藻よるてふ

春の旅　旅衣はる野のすゑに來て見れば霞もはてゝつゆけかりけり

春の始つ方駿河路をすぐとて

み山より春ゝきぬらし足高やかすみの牧にこまぞいはゆる

二月二十日ばかり越の國へ旅だゝむとしけるに庭の梅此花盛なるに其事となくてよめる

うまぎして軒端を守れ梅此花みになる時にわれかへり來む

韮山ゐて　韮山やちゝたの春を來て見れば庭の玄ばふに雲雀なくなり

夏　旅　木陰ゆくながれを旅の枕ゐて照る日ざかりゝ畫寐してけり

卯月の末田舍にありて

とり〳〵に急がるゝかなさ苗卿ゐ田ゝ麥の苅玄はにして

駿河にありける頃五月雨を

梅雨の雲ぞとゝろく不二のねの高ねの雪もけふやとくらむ

ふじの大宮司和爾部の家ゐて

ふりにける車やどりのゆかしきに今もとゝろく蟬の聲かな

夏の頃相模川のほとりゐて

河岸の根じろたか萱ゐひふして夏ゝふかくも見えわたる哉

文月一日故郷を旅ぐつとて

さもてそゝ露けき旅の道ならめ秋と共ゐぞおもひさちぬる

雨にゐひてゐふりの麓此里に宿りたるに其夜月はれたり

雨によりみの毛の里に宿かりて雨降にすめる月を見るかな

長月ばかり箱根の宮城野といふところを通りけるに年ゆたかなりとてをとこ女のよろこびゐひけるを聞きて

足柄の八重山ゐひの谷かげにつくれる小田もみのる秋かな

下野國黑羽の城玄らも君一年駿河の國府の守としてかしこにいます時ゐのれもそこにありて歌のこと講じけるに歸らむとする時よみて給ひける　故里へたちかへりゆく時ゝ今秋の錦やさぞかさぬらむとありける御返しに

今よりゝ嬉しきことや重ねましきみがことばの錦かづきて

旅中多　旅にして冬ゝぎにけり吾妹子が髪のよもぎも霜ゲれやせむ

冬さちける頃掛川の宿の旅居ゐて

時雨せばやどりやせまし小笠山こちの宮ちに冬ゝ來ゐけり

十月ばかり金谷の宿ゐ旅寐せる夜入方の月をさまじければ

河風の北ふきあゞて鈴がねのさやのなか山つきさえにけり

神無月ばかり清見潟の宿あて

清見がた夜はにふきこす沙風をあかつきかへも不二風かな

神奈川の驛あて

五百重波たちよる磯の松が根に群居て千代となく千鳥かな

旅ゆく人に火打をゝくるとて

君こふるゑたの思ゝうちいづる言の葉も猶つくさゝりけり

岸雅樂介の都に歸るを送るとて

都路の五十の驛も繪ざくゑゝ所ゑゝめてたゝゝゆくらむ

近江ゟ國の人の故郷へ歸るを送るとて

忘るなよなれゝし雪のはたち山はなの都のふじゝ見るとも

但馬の出石侯の歸城によみて奉れる

まそらをゞさつ矢手ばさみ入佐山君があたりと聞や渡らむ

水無月ばかり土岐久郁が但馬國にかへらむとして又の卯月ゝ殿にゞしてこむなど契りて

いでたゝむとする馬ゟ餞あ

今こそあれ入佐の山の子規また來むとしの卯づきわもるな

ある僧の筑紫にゆくをゝくる

願ふてふにじゝはるけし古里のつくしに千代も中宿りせよ

文政十一年む月一日相模國にありて

昨日こそ年ゝくれしか雨降やま杉の葉ゑのぎかすみ棚びく

年内立春ありける又ゟ年の元日に

冬かけて來し春なゞら今日といへゞ猶新しき心地こそもれ

かならゞといひてとはゞなりぬる人の許へ春になりていひやりける

松山のまつとせしまに荒玉のとしの浪さへたちこえゝけり

人々と共に子日野に出てかへさにある人のゞりさちよるとて

子日する春のあそびに事よせていもが心のまつもひき見む

む月の末野に遊ぶ

霞たつ末野のいはに來て見れゞかきはの梅の時もぎゝけり

杉田の梅見ゝゆきて

風ゆるき春のいそわの里つゝき梅が香さへぞ夕ありきもる

其所に一夜やどりて

くらき瀉霞みてふくる春の夜はかぼろ月夜に梅かをるなり

大槻の村大神の社に梅を見て

ちはやぶるい垣ゐたてる梅は花匂ふや神のこゝろなるらむ

二月ばかり賴樂の君始めて白金の庵を訪ひ給へるに

菫さくにはの芝生をさながらに君ぞ手馴のこまにかひてむ

蕨をりに友をいざなふ

かもみたつ野邊のさ蕨折もよし時もきさらぎけふな過しそ

三月の頃眞洲崎ゐて

右ゝ不二左ゝ筑波たゝむかふつゝみゝ花のもみ田がはかな

角田川春のゆく瀨ゝを こゞけきにうつろふ花の習はざるらむ

上野の櫻の花を見て

松檜のみ茂れる岡とつねゝ見き春こそ花のうてなありけれ

二月の頃飛鳥山にゆきたるに日くれむとするに

やまの名のあすともいはじ櫻花月ゐもかゞのあらまし物を

高輪此谷山ゐて

此岡此はなの盛をうみごしの安房ゐもつげよ八重の汐かぜ

夕月夜のをうしさに櫻の花をよめる

夕づく日名殘もさめて月かげゐにはひうつれるやま櫻かな

有明の月かゝもしろき夜櫻の花を見て

月ゝやゝ光をさまる有明にはなのにほひのまさりぬるかな

花此もとゐ宿れりけるに笛のねの聞えけ此ば

木の本にこちくの聲ぞ聞ゆなる花見る人ゝまたもありけり

彌生ばかりある君の別業ゐて

櫻さくかすみの奥をとめくれゞ猶この宿此木ざちなりけり

ひとゝせ下野國黑羽此城ゑらす君の駿河の御城代ゐて國府の官人を集めて花此宴せさせ給ふ席に侍りて

益良雄のもるさのもとゝ咲く花の仇てふ風もよせずぞ有ける

春と秋といづれうまされると人のとひけるに秋に心ひくよしことわりしを櫻の花盛ゐ此時をいかゝ見るといひおこせさりければ

春の野にたつやを鹿の角をなみあらそひがたき花の時かな

春の頃志賀の山越といふ事を

山の井のすまゐなりにし故里わわかゐも花の色を見るかな

彌生ばかり文昇が雨降山の庵を訪ひて

松かげに笠やどりすれば春雨のゑばふる人ぞ集ひたりける

彌生ばかり田舍見むとて人の訪ひきゐければ

苗代の小田の ゑめ繩うちはへてくる春ごとに君いとはなむ

三月の末角田川ゐて

ゆくはるの湊にちかき角田川はなの後瀬ぞゑづけかりける

彌生の末つ方ある人のかくれがを訪ひて

櫻ちるいはがね清水せきとめて春をよどむる宿ゐもある哉

同じ頃相模川に遊びて

鮎くめば花こそかゝれ水上の飯やまの春いふけにけらしも

やま川や谷のゑば橋ゑばらくい花の後瀬にかくるなりけり

同じ頃牡丹を見て

深見艸さける日數をかぞふれば春もはづかになりにける哉

藤の花の盛に人の許にいひやりける

君とはゐ成なましかば藤の花まつに繁れるかひおのらまし

雨降山ゐて子規をきゝて

あふりねを我こえくれば雨衣みのけの方になくほとゝぎす

こがひする家ゐて

あしのやのこやの白糸引く業の繁きによるも目をや合せぬ

撫子をやどとなさ御前に奉るにそへて

ちりもゐぬ玉の砌にうつしてい心やゐかむなでし子のはな

宿に夕顔のさきたるを

黄昏いときめく花もさくものをゐもてぶせやと思ひける哉

千もとの松原にすゝみて

沖つ風ふきこす磯にたゝゐめば照日にぬれし袖もかわきつ

水無月つごもり山里ゐて時鳥と鶯とをきゝて

かへりきてすむか鶯はとゝぎすみ山隱れゐむつがたりする

ふなじ日嵐大方ならざりければ

わたつみの水まきあげて山つみも野槌もけふゝ御祓すらしも

文月十五夜月を見て

こむ月の今宵の月をこよひしも思ひなぞらへ詠めけるかな

芝の長應寺ふ月のまとゐしける夜ふ坊に樂の遊しけるをきゝて

青海の波ふゞ月ゝふけゐるまねきかへさむ鄕の手もゞな

葉月ばかり河野通明が家に元英正風らをつどへて月の宴をけるを久郁ゝ宿直ふてえこさりければよみてやりける

君ゝ今なのりやすらむ私のつきのまとゐゝうしにありけり

澁谷の里にふじのねふ向へるをぐきなんある八月十五夜そこの庵ふて宴しける折に

望の夜ゝ月かげ白しひさかたの雲井のふじに雪も見えつゝ

八月十五夜駿河此國府なる元海が許に月見むとて契りれけるを島田といふ所ふさらぬ事ありとていふけれゞ獨奈藏の家ふ月を見て

から衣うつてふ山のひとへ山へだてゝ今宵つきを見るかな

島田の宗長庵にこれかれつどひて月まちける夜雨いたうふり出ければ

月まつとまとゐしてける雨夜にも隈なきものゝ心なりけり

風をさまむく月わかゝりける夜よろぎの濱ふて

磯の浦や夜潮のなごり風あれて玉藻につきのかげぞ亂るゝ

鎌倉の鄕ふて月を見て

鶴が岡松風さえてまをら男のたゆひの濱につきふけふけり

ふなじ里ふて野分を

沖つ風ゆひの濱まつうちこえて野分ふくなり鎌くらのさと

野分去たるあしたふ籬の花を折りて人のもとへ

縣見に君もやくるとまたれつる庭の千艸ゝうつろひふけり

大井川のほとりふて

大井川やなせをすぐる水の音の雲井にむせぶけさの秋ぎり

曾谷といふ所に砧をきゝて

風の音にねざめてきけば荻の葉のそやの里びと衣うつなり

小谷正風ゞふややけざまよりたうびたる菊を瓶にさしてあるじまうけせるに

うちとけて我物顏に見る花ゝ君がそのゝときくぞかしこき

長月の末つ方のりしほ此田づらに亂れたるをみて

雁がねいつぎて渡るを長月のあきにかくるゝ里もありけり

神無月始つ方柏原といふ所にやどりける夜

ふじのねゝ常なるものを冬きぬと四方の村山時雨ふるなり

同じ頃其あたりゐて冬の歌あまたよみける中に

ふじのねの裾野のふゝき末はれて足柄やまゝ月ぞさゆなる

同じころ山踏して

山かげの眞木の板屋ゝ杣人のゑぐれのためと造りやゝせし

冬晩といふ詩題を

この頃ゝ日かげ霞みて山まつの風のゑらべもゆるき冬かな

霜月ばかり箱根をこえて

足柄や八重山ふゝきわけくれゞ關のこなたゝ時雨なりけり

霜月一日ばかり緒川のほとりゐて

河のべのひさぎふきしくさ夜風に入あへぬ月の影ぞ寒けき

曾谷といふ所ゐて月を見て

久方のあふり風を身にゑめて雪げのそらにつきを見るかな

冬の頃駿河のもばしりの里ゐて

よし田女が歸る山路の夕雪吹いたくなふきそ駒やなつまむ

雪のあまたさびふりける頃山里にて

目なれなゞ玉のをぎりもかゝらまし此ごろ雪ぬ珍しげなし

伊豆の重雄のもとゐて

歸るべき方もゑられぬ雪の内にふることゝ學ぶ道ゝわりけり

駿河の吉原の宿なる冬雄が家を白笠亭といふに

東路をゆきかふ人の笠の雪さながら不二のすがたなりけり

師走ばかり月あかき夜霰ふりたり

淺篠原さゝの葉ゑのをふる霰かぞふばかりにさゆる月かな

年の暮に豫翁が許より春の設せむゐ錢ゝありやといひふこせける返りごとに

世中に通ふあしこそなけれども妻木の道もとしゝゆくなり

白金の里に人の家を買て住みそめける頃游清がもとよりをみをてゝ我ゝ出にし山里に君

かくれむと思ひうけきやと詠みてゐこせたりけれゞ返し

見出たりと我すみそむる山里ゝ君がふるしゝところ也けり

ある御堂に宿りけるに禪師のいへらく此如意禪林ゝいにしへ旭將軍の思ひ人巴子の舊跡なりさるゝ木曾殿近江の粟津が原ゐてうたれ給ひける後ゐさる便ゐりて此國にくだり艸の庵を結びてかの御菩提をとへる跡なりと語りけるをきくゐもせゝろに物悲しく覺えて

粟津野の露のゆかりの跡ふれど今もむせべる艸のいはかな

伊豆國の袖子に始めてゐへる時

古をかさりかはせゞ逢見るも今日をはじめとおもはえぬ哉

かへし　袖子　さまゐへゞゐひぬるものを諸共に通ふ心のなるゝなるべし

釋義門が許へ消息つかはしけるに

若狹路にゐりときくなる後瀨山別を立て後の名ゐこそ有けれ

慶性上人のもとまずなりぬる坊をとひて此上人ハ笛を好ゐり

松風の聲よりもけにわびしきゝ吹ゐはすめる友をなみかも

述懷　天地ゝま廣きものをうつゆふの狹き事ゐやまつはれぬべき

ゆく末をなは思ふかな古のゐらまましおともたがひ來し世に

陸奥の千島のえぞがとる魚のさけても世ゐゝさすらふる哉

からき世を猶すてやらぬ心こそ蓼はむ虫のたぐひなりけれ

雲かゝる山とゝならで塵此身の年のみさかく積りぬるかな

水の上に落る木葉のうきおがら猶ながらふる世ゐこそ有けれ

數ならぬ身ゐゝあれども玉櫛笥ふた心をゞもたじとぞ思ふ

我身のみなどゝ歎きの茂るらむなべてゝ花の春に逢ふ世に

寄苗代述懷　山がつゞ苗代水のそれさへや思ふばかりゝまゝせざるらむ

寄五月雨述懷　梅雨のゐれくを闇のぬかり道世ゝゆき難き物ゐぞゐりける

冬述懷　時となく玄ぐるゝ袖に神無月なに今さらにゐめのふるらむ

を笹はらふるや霰のさら〳〵ゐさてし心のすゑゝみだれじ

歲暮述懷　とぢはてし岡の枯生の白雪のふりにし道をふみわけまはし

いたづらに暮にけるかな今年より只にえやはと思ひし物を

昔べも春まつことゝゝひとしくて惜むてゝろぞ年ゐそひゆく

寄籬述懷　何事をかけてまつともあらぬ身のゐやなくも世にふる籬哉

春懷舊　面影のゐぼろけならぬ見ゆる哉月やむかしの春をかすむる

寄月懐旧　いつしかと人ゝ雲井になりはてゝ月のみなるゝ袖の上かな

寄霜懐舊　今も世に幾その年の霜をへて言のはのみゝ枯れせざらむ

鎌倉懐古　鎌倉の大城のあとゝゝあか駒のはらばふ田居となりにける哉

駿河の沼津なる六代君の去るしの松を

　おゝ此よる荒磯陰のひとつ松もとのなげきの朽ずもある哉

故薩摩の督の殿の御一周の忌に寄時雨懐舊といふ題をたまはりて

　ふるひゝ乾かざりけり君ましゝ昔をこふる袖の去ぐれゝ

但馬國出石の城去らぬ君の御母刀自みまからせ給ひゝる御一周の忌に

　あらきせし去年のにひもの跡とへゞ夏艸深き野べと成ぬる

濱臣のみまかりけるに

　かねてより現ともなき世中をさらにゆめかと思はゆるかな

伴廉ねしの身まかり給ひける時

　世中に一つのかどを我もたゞ君ゞ名さへもたてむとぞ思ふ

袖子がみまかりぬとき丶て

　百たらぬ八十隈さかを尋ねてぞよになき人と思ひはてまし

妻の病をしてかよわくなりゆくに藥の事何くれととりまかなひて物しけれど頼すくなくこえけれゞ思ふ心をひそかに

　世中をかりとき丶つゝ年をへて吾もとこよの床ふりあけり

ある年の二月ばかり上野の岡の花盛なりけれゞ今年ゝかゝらでもがなと思ひて

　すみ染のたもとやつるゝ世の人の心も去らぬ花のいろかな

釋　歌　もとよりの佛と去らで今さらに我身のなると思ひけるかな

開佛知見　世中ゝなにはの蘆のかりの身とおもふやゝゞて悟ならまし

法華經譬諭品の心を

　たとへつる三つの車のみつもなく二つもなしや妙のみ法ゝ

提婆品　わたつみの神の少女のひるがへす袂ややがて法のころも手

　ふるひきや法をつたへし仙人のこむ世の仇にならむ物とゝ

魂祭のことをへてなき魂をおくるとて

　空蟬の世の人おらゞ去ばしとて留ひるすべもあらまし物を

つとめて尼の讀經の聲をきゝて

　いさりするこ去聞ゆなり海士を舟衣のうらの玉もとひらし

てる子ゞ娘の尼ゐなりぬとさゝて其母の許へいひ遣しける

世をうしと厭ひすてつる髪よりも親の心よいかにみだれし

頭ゐろしける頃

法の爲ゐろすゐもゐら世黒髪の長からぬ世を厭ふまでなり

同じゐろ故郷にまかりて

ふる里も今ゝ旅寐となりゐけりさてもこよひゝ心ゐかれぬ

祝　　挪ひても猶つきゐへぬ塵ひぢを君がへむ世の數にとらゐむ

春　祝　萬代の春にゐひつゝさくものを花ひとゝきと何かいひけむ

寄　社　祝　氏人のいはひてつくる瑞垣のひさしかれとゝ神もいのらむ

島田の驛の桑原ゐにゞしの娘に遠つゐふみのゐゐのしのもとよりむすびの物ゐこせける

むしろにありてよめる

この園に時めくはなの女郎花千秋をかけて玄めやゆふらむ

ある人の六十賀ゐ寄松祝

大伴のみつの松ばらつばらかに君がちとせの末も見えつゝ

竹村茂雄が七十賀に竹不改色といへることを

月雪に友わゐれせでこの君の千年のかげをゐふぎてしゞな

ある人の八十賀に寄若菜祝を

つみきつる八十路ゝ老の數ゐらず千代を玄め野の若菜と思へば

越の白山の社人杉本左近がゐばの百歳の賀に

白山の玄らぬ昔のことを今もゝとせ經たるひとにとはゞや

社　頭　柳　神垣に紅葉のぬさゝ時すぎてさかきのみこそたち榮えつれ

文月十日ゐまり三日の夜ゐらし吹くゐと大方ならずもべて此月になりてゝ照る日のかゞ

を見ずして民の愁ふること甚しわきて此富士の麓の里ゝたなつ物もみのらじとて愁へさ

まよふさるからに此神につかふる禰宜等こよひみてぐらさゝげて事のよしを神にうたふ

其儕玄ろによみて奉れる

天の下うれふる民を高やまのすゑより遠くみそなはしてよ

其夜のほどに風なき雨はれて皆人よろこびゐひぬ

畫　賛

山に櫻の花さきたるかたに

いくとせの花になれてか櫻さく春の山路へゆきよかるらむ

山賤の花のかげゐてやすみたる繪に

新こるわざゐ忘れて山がつもはなにこゝろをくだく春かな

吉野山に松と櫻をかける繪に

松にふく嵐の風もゐしこめて花にこゑあるみよし野のやま

あそびた里に櫻た花ゐまたさきけるうたに

河添のうつろふ花の影とめて結ぶやふかきえゐかあるらむ

朝顔晝顔夕がほと一つ株にかきたるかた

さく花へいづれともなく哀おりゐした夕べも露のひるまも

殿上人檻によりて月を見るかたへゐ松たてり

ふけゆけば松を離れて秋風の月のそらまですめる夜はかな

男女もの外に立て鴈の渡るを見たる

秋へきて春べへ歸る鴈がねのかりにすむめる人へたのまむ

瀧のほとりに紅葉ゐるかた

もみち葉のちらまくをしみ落たぎつ流るゝ水や音せざるらむ

菊の名に　移して〻四つの時ゐぞ匂ふめる秋去る花の菊ゐへあれども

瀧に紅葉のちりたるかた

山姫のたきの糸もてゐる機にうきゐやなすへ紅葉なりけり

さが野の名に　をじゃなくさがの山里秋ふけて木間の月のかげぞさびゆく

月雪の山水のかたに

みなれ棹さしてしくれば月雪の影も去らをてあけぬ此夜へ

佛名た法師の綿かづきたるかたに

筑紫綿かづくゐつけて目に馴し山路の雪やおもはえぬらむ

小倉山かける繪に

小倉山をのへの空へくれそめてふもとに殘る三日月のかげ

松に鷹のゐたる繪

十返りの松にとかへるはし鷹へ千代のとぐらをおゝに去むらむ

野馬の繪に　雲ゐちにのぼらむ望の駒よりも野ゐすむかげや心ゆくらむ

水に龜のうきたるかた

萬代をまつらの河の七淀にとしをふかめてすめるかめかも

三保の洲崎の畫に

清見がた三保の洲崎のあらゝ松かずさへゑえてすめる月影

住吉のかたかけるかた

神代よりたえゑ來よする住の江の岸のゑら波老にけらしも

尾上の鐘のかたに

世にひゝく此鐘の名にくらぶれば音ゝきこゆる限ありけり

風竹のかたに　そよときく聲こそなけゑ打そよぐ風の姿をさえぎあぞ見る

伊勢の御　三輪山のすぎし其世の言のはぞ千年くちせぬゑるし也ける

小野小町　水上にねをたえてける浮草の流れての世にゑげりぬるかな

大友黒主　山賤も花ゝめづるをひたぶるに薪のみやゝ身にゝふふべき

阿部仲麿ゲめい玄うふて彼國人と宴せる繪に

日の本に我しかへらば此月のいりなむ方やゆかしからまし

平忠度　やどりせし人も人はた花も花うちあひて世にかぐはしき哉

實盛　武士のたけきその名も池水に洗はれてこそあらはれあけれ

巴女　さえかへるをぴえ風を身にゑめて雲隱ゑにし朝日をや思ふ

佐々木梶原ゲ宇治川の先陣あらそひの繪に

言のはにかゝりて淀む河波をたちゐくれぬと人や見るらむ

松陰に樵夫のゐたる

年たかき此松かげゝ風をれの妻木さへこそときはなるらし

女をすかゝげたり

人皆の思ひかくるを玉だれのをすの誰ゐか見えむとすらむ

大津繪の鬼　あらはれぬ心の鬼にくらぶれば此の姿こそやさしかりけれ

日善聖人畫工文二に我自像をかゝせて歌かきてよとのたまひければ

影をさへとゝめける哉ありはてぬ此身をだゐも厭ひし物を

君澤撿校の想夫戀をきゝて謠へる今樣

君ゲつま琴きく時ゝ千年のぶめり三島江や松ふく風よ白なみよいづれゐはれをあらそへり

かへし歌　鳥がなく東にゝあらぬつくし琴都はなれて聞くがゐはれさ

長歌部

子日に歌みじり歌

山澤に若菜をつみ野にべに小松をひき若菜なす年いつむとも小松おすたち榮えつゝ萬代に
かくしもゞも千年わをかもあらむと君をほぎ身をもぞいのる萬代に千代に

わか菜はも國のさたものよろづ代につむや若菜いくにのさたもの

梅をめづる歌

霞さつながき日くらしまつ人の香にあやまたるあなうめの花まつ人い誰となけれどそゞ色
をゑるとふ人それが香をゑむとふ友にあやしくもまたれもするかあな梅のはな

櫻をよめる

言のはいやまと言に葉さく花い山櫻ばなさく花お言のは榮え言のはに花いにはへりこれぞ
此やまとの國のうら安きくにの姿ぞ言のはも花も

角田川に船を浮べて花を見る長うた短歌

角田川綾瀬をづけみ春の日に思ひにどめばあたらしき時や過ぎむとふしづくる橋場の岸に
網手ときこぎたみくれば秩父ねの雪げの浪うもたつみの朝みつ汐の打わたす堤のあたり白

妙に匂へる見つゝ高瀬舟さしはへ見れば戸とる棹の雫もかをり網手くる袖もくゆりてさく花
のゝかゆくはどい水もてりたる

反歌

岸みれば目さへぞうつるもみ田ゞはいづれの花にふねいつながむ

水無月秡を

わきも子がわざとつくれる筑波ねのにひ桑まゆの新きぬを宿にかりたてかりたてば川風す
ゞしはらふれば心し清し上つ瀬の玉藻いあれど下つ瀬の川藻いあれどつゝみなくもおくも
われいなりにけるかも

駒迎をよめる

ゑなのなる霧原の牧ひさしなる立野の牧とこちゝ〳〵の國の牧よりぬきのぼるかげの駒月毛
のこま逢坂をけふこえぬらし關山を今こえぬらし此夜ちや雲井にのぼるかげの駒月毛の駒

惜秋といふことをよめる

ふく風い人を悲しめおく露い艸をからしむ其風のふきたつ秋其つゆのおくなる時と世中に
わびしみすれど其秋の暮るとしいへばゑかすがにをしまるゝかもあはれ其秋

おなじ心を

花になれ紅葉ゐふける春秋いづれとなきをさゝ波や大津の宮の宮姫のことゐりしより歌
島のやまと心い誰もみな秋によりつゝ志のびくる紅葉の時のすぐらくをしも

反歌

おをきをゞおきてなげくとせしゑどに紅葉のあきいもぎにけるかも

朝霜といふことをよめる歌并短歌

夕立い耳かしゞましむら雨い心わわたゝし春雨も露にぬとなひ白雪もものに聲ありふるも
のいづれ音あるをかきさえて音なき霜の朝さぶしも

反歌

志ろたへゐふりおける霜を見るばかり心に志むるわけばのいなし

富士をよめる歌并短歌

駿河在不盡乃高嶺者旭影悲向則内日刺京之方波此山之蔭二於寶者禮夕日鹿毛蔭路布則雞可
啼吾妻之象母是岑乃陰二角理努信濃有淺間之岳天礎々留越乃太刀山狹衣能小都久婆能峰已
地巳地之山止布山乎悲杼形爾伊豫勢建友此山二豊如眼也門天地乃曾古飛之汭爾掻父母夫婦
田鶴常不有布士之司馬山

八十國乎覆毛摺可此山之朝日御蔭暮日能三蚊解

今母尙燃朝魔者不盡嶺二不及舉乎悔留成哉
天之原雲井二立累布士之根爾並倍留物者月日也介里

不盡をよめる

天ざかるひなに名さゝす駿河なる不二の高嶺い我國の寶の御山人國ゐ聞ゆるみたけ神の代
に遠くきこえし人此世に今もめにみて世中にともしをねれゞ海外とつ國までもいわふぎて
かたりゐすれゞ日の本のやまとの國此おのゴからを志ゴめとなれり此山の神の心か古い烟た
ちつゝいたゝきに火さへもえしを思ひなきめでたき御代と神さへに御心あぎて思もたえ烟
すらたゝずなりぬる後の世の今のうつゝに人みなのたふとみ仰ぐ此山い神とも神ぞかきか
ぞふゐはゐゐ思ひそうつせみの世ひと

山崎の殿の國にかへり給ふ時よみて奉れる

吉備の國道の中なる川上の成羽の里ゆ鳥がなく東此國の大江戸の遠此御門にはろ〳〵につ
かへたまふと年のはにいゆき通はす足引の山崎の君水無月のてる日盛も秋風のたゝむわし
たもつゝみなくもなくいませと家ながら我いぞ祈る其國玉を

反歌

君が志る吉備のつら島つら〳〵におもひもやるゝみちの長手を

ものゝふの旅にさせるかぶら矢のなりはの里ゝゆかしくもあるか

あからさまに舊里にゆく人におくる

旅居もよ十年をふれゞふる里の心地のすとふ故里も月日へぬれゞ旅寐なすおもひなりとふ

ふる里のうつのみや路を旅のごと假に見なして明日のごと早もかへりね大江戸の家に

反歌

かりがねにもよはされつゝゆきぬともかしこを旅とはやかへりませ

かみつけの國佐野のわたりをとはりけるにむりし此あとゝおぼしくて今もく

り舟してわたす川ありかの親ゝさくれどといふ古ことをふと思ひ出てよめる

ちゝゝもよ天なす御かげ母ゝもよ地なすめぐみ其父のみかげをはおりそ此母の惠をすてゝ

うけひてし佐野の中川たえぎゆく水ゝあれども人わたを舟ゝのよへど天地にうけひく人の

あとはかもおし

反歌

これやこの佐野のなか川いにしへに中たえさてふさのゝなか川

吊古戰場

梓弓末の中ごろあし原や亂れし國をいにしへの手振にかへし大君のとはの御門と薪こる鎌

倉山に千萬の臣をひきゐてまつりごとまをし給ひしものゝふの大まへつ君萬代にかくしも

あらむを世中のさがみの海にあさりする海士此おむなゞ釣ばりのまゞて事とりうけ繩のを

ぢをゆがめておのが家の幸ゐなしつ濁世此ちりにつぎつゝうみの子のこゝのつぎまて世

中をまつりおちきて掛まくも畏きかもよをめろぎをのろめまつりてこゝの島かしこの崎と

わりなくもうつしまつりぬそこをしも天やとがむるこれをしも神やにくめる上つ毛此新田

の山の山風のきそひたちつゝ艸も木もふきあたしてを山ゝ海海ゝひかたにわたら世と平ら

ゞゐけむ古の跡こそ見えね荒磯や其世の名殘山畑や其城の跡と松風此音のみ殘る鎌倉の里

反歌

ものゝふの八十のたけをがいはめりし稻村がさきに鳴ぞなくなる

青蓮花此靈地をよめる

くをしかも法のゑるしとま清水のこゝにわき出てはちを葉此花さきしより其花の世にかぐ

はしく其水のふかくたゝへていはまりの年ゝへにけり妙なるやこれのみ法ゝ泉なを遠くな

ゞれて蓮なすひらけゆくらむ萬代の外に

反歌

よろづ代にひらけむ法とはちすさく池のこゝろゝかねてをりけむ

龍神の富士をこゆるかたに

くしきかも雲の一むら麓べにおこると見れば山風のあらそひたちて大空にいよぢのぼるい
せの海にひそめる龍ゥふじ川ゥすめる龍か入日さす高ねをさして天がけりゆく

かはほりのゑに

鼠はゥ翅ゥあらぜ鳥はも夜目ゥ見えぜとかはほりのはこらひ居るよ世のさかし人

文盟ぬしが繪の道にたくみなるをめでてよめる長歌みじかうゝ

うつしゑゥあやしきものか世中にありとあるものをたはやすく筆にまかせて春山の櫻をか
けばなべて世ゥ常にのどけく秋の野の艸をうつせば八心とはにうるはし久方の月をいだせ
ば其かげの手にとる如く荒ゥねの土をゑがけば山川もそおにうかべり山水此心ゆくものゥ
繪ゥこそありけれ

反歌

繪だくみのふでのぜさびの上ゥこそ所ゑゝひるわざいゥありけれ

三哲の贊

玉ちはふ遠つ神代にありきとふくしき言ぐまさひづるや唐言のはのゑき言にまじおちれし
を津のくにの浪花高津のはまもせにきよする舟ゥ法の師のわさりいさりて年久にうもれし

玉を玉藻なすかづき出つゝ世の人の玉とゑめせど荒磯の石と人おと大方ゥ思ひなしつゝと
き人もまれらなりしを遠つゥあふみいさな細江にすむ鳥のかもの大人しも其玉を玉とめでつ
ゝ旦暮に手にまきもたしうらやすの田安の殿にかしこくもさゝげてしより其君のみかげさ
へそひ世の人も玉とゥゑりぬゑかゥあれど猶ゥあら玉の年月にみがくとすれど人の世ゥ限の
あれば玉つくることも果さぜもみぢ葉のぜぎいましぬれ此大人の教をうけし人ゥもよゥあま
たあれども神風の伊勢此國なるさくゝしろ五十鈴の宮の宮柱ふとくをゝしきむら肝の心を
たてゝ鈴の屋の翁しもこそ其たまを更にとぎつゝさきたぜゥすりもみがきも曇なき眞玉と
なしつ古のたとき言ぐま世中にふたゝびちはふことの尊さ

反歌

あはれこの三人のおきなかりせばうもれし玉のひかり見めやも

陸奥國白河郷人正田宗閑賀滿百歳歌幷短歌

萬代もことのはぐひぞ千代といふもことのなぐさぞうつしくも誠へにける百年の翁がため
ゥ何をかもためしにひかむうべなゝあとゝもこそあれ神ろぎの神のみよへて遠長くつかへ
まつりし武内の大臣こそゥ百年を三度へにけれこれをしも例ゥゥせむ今よりゥ大臣にゥえ
ね百とせのをぢ

反歌

ことゝもなくへにける年のもゝとせを更にかさねむ末のはるけさ

文章部

子日此辭

む月それの日、思ふどち是かもつどひて、宴をなむをける。誰も〳〵をひすゝみて、今日い子日なりゝり。いざたまへ諸共ふとて、野べにあくがれ出ぬ。霞のとばり芝生のむしろに、小瓶すゑ引おひらき、又くみうはしつゝ、さかな求むとて、岡にのぼり澤にのぞむに、松此かげ水のくま〳〵ふ殘れる雪の、猶友まちがはなるも折ふはれなりや。或いかざしにもとて、柳のまゆにてもれることをうちみ、あるいうそぶきて遠く遊ぶい、谷の鶯をもおどろかすべし。そこともいはぬ旅ねい、かゝる折なむをつべかりけると、人々いひあへり。此まとゐの中に、ある人此いはく、今日しもかく逍遙をる事い、いつの頃よりぞと問ふに、一人が答へけらく、さりやいつの時といふこといさだかならねど、おほよそ寛平の頃はひより始まりけむ、朱雀院の子日せさせ給へりし時、左のおとゝのよみ給ひし歌、後撰集にみえ、某の日記ふい、けふい都の子日のことゝいひ出て、とかさたれゞ也といへゞ、さなのたまひそよ。初春の初子のけふと、早く萬葉集にあるにあらぎやと難ぎ。其天平此昔い、松のためしふいあらじ。遠く唐のことをやひきうつされけむ。てゝの今ふいいかで、

世にふりし昔の春のことのはをけふはゑ野べにつみいづるかな

とてうちはこらへゞ、にくさに、まとゐの中より、

ふりぬとて思ひなもてそ春日野の雪まのわかないまもつむめり

かくいひ去らふ程に、皆ゑひ去れて、去らずなりぬ。家に歸りしや、野邊にねたりしや。

年のくれに述懷の辭

年波のよせくるばかり、世に暇なきも此いあらじ。さるいから老ふたる身ふい、面ふさへよりくれゞなりけり。これや此ぎがめし月の積ぎるならむ。徒にぎぐしゝ日數の限ふやあるべき。今い月日もよまじ。年も思はじとさへ思ひなるふも、猶ゆかしきい上つ代の手振になむある。そのかみ某の書のはかせまうでおざりし程い、稻たねの一度みのるを一年として、四の時のけぢめもゆはびりなりけらし。櫻の花の咲くを見ていい種をかし、山子規の聲をきゝていさ苗をとり、はに出る時を秋といひ、刈り收むる折を冬とはかり、こまやかなるわいだめわらざめれゞ、只花をゞ花とのみ見て、白雪の身につもる迄い思ひたどらざるべし。わはれさるならはしのまゝならましかゞと思ふも、例の古こと好む心くせならむ

かし。

うぐひすの春ゐいさてもあふものを年の限ゐ去らずもあらなむ

編者いふ文闕のうち一篇は故ありてはぶきぬ

五十槻撥葉集　終

佐喜草序

竹ゐいかに是をたわむれども上にのみおひたゝむとし柳ゐいかに是をかゝぐれど下にのみゑだれむとをるゐかの〳〵うけ得たる性なるべし吾友梅軒翁ゑき島の歌をいみじう好みて年若き頃より京にしてゐ芝山前大納言持豐卿に名簿を奉りての江戸にしてゐ横瀬侍從貞信朝臣また内藤甲斐守正範ぬしに從ひて其かたの姿を專ら學ばれゝるに其方の人々傳へ見て其よみ口古きに過たりともどきぬされども翁是を物ともせずみづからたてたるふりを守りて聊も改めず此師と頼まれし君たち皆身まうり給ひてより後ゐ今世の人の口すさびにすなる萬葉家てふ人々に交りて其かたの姿をもうつさるゝに其かたの人々見て其調猶今やうめきたりとそゑりぬされども翁是をものともせずみづからたてたるふりを聊も改めずさて其みづからたてたるふりといいかなるふりぞといふにひたぶる萬葉集の古きになづみかたよらぎまたいたく後世のひなびたる手ぶりをば清くはなれて古今集より此かた玉葉集より前つかたの調を廣く取ならしなだらか

につゝけなしておはかたの人の思ひ搆ふるふしというらうへに我と一つの姿をよみ出されたるなりけり是を物に譬へていはむにゝかの竹のさがのひたぶるおひ立んとするにも習ゝ柳の性のあながちに玄ざれむとせるをもよそに見て冬と春とをかけたる梅花の雪にもかじけず春の日影に匂ひ榮ゆるが如しかくて年に月に日にけにわだし筋に心をうつさず此道にのみおりたゝれしかゞ其よみ出さるゝたび毎にとり傳へて見きく人々あなをかしの調やあなめづらしのよみくちやといはぬなむあらざりける

そも〳〵翁いまだはたちにもいたらぬ頃より六十に餘れる迄よみ出されたる歌數おほよそ三萬首に近かるべしとなむさるをいたづらに玄そのすみかとせむも本意なくはた敎へ子どちの筆より筆に傳へむにゝ誤るふしぶし少なからねゞいかで是板にゑりてやむごとなきあさりよりみむとてはし給ふおゞ前にもまゐらせまゐ遊き國々のをしへ子たちの求めにもおくらむとて相澤賢通八木直賢田澤千郷の三人あながちにこひてさるおびたゞしき歌なれども文政元年といふ年より天保二年といふ年迄の歌を十が一とり出て此度かくゝ物しつるゝなむ集の名を佐喜草としもおほせつるゝ塵外氷姿世外心宜晴宜雨又宜陰といへるから人の梅の詩にもとづきて三ながら宜しき心にとりなせるおのれがさゐしらにこそ

天保八年酉の睦月

九江亭主人　本間游清錄

佐喜草

春歌

畠山梅軒常操

年の内に春たちける日

けふしてそさてれと思へば年の内に心の内も春めきにけり

春生人意中　世の人の心の花をはじめにて梅もやなぎもはるや知るらむ

瀧音知春　春かぜやこはりを浪にかへすらむたえて久しき瀧の音する

毎山有春　春の色の今いたらぬ山もなし花いづれの嶺よりか咲く

春風不分處　若菜摘むみやこの野邊を始にてみ山のまつも春かぜぞ吹く

むつき　思ふどち春のはじめのまとゐにゝ先さかづきに梅を浮べて

初春待花　櫻ばなとくと待つてそわりなけれ昨日今日こそ梅も薫るを

子日　子日せん小松が原ゝ道遠しおいゝつゑをぞひくべかりける

名所子日　姫小松ひくまの野べの榛原にいり亂れてぞねの日さてける

都霞　春來れば なびく煙のかもかげに都のふじもたつかすみかな

霞添春色　朝霞たゝずば春といふ名のみこと〳〵さくてゝいひやけたれむ

鶯　ふる年も鳴きゝさつれどうぐひすの春の初聲めづらしき哉

竹裏鶯　鶯のたけになくてそあゝれなれ世に珍らしきとりゝ何せむ

曉更鶯　明ぬるかめさめて見れば燈火の花ちる窓にうぐひすの鳴く

鶯閑中友　うぐひすの獨とふこそ嬉しけれよる音せぬゝおかぬ物のら

故郷鶯　古さとゝおもかた竹の藪なればうぐひすをきく所なりけり

柳間黄鳥路　青柳の枝ゝさをらじうぐひすの花にうつろふ路や絶えなむ

摘若菜　心なく野邊行く人もみなひとの若菜つむにぞ君なつみける

名所若菜　あらち山春になりぬや矢田の野ゝ若菜摘むべく雪の消ぬる

田殘雪　朝なく〳〵小田の水口音そふゝきゆともなしに雪やきゆらむ

餘寒月　よひ〳〵にまだ影さむし春の月いつかゝ窓に入てみるべき

梅　梅のはなあかぬ所ゝ木のもとの春寒きころさけるなりけり

窓前梅　梅が香のかつ〳〵句ふ朝けより北なる窓ゝひらき初めつる

翫梅花　二月もちらずばかくて過しなんむ月ゝうめの花にくらしつ

夕　梅　ゆふ月夜かすみ初たるにはに出て立休らへば梅の香ぞする
旅宿梅　今よりゝ雪をかたしく野邊もあらじ草の枕に梅かをり來ぬ
清月上梅花　梅の花にはふこゑに月出ていまゝ色さへかくゑざりけり
紅　梅　はるゑ雪いまゝふらぬか紅のこの花の上にかけて見ましを
梅紅白　梅の香をゑのぼぬ人ゝくれなゐの色に心やまづうつるらむ
　　梅ゑ花多かる庭ゝくれなゐもかならず一木植うべかりけり
早春柳　いとはやもかきねの柳色めきぬ一葉ちりしゝ昨日と思ふに
柳風靜　たとへてもいはん方おし青柳にすこし風ある春のゆふぐれ
柳多かる處　さゝ一木見るだにあるをかはづらの堤のかぎり柳なりけり
柳先花綠　いつ織らむ花ゑにしきぞ青柳の糸染かけて日ごろ經にゑり
故郷春草　春なれや昨日か雪ゝふる里の本あらの小萩ひあばえにける
花　　あさらしき花ゑ齡よひとならば四十にたらぬ頃ぞちりゑる
　　あかゑして終にはておば後の世の春も花見て身を盡さばや
　　東路の野やまの花もかぜふけば心づくしのものとなりぬる
待　花　大方の花を遲しとうらめるゝゑめおく山もなき身なりけり

初　花　までど〳〵つれなかりつる櫻花けふといふ今日ぞ咲初にける
栽　花　數ならぬ垣根のうちも春ぞかしいざ一本ゝうゑてはな見む
夜　思　花　ふゝにけりあゝれけふ見し山櫻ぬすびらむ人今やをるらむ
月下見花　暮ぬとて歸りし人ゝおも影のはなやこよひの月に見るらむ
馬　上　花　櫻ばなさけらむ山ゝまだ遠しわがこまいそげ散もこそすれ
橋　下　花　竹川のはしうち渡る音すなりたれ花ぞのにてゝろかくらむ
湖暮惜花　さちかへりあすも見ましを櫻花くれなゐおゝの山風ぞ吹く
閑　月　花　加はれる春ゝかひなしさくら花遲れたるこそ今も咲くなれ
花下言志　けふ見れば今日も珍らしをとつひも昨日も同じ花の景色の
世中おげかゝしさ頃櫻ゑ散るをみて
　　行末を思へばかなし一たびゝ花もさかりのありてこそ散れ
櫻　　山ざくら折てゆく人をらぬ人いづれか花を惜しむなるらむ
　　にはひこそ梅に遲れてさくら花色にゝかよふ色だにもなし
糸　櫻　青柳の枝にさくらも有るものを咲せばやとゝ誰かいひけむ
落　花　あらし吹くあとよりさかば幾度もちらさまほしき山櫻ゝあ

はの〳〵と霞むとやまの梢より折々そでにちるさくらかな

櫻花ちりかふ山につれもなくちらぬを見れば寂しかりけり

花は散るを

櫻てふ花ゝいかなる花なれやちるを見るだゝめづらしき哉

暮春落花　野も山もあらしは風に花散りて手折しのみぞ宿にのこれる

尋殘花　さくら花あくまで咲てちりにせば二たび山に尋ねましやは

春風　春風ゝいかに吹くらむ松のかげ過るほどだに音の去られぬ

春雨　はるさめゝ千里隔つる友かれや世にゝふれども音の聞えぬ

夜春雨　春さめの露や去のぶに餘るらむふけてゐとする軒はたま水

海邊春雨　島山のけさ霞めるゝあめなれやみの着てわたる沖つ舟びと

河上春月　夜船こぐ音ぞ河瀬に聞ゆなる月ゝさすべくもあらぬ霞めど

霞中月　はる風ゝ心よわしや何ぞ去か月をかすみにまかせはつらむ

遲日　春の空過るけしきの見えぬかなひま行く駒ゝ誰つなぐらむ

水鄕春曙　水上ゝ霞みにけりな河づらの窓はあけぼのはの〳〵とゝ

雉子歸雁　若なつむ人やもそ野に通ふらむ山かたつきて雉子なくなり

このへる雁といめかねてゞ思ひ去るこしぢの人のあきの心を

浦歸雁　うら浪も霞もかへらぬ夕なぎに何ぞゝかりの思ひたつらむ

呼子鳥　里に出て鳴やゝ去ぬ呼子鳥みやまがくれゝ人もとゝにを

藤花久薰　散失せむ物とも見えず藤波ゝ松のゆかりの色にもあらねど

折山吹　ちらぬまに折盡してむ山吹ゝ實を結ぶべき花にも有らねば

暮春山　櫻花あらじ今ゝと去る〳〵もをり〳〵山は見まはしきかな

閏三月待りけるつごもりに

なゞしとも思はえぬ哉行く春を二たび惜む心地はみして

春旅　おもかげに都のはるを先だてゝ霞をわくるまのゝかやはら

名所百首歌よみける中に伊勢海は春を

霞みけり霞みにけりあひせの蜃の舟流しけん方ゝいづらゝ

夏歌

竹亭夏來　鶯のやどりにかしゝく竹をあるじにかへす夏ゝ來にけり

林首夏　伊駒山はなのはやしも春過て若葉にくもるきのふけふかな

餘花何在　まだちらぬ花もあらまし春風の去らで過けむ山ゝいづこぞ

卯月に閏有けるとし首夏藤を

夏かけてゐはふ藤波こゝならべこゝとしゝ後の卯月まで咲け

卯月にさゝる櫻を見て

殘らむとも思はえぬ哉ゐもかげに匂ふ櫻は心地のみして

水邊新樹　若葉さすさくらにくもる谷川ゝ波の花さへ見えぬなりぬる

綠樹連村暗　楢柏わか葉はきぱに茂りあひてとゝもしび急ぐ宿となしつる

新樹妨月　月故ゝうとましけれどわか楓あくれば折らむ心地こそせね

新竹　まどの竹ひゝとよにながく成ゐけり昨日ゝ軒に及ばざりしを

牡丹　一花も折るゝあたらし深見草枝ながらこそ見るべかりけれ

淹暮卯花　ふかみ草思へば久しよは中の花は日かずゝなぬかとぞきく

卯花藏水　夕月夜ゐぼつかゐしや卯花のさける垣根ゝあけてこそ見め

灌佛　小山田の垣ねをめぐるいさら水卯花がくれゐとばかりして

郭公　いにしへのけふしも龍の灌ぎけむ水ゐそ法は水のみなかみ

花散ていくかもあらぬを人心はとゝぎすにぞ移ろひにける

はとゝぎす夜半に鳴く聲いかなれや悲しき物の戀しかる覽

首夏郭公　ゐぼつかないかなる鳥ぞ郭公きけどもきけど聞まはしきゝ

引友尋子規　ゐそざくらにはふ山邊に初聲を散して過るはとゝぎすかな

初聞郭公　ゐもふどち山路尋ぬるはとゝぎす一聲なかばたが物にせむ

子規一聲　時鳥ゐきそめつとゝきゝたれどあらぬ雲井は鳥は音ゐもし

年々郭公　一聲といひて待ちしゝ空ゐとぞやよはとゝぎす立歸りなけ

禁中郭公　郭公としにめづらしとしゝに新まり行く聲にもゐらぬを

月前郭公　はとゝぎを野山に近くなく聲を九は重ねのゐゐわてぞ聞く

深夜郭公　秋の夜ゝ山はとゝぎす鳴やもる月ゝ夏こそ見るべかりけれ

馬上郭公　よひの間ゝ去のぶもち摺時鳥ふけて一こゑみだれそめにき

都子規　はとゝぎす雲井遙にもぎにけり月毛の駒もいまゝゐよばじ

湖邊子規　子規くもゐのちかき宿にても猶はるかにぞこゑゝきてゆる

名所子規　さゝなみやゐふみの海も子規はつね鳴べき去はゝゐりけり

旅宿子規　やとゝぎすけさ鳴く聲に音羽山むかし越けん君をしぞ思ふ

六月子規　はつせ山さして行らむはとゝぎす椿市にしもゐひ宿りせよ

時鳥絶えずをきなゝゐは月ゝゐは月ゝ五月のうるひと思ひて

山里に子規をきゝて

子規みやこのつとの一こゑ聞そめつれどにてそかへらね

女どもの時鳥待つ

人まつと人やあやめん時鳥なくべきくれもひとりながめば

節後菖蒲

世中の時にかくるゝ菖蒲草身のさめしにぞひくべかりける

五月雨

とし毎に夏のも中の月かげにかもひ絶ゆべきさみだれの頃

五月雨久

朝あ〳〵きのふも同じ空を見てこゝろをくさす五月雨の頃

浦五月雨

五月雨に袂くさぬ人もなしいづれか浦にもしほくむあま

五月雨晴

さみだれの名殘かわける庭の面にゑをれて殘るいけの浮草

雨中木繁

一枝に折らばや軒の玉がしはさみだれ晴れば月ももるべく

人の家に花橘あるところ

はとゝぎすかならず待つと見せ顔に花たち花をゑむる宿哉

庭夏草

ひとむらとゑばし心をゆるすまに庭の夏草みちもなきまで

水邊夏艸

道のべの清水かゝむとゝゝむれば夏草を駒にはむなり

水草隔舟

眞菰苅る田川の小舟けふもまさ棹ばうりおそさすと見えけれ

雨後夏月

ある神の香にもめれど此里にゆふだちすぎついでて月みむ

磯夏月

梅雨の名殘の雲のさえ間よりいつ見しまゝの月をみるらむ

樹陰夏月

ふくるだにをしまが磯に夏の夜の月を殘してかへる浪かな

夏月透竹

風そよぐ檜の木間よりさす影に只あきの夜のむら雲はつき

夏月如秋

夏の夜にさらでも風のまたるゝを竹のは越に月も出にけり

松風五月寒

夏の夜は影と見るだに涼しきを秋かもはゆるつきの色かな

五月菊

はとゝぎすかくや五月と聞つるに松風さむき山のおくかな

萱草花

五月やみ木の間も見えぬ庭の面にうつろふ星やゑち菊の花

閑庭螢

折とれば衣手すゝしわすれ草かがえをぬるゝ花のゑごくに

暗夜螢

折てよといふ人もなしとおりだにうとき籬のどてなつの花

雨中螢

あやしくも山はかぜのゝ暗きより暗き道へと行くほたる哉

水邊螢

さ月やみあやめもとかずふる雨に影めづらしく飛ぶ螢かな

旅宿螢火

篝火のあらましかばの遣水にこゝろありてもとぶほたる哉

氷雞

五月闇まくらゆふ野ふとぶほたる燈火えたる心地こそすれ

たが門をさしも氷雞のたゝくらむそこはかとなく茂る木陰に

連夜水雞　ふろかにも閨の戸叩く水雞哉たゞ一夜こそはかられもせし
鵜　河　世を渡る爲ぞと思へば鵜かひ人月をいとふも哀れなりけり
閑居　棟　花めかぬ花にもある哉わび人のうゝべきはなゝ棟なりけり
夏夜待風　閨の戸に風の音せぬなつ夜ゝ戀しき人のこぬこゝちして
樹陰風來　そよ〳〵と吹來る風に夏ごろもきならの陰ゝ立うかりけり
樹陰納涼　木の間よりもりくる風の嬉しきを今日も袂につゝをぬる哉
井邊納涼　くまずともせが井の水ゝ涼しきを扨もて來し我やあになり
松風如秋　いかにして身にしむ風の吹き來らむ秋だに秋を志らぬ松より
夕立雲　夕立ゝいま降來らしかみなりて雲たゞならぬ空のけしきや
湊夕立　風さわぎ浦波あるゝゆふ立にみなとゝ舟のとゝろせきまで
蓮　蓮葉ゝはとけの花ときゝつるに池のこゝろを色になすらむ
池蓮　いゞ水ゝ清くすゞしき蓮かな人ゝこひぢにこゝろけがすを
夏月照蓮　月やどる曉つゆやゝもるらむ蓮ゝたち葉もかたぶきにけり
隣泉　眞清水ゝいはもる宿を隣にてとしも夏ゝうとく住をぬる
東本願寺十三境の中枕漱居を

ましみづの岩もる聲をまくらにてよな〳〵結ぶ轉寐のゆめ
扇に手習し侍るといへる心を
みな月ゝ扇の風もぬるめるをあど水ぐきのとゝあはるらむ
來客夏稀　まし水をせき入まてすめる宿にだに暮ねば人ゝ音信もなし
夏日長　夕日影みねにかつるを待ち〳〵て今ぞ聞つるひぐらしの聲
六月つごもりゞた鶯の鳴くうるさき心地して
久志くもうき世に鳴くかちれば　こそいとゝ櫻とたゞか云けむ
名所晩夏　ふじの雪さらに積りて幾夜へぬ秋をもよはすむさしのゝ露
夏夕　春秋もたちかよはじとかぼゆるゝ風のそよふく夏のゆふ暮
夏旅　風すさぶ松の木のゝにかさぬぎて袖ゝ汗はす野路のたび人
五色を四季によめる夏の歌の中ゝ黄を
夕露ももらぬばかりに茂りあひて夏野の小はぎ下葉色つく

秋歌

社頭立秋　夏過てあきてそけふゝたつ田姫紅葉をいそげ露もおくらむ

幽栖秋來　あるしだにうゑたき物を葎生ひて荒たる宿に秋ぞ來ぬらむ
山初秋　秋立てけふ三日月のかたぶくにまづ山ぢはを恨そめつる
初秋月　やなぎちる川瀬をみれば夕月夜ほのかに秋のいろぞ浮べる
初秋水　皆人のむすびし岩ねあきの來てわすれ水とぞ終ふなりぬる
初秋扇　人ごころ風も吹あへぬかはる世を恨やすらむ秋にあふぎ
雨中草花　七草の花やうつると手を折てあめの日數をかきかぞへつゝ
女郎花靡風　女郎花こゝろもぬらじあき風に何ぞゝあふら身を任すらむ
雨中女郎花　雨そゝぐ野中にたてる女郎花いざかさかさむ我ゝぬるとも
月前薄　夕露につき影なびく花すゝきうゑてだにとゝ誰かいひけむ
栽萩　それながら移してましを萩の花露ゝ野べにぞふきてきにける
雨後萩　むら雨のなごりの庭ぢ小萩原つゆをかなしぶ人に見せばや
萩映水　水清き野ざはを見れば行く人の袖ばかりやゝ萩がはなずり
秋のはぎ見にまかりて
秋の野の花分くれしそでの露かへる折にぞおどろかれぬる
初雁　初雁の遠ざかりゆく聲きけばわかれし春のおゝちこそすれ

蘆邊雁　難波江の月の夜頃ゝあしからじよのらむとてや雁も來つ覽
旅宿雁　思へども旅ねの袖ゝたいひとへ衣かりがねよそになかなむ
鶉　ますらをが片山畑にわはまきてみどなる頃かうづら鳴なる
百舌鳥　秋かぜや寒く吹らし山もとのこゑゐいろづきもゑの鳴なり
鹿　山里にねざめわぶてふ鹿ぢ聲みやこにすめば聞まほしくて
山鹿　もみぢ散る山の奥にもさを鹿ぢ妻とふ戀のみちゝありけり
田家鹿　小夜更て鹿のなくこそ哀なれ小田守る賤もゆるしてをきけ
露　なか〳〵に曇らぬよひぞ山も野も露ゝ草木に降まさりける
山路霧　松の火をおぞも麓にすてつらむ山路ゝきりぢまだ夜深きに
關路霧　逢坂や山路くるともなほ越むきりこそ人をせきゝといむれ
秋風　花こそあれ春ゝ涙ゝちらざりき秋ゝいかなる風の吹くらむ
海邊秋風　西の海や入日さびしき色見えて檜おはらにあきかぜぞふく
名所秋風　いづれより立か初けむかぼつかな妹背の山にわき風のふく
野分　隣なきをみかとけさぞ成にける中ぐきたえしよるの野分に
秋夕雨　見るまゝに外山の夕日かぼろひて霧よりそゝぐ秋のむら雨

月

秋の夜の月い折からところから心からにぞいろかはりける
おほかたの秋にしあれば海のつら山がくれにも月や澄らむ
思ひつゝ年ふるものをよひ〳〵にうはの空にもめぐる月哉
あがめやる人の心をいざあひて夜半にや月の山路てゆらむ

月出山　求めても入らまし山をあくがれて憂世に出る夜半の月かな

十五夜月　曇るだにけふの今夜い名お立つをさもいひ去らぬ月の色哉

秋山月　ましらなく嶺の秋風さ夜更てむなしき山につきぞかゝぶく

高低月　雁がねの聞ゆる空の月かげをひとり寐覺のたもとにぞ見る

雨夜思月　むさしてそ今宵雨ふれ月夜よし夜よしとあかす國も有なむ

霧中月　湖霧のまがきふにはふ影見ればおぼろ月夜いあきの物なる

廿日月　今ぞ去るはつかの月を暮るゝよりまつい心のおそきこけり

弦月　ものゝふの伐てふ槻の葉がくれに弓張月のいるを見るかな

花落月　つく〳〵と更行く空の月見れば都のあきもものぞかなしき

叢祠月　月さびし草にあれたる神社むしのすゝふるこゑばかりして

田上月　鳴のさつ苅田のかもものわすれ水あるかなきかに月ぞ宿れる

水路月　みなと川鹿は鳴音に夢さめて夜舟こぎ出れば月のさやけさ

名所月　ふけぬるか博多の沖に月落てもろこし舟のよるも見えけり

やもじをおきて山家は月を

やくしはのからき世去らぬ山里に海より出る月を見るかな

船中待月　大船にいかりおろして月まてばとよはた雲に秋かぜぞふく

山曉月初上　隔てずい夜半に見ましを山は端い出る月にも恨めしきかな

入後嘉月　心なくつゆはらいそば袖おだに殘りてましを山の端のつき

月前興　賤は女も月おうかれて明もめりうむやうみそは長々し夜を

月前念佛　西へ行く月にい有ともあくがれてそゝ息らば罪もてそうれ

寄月神祇　波間よりあらはれ出る月影にむかしや去のぶすみよしの神

興淵翁五十年の靈祭とて遠江の人よませける お故郷の月を

やどしけん昔はそでをふる里の露とつきとに恐ぶあきかな

擣衣處々　去コのめやひとへの衣夜を寒み思ひあいせて打はじむらむ

南北擣衣　秋風にめさめてきけば小夜衣夏とふゆとのかたにうつなり

月前虫　月もよし虫の音もよし今夜こそ見つゝ聞つゝ野邊に明さめ

枕下蟲　秋寒き夜半にまくらとふたりねて獨ゐもきくきりぐゝす哉

紅葉　木の下に立つ人あやしもみぢ葉ゝ遠く見るこそ千入なりけれ

尋紅葉　尋ね來しみねの紅葉ゝ空しくてあたら夕日に松を見るかな

初見紅葉　山高み何のこぎゐかわかねども先めづらしき初もみぢかな

雨後紅葉　紅葉見に立出し道のむら時雨あをかるべくもあらで晴ぬる

霧籠紅葉　山姫のふりに織たるからにしきあやなく霧のたちにさつ哉

岸紅葉　行く水に紅葉かつぐ散を見むけふ山川のきしもせざらば

名所紅葉　位山ゐぐるゝたびにみどりよりあけに移ろふ木々の色かな

紅葉如錦　伊吹山もゆばかりなる梢かなゐぐれゝさしも染じと思ふに

紅葉如醉　もみぢ葉の蔭にゐたゝむ身におゝぬ錦着たりと人もおそ見れ

櫻のもみぢしたるを見て　さかづきに似さる野山の時雨哉めぐれば木々の色に出ぬる

松代下紅葉したるを　山ざくら紅葉ゐにけり青葉だにはなを戀つゝ見つゝ過しを

かはかたの梢そめなでゐらましや松さへあゝぜ秋の色かる

閑庭菊　折る人もつむ人もなき菊の花つひに霜にぞやつさをわける

菊盛久　世中にあらじと思ひしを白菊の花こそはなのときゝ也けれ

九月初冬　月草のはなぎり衣あきもへずことしも冬にうつろひにけり

暮秋殘月　世中ゝかくこそ有けれ長月のありあけの月ゝ見る人もなし

暮秋霜　きりぐゝす聲かれ果しその夜より霜になりぬる淺茅生の露

鐘聲送秋　けふの日のくるゝと聞だに悲しきを秋さへつくる鐘ゐ音かな

秋植物　風の音を軒端のをぎにうゝはれて秋たつ日より松ぞ靜けき

山館秋　山里のこがらし寒きゆふぐれに入日にはへる柿のもみぢ葉

秋色　夕暮のいろこそ秋の色なるを草木とのみもおもひけるかな

兒玉の驛森田豊香が家にて刀禰川の秋を　さゝ分る袖かと見れゝ刀禰川のつゝみの尾花秋のぜぞふく

ある法師の八月ばかり都にのぼると聞て　東路のつきのさかりゝ見てをゆけさおそゝ西を心なりとも

冬歌

閑居初冬　神無月はれみ晴ぞくるゝ日をながゝし日と暮す宿かな
山家木枯　葎はふかき根の夕日やゝきにて木枯さむきやまのかげかな
風前時雨　夕日影さすやれきばに音するゝ風れふらする時雨なりけり
夜時雨　紅葉ちる後ゝ何せんといふ〳〵もきく〳〵明も小夜時雨哉
山家時雨　きゝせばや物の哀を去る人にみ山のいやのさ夜の去ぐれを
道行く人時雨にあへる
立よらむ蔭ゝいづらゝわやにくに里はるかにも降る時雨哉

落葉　たゝ一木ともしと思ひしもミぢ葉もちれゝば庭に所せき迄
夕落葉　嵐ふくたかねれ紅葉いろくれて音ばかりこそ今ゝちりくれ
風前落葉　山風のたつたびにしもちらせれば紅葉ゝ幣と見ゆる也けり
蔦の葉のちれば木の葉を吹かけて松ゝ二たび色づきにけり
瀧落葉　落さぎつ水かみかけて吹く風に白きすぢなく散る紅葉かな
落葉混雨　時雨よときくゝ嵐の絶間にてふけば木葉のさゝざものそら
葉落月明　はら〳〵と軒れ葉柏打ちりてにはかに晴るゝまどの月かけ
殘菊　この頃のさの葉吹まくおがらしも去らず顔なる白菊のはな

長月のかぎり咲くだに久しきをあまりて匂ふ去らぎくの花
風さやぐ小ささが上にかく霜れ白きを見れば冬ぞ來にける
日影さす庭の朝霜みるゞうちにまた淺茅生れ露となりぬる

霜

竹霜　窓近きいさゝむら竹いさゝめにむもびてとけぬけさの初霜
霜夜聞鐘　いねがてに霜さゆる夜ゝ曉の鐘をまつこそたれしかりけれ
寒松　けさ見ればはつ霜白し岩根松さもばよ夜もねがたかりけむ
路寒艸　立とまり見る人もなし冬枯ゝ萩よもゝきよと思ふばかりに
閑居霰　あられふる夜半に目覺て思ひ去りぬ我住む宿の常の靜けさ
朝雪　朝いせば雪を見ましし松の葉にふれるばかりの夜半のはつ雪
夜雪　あけぬまに雨にやなるらむいかならむ心もとなき夜半の雪哉
槍原雪　穴師川かは風さむしまきもくの槍原れみ雪いくへつもりぬ
社頭雪　僞をたゝすれ杜にふるゆきのあやしやいかで花と見ゆらむ
海邊雪　あたらしやいかゝすべき潮みたば入なむ磯れ草にふる雪
名所雪　あさ妻の片山きしにふれる雪子等が見んまできえぞ有せば
雪後山水　雪はるゝ山と水との朝ぼらけ世ゝはるあきと何かもひけむ

雪中旅　行末ゝけふも山路と聞つるにやむべくもあらぬ雪の氣色や

雪中山居　火燒鳥おく聲けさいたえにけり爪木ともしく雪のふれゝば

細雪下籬隙　玉籬たれゝあくとも見くて見む雪もひまもる物にぞ有ける

烏雀群飛欲雪天

むら鳥のおくれさきだち落くるゝみ山ゝけさや雪に成けむ

竹ゐ雪のかゝれる

かきくらし雪ゝつもりにつもれゝど竹の姿ゝ竹にざりける

雪のふる日いかゝと人はいひければ

松にだにけふゝ音なふ風もなし鳥の一こゑなきしばかりに

雪のうちに思をのぶ

思ふ事なくてぞ見ましけさの雪頭にさへゝつもらざりせば

千鳥　波の花さきてみだるゝ浦風にれのれもちりてあく千鳥かな

島千鳥　むら千鳥いづち行けむ淡路島あはと見るまに雲がくれぬる

浦傳千鳥　大淀のうらみてもぐと思ひしを又たちかへりなく千鳥かな

月前千鳥　うら人の寐なまし物を小夜千鳥かたぶく迄の月になくらむ

寄千鳥祝　松島やまつのけしきの久しきに千鳥も千代といひて過なり

河上氷　山川も野川もけさゝい氷れゝばをな音なしになりぞ玄にける

谷底氷　こはりけむま近くなればたえ〳〵ゐ音ゝ聞えしさにの下水

名所氷　山陰ゝかぜとく寒しなつみ川かはよどけさや氷りそむらむ

水鳥　多味むらゝ一むらおつと思ひしを廣さはの池とろせきまで

水鳥の多く浮びたるを見て

世中に玄つめば思ふ友もおし水の上にてそもまゝはしけれ

名所網代　よしの川ゆくせの網代春ならばひをへて花もよらまし物を

寒夜月　淺茅生に玄も置まよふ冬の夜ゝ月ばかりてそ庭にいでけれ

雲間冬月　たえ〳〵に薄雲かゝる月見れば冬は氣色もはどゝかりけり

山寒月　玄がらきやあられ降にし雲晴て外山の月ぞさえまさりける

山家冬月　嵐ふくやまさくら戸の冬の月稀にあけてぞ見るべかりける

椎柴　山賤よ身をなゝをりそ椎柴の玄ばしばかりの世を渡るとて

椎柴風　山風もをり〳〵谷にはこぶなり片枝かれたる嶺の玄ひ玄ば

衾　ひとりたゝ夜をさむしろにぬる時ゝ古き衾もなつかしき哉

月前神樂　舞人のとるや手草のさゝの葉ゐゑもこそむすべ月や出らむ
狩場風　狩人のおもゝぬ方におちゝ來なり空とる鷹のかぜながれゑて
炭竈烟　山がつゞ炭燒くわざゝ朝夕のけぶりの爲にけぶりたつらむ
雪中炭竈　小野山のやま人けふも降る雪にまきの炭竈やくとやくかな
佛名　月をまつ廿日のよひの雲の上に三世の佛の御名ぞさやけき
埋火　埋火ゝあだごころなき妻なれや夜かれゞたくも思はゆる哉
閑中爐火　あな寒しあな夜長しと埋火にとはゞゞさりをゑつゝ明せる
冬籠りしたる家

梅告春近　待遠にはるを思ゝむ人ゐしもまづ見せまほし梅のはつはな
田家早梅　冬ゑらぬ田中の庵の日あたりに見る人なしの梅をみるかな
老待春　春をまつ心ゝおなじむかしにて年のさむきに老をゑるかな
歳暮　いとゝとくも暮るゝ年哉おん年ゝ月日のおそき門にいらばや
河嶺暮　もがみ川早くも過るつき日かな此月ばかりてとしと思ふに
市歳暮　皇のみやゐはるけき市にだに里びとゝとよむとしのくれとて

閑中歳暮　をり〳〵ゝ音づれたりし世中の人もかれぬるとしの暮かな
年比暮水よりも早し　やよゑばしゆく年とまれ瀧つせの中にも淀ゝ有とこそきけ
歳暮爐火　埋火にふゆをゐすれて幾夜へぬまことの春ゑ近づきにける
歳暮鳥　ゆく年の雪とつもらばやまがらすなれも頭や白くなりなむ
歳暮松　今いく日ことしなければ野邊の松てゝろに引て春を待ばや
花紅葉ちらしゝ風を山の端のまつにのこしてくるゝ年かな
歳暮夢　皆人のまつらむ春をとゐりにてかべにぞ見つるにはの初花
冬興　撫子のひと花えたり是をこそ枯野見に來しかざしにゝせめ
冬動物　あさ氷厚きこゝろのなかりせば親ゑこひけむ魚をえましや
冬田家　雪ふれば山田のそゐづ獨おきてゑづゝおの〳〵ふゆ籠せり
猿樂人福王盛翁がもとにて冬聲を
雪ふればをのへの松もゑづまるを高砂うたふ人もゐりけり
初瀬山冬　きのふこそ秋ゝはつせの山風はげしくならむ冬ぞ來にける
有乳山冬　嶺の雲ゑぐれそめけり有乳山やまびと今や雪舟つくるらむ

人々冬の季むすびて五色の歌よみけるとき青を
草も木も霜枯わたるやまばたに麥の二葉ゝはるめきにけり

戀歌

戀　ちはやふる戀ゝ神代の道なるをゆくと行く人ふみ迷ふらむ
思　ゑばしこそうき名も思へ果々ゝ命さへだにをしまざりけり
片　幾たびも同じ人こそひしけれ思ひもて〻ゝかもひ出つゝ
思　知るやいかに我衣手のくれなゐゝ思ひの色の餘りなりけり
見　あふばかりつれなかりとも思ひゑれ思ふ心のみつが一つゝ
戀　玉出島よく見てましをゑら波のいづれの方にたち隱れけむ
開　北山の風のたよりにゑらせばやわかし此なみによする心を
戀　わたつ海のゑはのひるまも袖ぬれて心のそこにみつ思かな
畫　歎かじな有明の月の月かげにわはでかへれる時もありしを
別　思ひきや思ひかゝしゝ中絶えてさえぬ命をなげくべしとゝ
戀　忘れ草つまゞかたみにつまゝしを我住のにはにおくれつる哉
絶
忘

老　戀　つれなしと人ゝ恨みじひと毎に老をいとふゝそれぞ世の常
幼　戀　山かげにはの見てしより紫のゆかりもがなと思ひそめてき
顯　戀　我戀をたとへていはゝ宇治川の霧の絶間の瀨々のあじろ木
互　思　戀　末の露もと此ゑづくを歎くかな思ふこゝろゝ同じものから
名　立　戀　身をつみてさらじと云はん人もがな戀もとよそに立る我名を
面　影　戀　相思ふおゝろとならゞをり〳〵ゝ物いひのはせ君がおも影
戀　隣　女　隔つらむ心うらめし思ふ事かきくづしてもいはまほしきを
閑　居　戀　今夜もや葎の宿にひとりねむ袖のなみだをひゑきも此にて
故　郷　戀　頼み來し人のこゝろの花園もむかしにかゝる志賀の故さと
海　邊　戀　うけひかぬ人に見せばや渡つ海の沖に釣する蜑のゝしきを
關　路　戀　ゑら川の關こゆるまでつてもなし都のひとに秋かぜや吹く
名　所　戀　逢ふことをかたのゝ原の天此川とゝに一たび渡る瀨もなし

人々名所三つづつむすびて戀の歌よまむとて詠ける時

陸奥のいはで忍ぶゝ我ぞゑるいづこあひづの山にかゝる覽
羇　中　戀　一夜ねし人ゝ何ぞゝとまるらむ故郷にのみゆきしてゝろの

旅宿戀　野山ゆく程こそゑばし忘るれどまくらとれゝば妹ぞ戀しき
暮春戀　物思ふと露けきあきれ心にてあたら春をもくらしつるかな
首夏戀　あふひてふ草の名をこそかけて思へ人を卯木の花ゝ何せむ
秋　戀　ひとりねの袖と胸とに人ゑれぞ露ときりとを歎くあきかな
初冬戀　冬たちぬ人の心のあき風や身をおがらしと吹きかゝるらむ
待久戀　菅菰の七ふのちりをはらふまに空しき年のつもりぬるかな
毎夕待戀　まちつけしためし有げに此暮ゝ此くれゝとて幾日へぬらむ
雨中待戀　君來ぜゞ月ざに見んと思ひしをそゑもたがへる夜半の雨哉
見衣戀　なつかしき人のぬぎおく唐衣やがてこゝろに懸て見るかな
見手跡戀　難波江のあしてなりせゞ一筆にかくばかりやゝ思ひ亂れむ
途中契戀　かならずと今一言もいはましをあなあやにくの人の往來や
明日逢戀　かへなむと思ふ契のさがはぜゞけふぞ命のかぎりなりける
辭後逢戀　もがみ川わたる逢瀬のある物をなど稲舟のよそに見えけむ
絶後逢戀　をしからぬ命ながらへて人心嬉しくかゝる世にも逢ふかな
等戀兩人　ふたつなき物と思ひしを怪しくもこなたかなたへひく心哉

思三人戀　身をもとゝむ由もなき哉よひ〳〵に二夜よかれし恨をぞおふ
契後世戀　後の世に生れ逢んゝおぼつかな身をかへてもと契る物から
互有障戀　我戀ゝ月にかゝれる雲なれや浮身ひとつのさはりならねゞ
來不留戀　思草ねも見ずたゝに歸るかなかりに來るとゝ契らざりしを
披書恨戀　玉章のおもてなげなる言の葉に心にもあらず恨みつるかな
見形厭戀　み山木と思ふらむこそ恨みなれ思ふこゝろの花ゝにはふを
臨期變戀　あすか川きのふゝ淵と頼めしを瀬に變りぬるけふの暮かな
不憚人目戀　戀すやとよしや人目に見えゞ見え顯はれむとて思ひ絶めや
初疎後思戀　さ夜衣中にありしをさらに又なるゝにつけて恨みつるかな
乍臥無實戀　あひおもひて今夜よどゝにねたれどもあやめらるべき移香もなし
隔我間他戀　うきながら生田の川にさらゞとて思ひ云ゴまむ心おりせゞ
過門不入戀　絶ぬれゞ門すぎゆくと聞をだに嬉しと思ふが悲しかりける
依戀祈身　逢ふまでと祈るいのちの長からゞ神もつらしと思ひ絶なむ
戀後世妨　思ふ人おもふあまりに戀死なゞわたらるまじき渡り河ゝあ
寄山戀　およばぬを思ふも戀のさゞの山心さゝくゝなどいとふらむ

寄岳戀　言に出ていはねばおそあれ磐代の岡の萱ねの亂れてぞ思ふ
寄瀬戀　鈴鹿川たえぬ八十瀬も何かせむ君に逢瀬の有ばこそあらめ
寄關戀　逢坂を越なんとこそおもひしかなこその關に年を經にけり
寄橋戀　絶やせむ今こそ谷の丸木ばし人目あやふくふみもかよへど
寄草戀　ゑさもえの程こそあらめ思艸今ゝあるともねさへたえめや
寄桐戀　桐の葉を誰かいひけん涙こそ人のあきゝゝあへずちりけれ
寄柏戀　なみだこそふるからをの〻本柏もとの契ゝかれはてにけり
寄鳥戀　山がらに思ふ人をばなしてしが强てくるゑを厭ゝざるべく
寄鶴戀　ふよびあき人ゝ雲井の田鶴あれや聲を聞くゞに遙けかりける
寄都鳥戀　妹と我とすみだ河原の都鳥ことゝふしもあらでおがめつ
寄蛛戀　朝日さす軒にかゝれる蛛のいの折々見えてたえんとやする
寄弓戀　ゑなゝくもつれなき人の心かなまゆみ槻弓いかにゑてまし
寄鏡戀　影をゞに見まくはしさゝまゆみ鏡恨みむ時もうらみざりけり
寄琴戀　琴の音ゝきゝゝゑるばかりあらずとも相思ふらむ心見えせば
寄繪戀　一言もかはさぬこそゝ怪しけれ筆のすさびの人にも有らぬを

寄棹戀　海人小舟ゑはみつ沖にさす棹のこゝろとづかぬ戀もする哉
寄戸戀　音づるゝかひもなき哉一度ゝその戸ひらけといふを聞ばや
寄催馬樂戀　澤田川かゝと見てのみ過るかな袖つくばかり淺きちぎりに
寄水戀　武藏野に有てふ君ゝ水あれや結ばむとすれば遠ざかりつゝ
寄掛樋戀　山里はかけひの竹は年を經てわれから終ふ名をもらしつる
寄鶯戀　くれゆけば聲ぞきおえぬ鶯ゝよるゝ物をやおもはざるらむ
寄梨戀　我妹子がおもかげ悲し春の雨に袖をるゝ梨のはなの一えだ
寄春雨戀　心なく夜半にふるらむ春雨も人ゑづまればおとづれわけり
寄夏草戀　なびくらむ靡かざるらむえぞ知らぬ夏野の薄をにし出ねば
寄郭公戀　時鳥きゝがあたりゝよきてあけ待つゝ苦しと思ひ知るべく
寄螢戀　いかにせむ澤の螢も夜半にのみ思ひ有てぞ身ゝこがすめる
寄露戀　れきゐるゝ同じ物から夜もすがら草葉の露ゝ物もおもはじ
寄虫戀　人ごころ淺ぢが露を袖に見てよな〳〵虫の音にもおくかな
虫聲增戀　夕まぐれふり出る虫の聲きけばすゞろに人ぞ戀しかりける
寄月逢戀　來ぬ宵に比ぶれば宵こそ嬉しけれあな妬ましの月見がてらや

寄紅葉戀　山づとは紅葉は露のたまづさに思ふこゝろの色ゝ見えきや

寄菊戀　戀しなむ命ものぶときくならば物思ふ宿にうゑて見ましを

寄時雨戀　祈るべき神無月てそかなしけれ時雨に似たる人のこゝろを

寄木枯戀　紅はひとのたもとも拂ゝなむ紅葉をちらすみねの木がらし

寄冬月戀　戀せずばかゝらましやゝ更るまで霜夜の月を眺めつるゝな

寄椎柴戀　あはずとも嶺の椎柴をり〳〵にこやてとおもふ一鉾も見ば

寄炭竈戀　折々ゝ來むといひしを小野山のもゑやかれしも昔なりけり

夜ゝをぐらふ　ねたましや夜ゝすがらに逢ふ人もあらまし物を歎き明して

夢てふものゝ　ぬるが内に夢てふ物ゝなくもがな逢ぜば逢はで思ひ絶なむ

さゝくふわゝを

音づるゝ槇は板戸ゝ空しくていそがぬそらゝ明そめにけり

門さしてわけざる處ゝといへる心を

あひ見きと名をや立なむ飽ずして歸り來たりと人に語らば

人づま　から衣人の妻ぞと去るゝ〳〵もなれぬこゝろの恨めしきかな

としへていふ　思ふかひなくてをぐれば年々に初戀すなるおゝちおそすれ

あひふもふ　後の世のかぽつかなさの一ふしぞ相思ふ中の歎きなりける

かもひやす　思川いま幾瀬へば逢瀬あらむやせ渡れぞもむあしかりけり

なきおそを人のいひし頃といへるこゝろを

更にまたなき名やたゝむ人言を思ひわびつゝたもと濡さば

もしも人有やとはゝをふの浦に片枝さす木をさして答へむ

あだありける女ゝ花折てやるといへる心を

花の色の此あだあるやいかに見る君ゝてそ先問まほしけれ

つれなかりける人に逢ふよし此夢を見て遣しけるといへる心を

あともなき夢語となうたがひそ枕も去りてゝあるべかりける

心かはりける人に青き楓の枝につけて遣しけるといへる心を

あきふゝへずやがても色此移ろふゝ君が心や西へさすらむ

恨ゝて物いはじと人のいひければといへる心を

わりゝしやゝおおとゝのふる蠶を見ようらゝながらに聲ゝたつめる

まだ若かりける女に遣しけるといへる心を

行末ゝかゝらぬ靡け今こそゝ世を去らすげのまのゝかや原

ある處い知りながらえあふまじかりける人にといへる心を

中々にをむらむ方の去られをば心づかひもやらで經ましを

同じ處にて見かいしながらえ逢ざりける女ゐといへる心を

旅寐すと海人が磯家もからなくにめくはせてのみ過ぬなる哉

別をたる人の思ひ出ておとづれたるにといへる心を

誰が爲に今い植うらむヒをれ草身をつみてこそ哀なりけれ

まかで來ることかたき人にといへる心を

ふりたちてめかり鹽やく君ならば暇なしやと思ひなしなむ

女のもとにてゐづま琴出したりければといへる心を

逢ふ事もさらぬ浮身い手馴さじ吾妻てふ名い嬉しけれども

或男の松をむすびてつかいしさりければといへる心を

千代迄と結ぶ契ぞ頼もしきまつといふ名いゆゝしけれども

法師の色好むをにくしとてといへる心を

むらさきの雲こそあらめタべ〳〵妹が迎へをまたむ物かい

墨染の麻のおろもをきん人にゆるしの色いあらじものをや

雜歌

家　家ゐこそやさしかりけれ住む人の心の奥のやがて見ゆれば

披書憶昔　石上ふるの高はしふるき世をふみ見る度にこひわたりつゝ

遊興未央　明ぬともあかじ圓居に嬉しくもまざよひの間の鐘を聞く哉

連日雨　世中に久しくふれば厭はるゝならひ有りとも去らぬ雨かな

古寺雨　かきくらしふるか御法の雨ならばぬらしてましを墨染の袖

里烟　君が代い烟のたゝぬ里もなしいづれかむろの八嶋なるらむ

海邊烟　もしはやく烟とのみも見つるかな辛き世渡る海人の仕業を

池上鶴　池水のかゞみに向ふあしさづいかねて千歳の影や見るらむ

深山瀧　霧まよふ山のいづてか落ち來らむ物かそろしき瀧の音かな

名所河　君が代い伊勢に有りてふ涙河たえず嬉しきせにおゞるらむ

名所山　旅行くをけふしも越るかれひ山手にし取らればつとにせましを

不二　日本に生るゝ人のさきはひいまづ不二の嶺を仰ぐなりけり

淀野　旅寐せば枕や露のむすびおむよどれといふい只名のみして

行路橋　小山田の路のたな橋とめくれゞあらぬ方にぞけふハ懸れる

海路　波あらきなだこす程ハ舟人のこゝろひとつを頼むかげにて

海路夕　舟人よ間なく楫とれかのをゆるいそ山まつに入日かくれぬ

旅泊　かぢまくらうき寐の床にね覺てハあすの浪路を心にぞとふ

旅　故郷をかたみにとふぞ旅の友ものいひかハす初めなりける

夕旅　おえきつる嶺の夕日をかへりをて更に行方をいそぐたゞ哉

夜旅　急ぎたつ旅とや人のかもふらむ里とひかねて山路たどるを

羈中燈　草まくら旅ハやどりハとも火ハ影ばかりこそ都なりけれ

羈中山　見つゝ來し山ハいつしゝ隱ろへてあらぬ高嶺ぞ顯れ分ける

ゆく末の雲間に見えしふじの雪思ハぬ方にいつかなりぬる

旅宿鷄　悔しくも野邊にねしかな明ゆけゞ里遠からぬ鳥の音ぞする

羈旅祝言　旅人も笥にもる飯を常にしてやすくいをぬる君がみ代かな

海上眺望　誰かすむ沖つ波間ハはなれじま人こそ見えね家ハ見えけり

山路日暮　心して山路ハ行む日暮るれゞ木の根岩のどあやふかりけり

山家　山里ハ隣おきにて思ひ去りぬ世ハ捨て難き物にぞありける

山家人稀　はのゞと夜ハ明ぬらし奥山のひ原の木の間見え初にける

山家烟　山里のけぶりを見れゞ山ざとにましばたく身も哀ありけり

山家窓　めづらしと見るべき山ハあらねども窓を心のゆく方にして

山家隣　山深み言かハすべき人もなしとなりといふも谷をへだてゝ

山家松　山ふかみあはれ寂しきすまひ哉あらしも庭の松をこそとへ

山家橋　み山路の世のかた橋もおのづから渡る人あまゝ人渡しけむ

故郷木　あれにけり四とせ五とせ古里ハのこる松さへ面がハりして

夢　もろこしのよしのゝ花もをてましを思ひの儘に夢路通はゞ

釋教　かなしくゞ思ひの家を出てこそつひの烟とならゞなりなめ

えてしがな枯たる木にもさく花の種ハ佛の蒔くとこそきけ

諸行無常のこゝろを

うつせみの世ハ時の間の眠りにて見る物も夢きくことも夢

幽思　あすをらぬ老にける身ハ世中の定めなきこそ頼みありけれ

述懷　世中をやもくいふとも人にのみ身を從へてすぎぬべしやい
我身こそかくても果め心さへ數ならでやい世をつくもべき
百年もまたじ我世を思ふことわりげにすぐす人やなになり

老後述懷　かいぬれば老ぬる人ぞなつゝしき老の心いかいのきれゝば

寄木述懷　世中にまどふふしゝ多かるいかのが心やわさきなるらむ

寄橋述懷　安くだに世をし渡らば橋ばしら人の下わいさちてくつとも

寄書述懷　有磯海の濱のまさごいふみ見てもよむ事きらで終に老ぬる

大江戸の人々あらぬさまなる歌好みよめる頃寄草述懷を

思ふかた有りてこそつめむさし野の風に靡かぬ言の葉草を

春述懷　はる日さす岡邊の松の雪なれやのこり少なき老のいのちい

世中い古井の蛙ところせく身を置きてこそもむべかりけれ

夏述懷　あゝ清水たれむすびてか濁るらむ是も人にいかくれぬる哉

秋述懷　山かげの道の落栗人きれずつひにくちなむ身こそをしけれ

世をあきと思ふばかりぞきの薄ほに出べくもあらぬ我身い

冬述懷　千鳥こそうらやましけれ相思ふ友いありてもひとり二人を

祈雨　來ん年い來ん年いとて年々にむなしく年をくらしつるかな

感赦　かきくゞし雨下さなむ水かるゝ丹生の河瀬の眞木流すまで

將軍　かしこくもつみすてつべき醜草ゐ惠の露のかゝりぬるかな

梓弓はるかにまねくはた手にも心なびかぬひといあらじな

伯夷叔齊　かく山のみねのさ蕨をりきりて世をいとひけん心たかしや

王昭君　悔しくぞかゝみの影を頼みつる人のこゝろの曇りある世を

上陽人　七十も十とせになりぬ昔よりまれにもきかぬ歎きせしまに

老人　老ぬるゞ嬉しからまし人い唯古きをよしといふ世なりせば

隱士　きでの山越えしに似たる我身かな世の人數に今いもるれば

尼　あたらしやたけにあまりし黑髮のなごりばかりの袖の色哉

遊女　みれならむ果ぞかなしき今こそそい花は數とて人もねに來も

泊遊女　舟ながら幾夜明しつみなと江にかぜまつ人をまつ人にして

市商客　よもの國靜かなる世を市人のさわぐにつけて思ひ知るかな

夕樵夫　山人のゆふ日を負てかり來ればかげい麓にきぼはこぶなり

木　あらましに世をもふる哉朝なゝあすいひの木を身の類にて

火　雨くらき片山ゝげのあら野にゝ狐のみこそ火ゝともしけれ

土　たが昔幾夜ねぬまに塵ひぢのつもりてとこの山ゝ成りけむ

金　柚山や木ぬ下闇にいとゝ茂く斧のひかりぞさえまさりける

水　山の井ゝ淺しと人にくまるれば心ゴの心ややさしかるらむ

一より十までの數よめる時二より六までよみける歌

人ごころうらなしとても頼まれず兒手柏の世にこそ有けれ

夕ま暮雫にゆく三の山がらすなくや一つゝやもめあるらむ

たのしみをこゝろ〳〵に四の民きゝめて住る君がみ代かな

植にけむ五本やなぎいつの世ぞ今ゝあるじの名のみ朽せぬ

思ふどちひくやあづまの琴の緒の腔まじくこそ遊び暮さめ

こがね　あらざらむ世にゝかひなしと知りながら金を惜む人や何なり

ひとり　世中わはひかくるべき思ひありて哀ひとりや年をへぬらむ

ふね　わさの原はるかに浮ぶ釣舟ゝいまもやなぎの一葉なりけり

鐍　風あるゝ沖邊の舟のいかり綱たえぬぞ人のいのちなりける

柵　月も日も流るゝ早しひさかたの天の河瀬ゝ玄がらみやなき

國　家に家つゝくむさしを古しへの野原と見けん人にみせばや

鳥　くれゆけば遂に寐ぬめる籠の内の鳥ゝ野山や夢に見るらむ

鶯　露玄げきすそのゝ小笹みだるなり峰とびこゆる鶯の羽風に

兎　小ささ原玄げり繁らぬ方見えてかくれあらはれはしる兎か

熊　ひと心ひとしからねばあら熊の住むらむ谷も家ゝありけり

虎　風かよふ道より外のみちゝわらじ虎臥ま野べの茅原玄の原

さゝがに　故里ゝいづくもかのが住家とてすがきやまらむ木にも竹にも

蝸牛　風そよぐ竹のは山のかたつぶり世ゝ騒がしと身を隠すらむ

むさしのにて不二の高嶺の見えければ

不二ぬ嶺ゝ手にとるばかり見ゆるをもゝどもゝと武藏野の原

伯翁といへる朝鮮の書記に故よしありて歌一つやりしのち彼國よりおこせたる詩に夜來三尺雪とある句をとりいでて人々と共に

積りなむと思ひつゝねし夜半の雪さればよけさゝ道もなき迄

船路のあはれなる事を思ひて

うしろめた心も玄らぬ船人に身をまかせてもゆく波路うあ

素行の會に人にあなづらるゝものといふ題を探り得て

いにしへの道もふみゝず位山みねにのぼるゝ危ふかりけり

やもめなる家　風ふけば草木も聲ゐたつなるを物いふべくもなき我身かな

大路に捨たる子

見つゝ行く心も悲しあいれされ子を思ふ道を思ひ捨てけむ

人のちひさき子を是子にせよとておこせたりしかば

おひさきを今より千代と祈りなむわが種蒔しお松ならねど

若き女の尼ふなるとき丶て

あさましや色も匂ひも花ざくらたれ墨染にさけといひけむ

女ども瀧見たる所

山とよむ瀧つ岩なみひとり來ばはるかに見てや立歸りなむ

恭うちたる所　思ふどちたゞうち向ふすさびにも生死のおゐある世こけり

猿の手して目ふたげる所

世中をいかで見ざると思ふらむ夢といふ物のおくべこそあらめ

花と月と雪とを寫せる一ひらの紙繪に

時鳥なかぬ氣色を見てぞ知るあくといふ事ゐおき世也けり

丸毛某が家の歌のむしろに五ばかりなる女のわらは母つれ來てこれに繪かゝせよといふ

に松か竹かなど書むと思ひつゝ何にてもゆきをべば歌よみてかくべしといひければやま

たち花なつゆしうゆきたるに

思ひきやまだ乳放さじみどり子の心の色をふでに見んとい

六十の春かしらおろして

春にあいむ身にもあらねば我と我頭の雪ゐけふぞゆちぬる

世をのがれておもふわたり旅ありきするところ神奈川の宿にやどれる夜歡樂極分哀情多と

かいへる事を思ひ出て

世をすて丶身のうき數をかぞふれば年の老ぬる一つこけり

おはぢの百年のたま丶つりふ法師ふ袈裟ふくるとて

同じくいけさとく見せむ墨染の夕べにならば空しかるべし

直義がむすめの三つばりにてなくありたる四十九日に初櫻折りてさむくとて

今をばし此世にあらば櫻花手にふれさせて見せましものを

淡海の人七十賀に寄鶴祝の心を

行末ゝ千世にあふみぞうねの野にかりゐん鶴の年を數へよ

梅百首歌よみける中に

から國の種とりきけど春毎に日のもとよりや梅ゝ咲くらむ

春寒きまどをとく〳〵朝な〳〵ひらくゝ梅のひらく也けり

初春にうつろふ見れば梅の花去年さゝぎばとうらめしき哉

梅さけど鶯またじ人まさじ羽かぜもねたしをられんもをし

せばき袖せばき庭にゝあまるかな一本うゑし梅のにほひの

ちらをして世をば經ねどもあだならぬ色こそ梅ゝ心高けれ

人ゝいさ我ゝ香にめでて梅をこそ花の王どゝ云まほしけれ

から人やいかに見るらむ櫻咲くおれ國にだに梅ゝをしむを

花百首歌よみける中に

あだなりとうき名さつるを春毎に花見る人の言ぐさにして

ゐはれいつ思ふことなき花ゝ見む風吹かぬ日ゝ霞さあびく

さくらばあ絶えてなしてふ漢國ゝ春れ心やのどけかるらむ

花咲けば人もゝさめぬ嶺の松なげくなそれも世の中ぞかし

同じくゝおなじ山邊のおなじ花おなじ心に見むひともがな

四の時さかせてしがなよのあゝの花ゝさくらの一種にして

やま櫻ちらず有りせば世中にあゞねの花ゝさきもさかぎも

ことさへぐ唐人あはれ一筆のさくらゑ見てや春をすぐらむ

立とまり去ばし花見るすがたにも人の心のいろゝ見にけり

みどり子の五の色もわかぬだに花をし見れば惜むべらなる

時鳥百首歌よみける中に

人傳に初音きゝつるほとゝぎす嬉しき物はかつゝねたまし

まてば來ず來ればはるかに過ぎぬなり片おもひなる時鳥哉

時鳥きゝおえきおえず中々にたど〳〵しきぞあはれまされる

郭公むかし去のばゝとめ來かしまがきの竹ぞおやのふる里

ほとゝぎす夕べと夜とあけぼのとなく聲いづれ悲しかる覽

時鳥ねざめにきくぞあはれなるうべこそよるを時の鳥なれ

人もがな花たちばなの薫れるを空に月さへほとゝぎすさへ

百千鳥ちどりゝ來ともほとゝぎすなが一聲に思ひかへめや

月百首歌よみける中に

行く月を惜しといふ〳〵宵々に我身や西へちかくなりなむ

いにしへの心ありけむ人なみに見る人月やいかに見るらむ

足乳根のおよびをさして月見よと教へけむ世ぞ老い戀しき

故郷を離れて秋の月を見ばいかばかりかいたもとをれむ

嬉しきをつゝむといふやこれならむ狹き袂わやどる月かげ

まきの柱太しきたてゝ住む人に萱がのきばの月を見せばや

雲間より思ひもかゞずもる月い驚くばかりさやけかりけり

遲くとも立待居待ふしまちの月もまち出て見てあかさばや

紅葉百首歌よみける中に

道ゆけばつゆ霜ふかし風寒しけふぞもみぢを見て歸りこむ

野も山ももみづる頃い青葉にてをらぬ木立もめづらしき哉

獨あるやどのもみぢ葉秋を淺みそも物いはぬ色にざりける

もゝぢ葉の多かる山を見てぞをる松も秋こそ色まさりけれ

雪百首歌よみける中に

聞きつとてねさむばゝりいなけれどもふくれば雪も聲い有けり

常見てし松やいづらい山の端いいづくも同じゆきのむら立

多枯のきくと梅とのなか垣にけさ咲きけりな雪のはつはな

うも墨の色になれるいみづぐきの岡の白雪くれんとすらむ

山ざくら木の下風のさえ〳〵て空にをらるゝ雪を見るかな

ふく風にちりかふ見れば胡蝶にて春おもはゆるゆきの花園

戀二百首歌よみける中に

世中にをしへずをるい戀といふたゝふたもじの心なりけり

思ふをもおもいずと何うらみけむ心々の世にてそありけれ

厭ふらむと思ふ心の占まさにあふべくも有らぬ人の氣色や

足乳根の目をさへ忍ぶ身と成ぬゆゑりもあらぬ人に馴つゝ

みどり子も厭ふ人をば厭ふべしなどてつれなき人の戀しき

厭ふといをる〳〵然も戀しきを思ふと聞らばいゐに去てまし

相思ふもなか〳〵悲しもろともに露の契よつゆのいのちよ

いつれにか思ひ定めむおもふ人見れば戀しく見ねば戀しく

恨みじよ思ふこなたの心よりあなたをつらき人となしつる
今いさい人やりならぬ戀の路いきうしと云ひて立歸りなむ

旅百首歌よみける中に

夕暮いたゞ〳〵去くぞ成にけるあしたに道い聞きて出しを
いそ此ゝゑ珍らしげなきわが宿を去のぶい旅の心なりけり
山越えしきのふ此なごり物うきを足いそがすな野路の村雨
都よりかもひ〳〵し不二の嶺も脊向になりぬ幾日きつらむ
古里に目なれしひとの玉章もたびの宿りに見れバなつかし
ふるさとに夢路かよへバ旅人いぬるまも足い休めざりけり
君が代い野にも山にも家しあれバ草を枕にむもぶ夜もなし

山家二百首歌よみける中に

山ざとにやすく世をやい盡してぬあはれ都の人のこゝろよ
やま深み光もかげも見えぬかな過る月日を知らぬのみかい
土壁を夜半のあらしに破られて思いぬ窓をけさい見るかな
山里に畫寐のゆめを結びしい夜半のあらしの名殘なりけり

松の戸をまつの嵐にたゝかれてあさいの夢を殘しつるかな
君が代をいとふにいあらぬ山里の心やすきを忍ぶばかりに

寄四時山家百首歌よみける中に

雪も消え氷もとけぬやま里にたてるや春のなき名なるらむ
山陰のかくれぬに咲くかきつばた憂世へだつる花の景色や
やま栗の花ちる庭のさびしきにさみだれ暮らす昨日今日哉
山里に庵去めしより人づていきかで年ふるほとゝぎすかな
秋たつといひもあへねバ奥山の槇の下つゆふちまさるなり
山ざとい見る人秋もなかりしをあらしにさえて出る月かな
下をもものこ去もいつしか絶にけり山里いくか雪のふるらむ

述懷百首歌よみける中に

子を思ふ道に心を盡すかなあるやうなしきおきやかなしき
妹脊ならぬ只おほ方の中にだに相思ふ人い得がさかる世や
何事もなげゝバ歎き歎かねバ歎かでもふる世におそ有けれ
いにしへの親の諫めし言の葉になみだの露を今ぞかけゝる